

共産主義

共産主義者同盟理論機関誌

戦闘的労働者は

共産主義者同盟に結集せよ！

左翼反対派と新しい前衛党

日教組大会の課題

労働の質と量

疎外論の探求。(一)

時評 ふたたび花田・吉本論争について

現代マルクス主義者の

古典的性格

民主主義的言辭による

資本主義への忠勤

——国家独占資本主義段階に

おける改良主義批判——

3

共産主義

第3号

1959・6・1

過渡的綱領

レオン・トロツキー著

資本主義の死の苦悶と

第四インターナショナルの任務

——第四インター創立大会において採択——

共産主義運動叢書 1

国際共産主義運動叢書 1

A5判 32頁 付解説 定価50円

リベラシオン社 発行

全日本青年教師集団編集

教育労働者

定価80円 季刊

第1号

勤評体制打破と民主教育の発展のために

島島の教師とその生活

私たちの町

群馬闘争

——主に前段闘争を中心に——

職場における勤評闘争と今後の課題

——都教組の一年間の闘いをかえりみる——

神奈川勤評騒動記

ソビエトの教育改革に思う

勤評闘争と日教組の課題

日教組定期大会方針案への疑問

「おてつな」で

葛飾における「都指導室の

一斉訪問」拒否闘争

科学的な社会的認識を育てるために

五八年度民研レポート『教育を国民のものにする』

渋谷敏夫

森凡

中村三郎

吉井享一

山坂内

山本五郎

山本五郎

井上実

山田祥二

上田芳子

高橋広子

鈴木五郎

鈴木五郎

革命的前衛党の確立のために

戦闘的労働者は共産主義者同盟に結集せよ……(2)

左翼反対派と新しい前衛党

佐久間 元……(5)

教育労働者の進むべき道

——日教組大会の課題——

井上 実……(15)

「労働の質と量」

「前衛」六月号の「トロツキズム批判特集」にたいする批判

加藤 明 男……(33)

「疎外」論の探究

——どのような探求か?——

森 茂……(43)

時評

ふたたび花田・吉本論争について

不破型構想の批判

浦川 敏……(56)

現代マルクス主義者の古典的性格

民主主義的言辭による資本主義への忠勤

国家独占資本主義段階における改良主義批判

姫岡 玲 治……(67)

革命的前衛党の確立のために

戦闘的労働者は共産主義者同盟に結集せよ！

全日本の革命的労働者諸君！

労働者階級とともに闘うインテリゲンチヤ諸君！

わが同盟が「階級対立にもとづく古いブルジョア社会の止揚および階級と私的所有のない共産主義社会を建設する」ために、全国各地方からの、共産主義者同志諸君の結集によって、第一回創立大会が開かれてから、すでに半年が経過した。

真の戦闘的方針をもとめて、日夜資本家階級との苦闘を続けているわが労働者階級にとって、同盟の結成とその活動の展開は、巨大な意義と影響をおよぼしている。

指導部の裏切りの方針の中で、非妥協的に闘いぬいた鉄鋼を中心とした春闘の下部労働者の中で、そして安保条約改定阻止の闘いをすすめる学生層の中で、全国に散った同盟員諸君の活動は着々とその成果をあげつつある。

同盟の中央機関は確立され、数百におよぶ細胞が建設された。続々と加入する労働者、革命的インテリゲンチヤの手によって、わが同盟は、わずか半年の間に、数倍もその組織を拡大した。

なによりもわが同盟が、資本家階級との闘争の先頭に立つものであることは、この期間の闘争によって立証された。

わが同盟こそ、真に戦闘的大衆闘争を指導しうる唯一の組織であり、わが同盟員こそ、いかなる権力の弾圧や迫害もおそれぬ革命的英雄主義の持主であることが、全国各地で立証されている。

安保条約改定を強行し、自己の体制を整備して、ふたたび海外膨脹の道をすすもうとする日本帝国主義ブルジョアジーは、東京においても地方においても強力となってきたわが同盟の活動に、次第にその攻撃のほこさきを向け

つつある。

参院選挙も終り、約半年におよぶブルジョアジーの政治的迂回作戦の時期は終りに近づきつつある。彼らはこの期間安保改定交渉を裏で進めながら、ひたすら地方選挙、参院選挙で自民党の強化と維持につとめてきた。

地方選挙、参院選挙は、労働者階級の影響力の若干の増加を示しながらも、安定的様相を強めている日本資本主義の現状を如実に反映した。資本家階級は、既成の労働者政党も、主要な労働者組織も、そのすべてが選挙闘争に解消されることによって、春闘も安保闘争も低調に終止したことに安堵しながらも、次の政治的進出をねらって準備を怠っていない。

参院選の後、彼らは、労働者階級にたいする新たな政治的攻勢にうつってくるであろう。

安保条約改定阻止の闘争はこの彼我の攻防の中心的争点となるにちがいない。

労働者階級は、改定批准阻止の闘争に重点をおくられ、ずらせるのではなく、現実の交渉をうちきらせ、調印を阻止するために、ただちに闘争の体制を強めねばならぬ。

わが同盟は、この労働者階級と日本人民の闘争の先頭に立って闘いぬくであろう。

わが同盟は「プロレタリアートによる全世界の革命的変革においてほかに活路はないことを確認し、プロレタリアート解放の第一条件たるプロレタリアートの国際的団結とブルジョアジーに対する明確な敵対的意識の喚起を阻んでいる公認の共産主義運動指導部とみずからをはっきりと区別し、それとの非妥協的な闘争を行い、新しい革命的階級政党の結成を目指して結成された。」(同盟規約第二条)

わが同盟は、主として日本共産党内の左翼反対派の人々を中心として、新たな進路にいたのである。

わが同盟のこのような方向は、当然にも既成の政党から、とくに日本共産党を支配する代々木官僚どもからの激しい攻撃と中傷を浴びている。

もちろん、われわれは共産党内下部組織にいる無数の革命的労働者諸君と、代々木の官僚主義者たちを混同するほどおろかではない。

しかし、日本共産党が「中立」政策の旗の下に、ふたたび三度実証ずみの階級的裏切りの道を歩む時、われわれ

は、「前衛」政党の名にかくれた改良主義と徹底的に闘う以外に道はない。すでに、わが同盟の活動を妨害することだけにその関心を集中している労働運動の一部と学生戦線においては、代々木共産党の役割は、まったく反階級的なものにてんらくしつある。

われわれは彼らがいかに「平和」「中立」の美名のもとに、ブルジョアジーとプロレタリアートの決定的な対立がおおいかくそうとも、日本労働者階級はかならずやかかる幻想をうちやぶり、日本帝国主義にたいする革命的闘争の道を進むにちがいないことを確信している。

労働者階級はみずから解放するためには、真の革命的前衛を結集せねばならない。いまこそ、いかなる日和見主義からも解放された前衛党の確立のためすべての共産主義革命家は結集しようではないか。

沖繩死刑法、ホーク国産、機密保護法の準備と、帝国主義者の攻撃は一層露骨となってきた。

われわれ共産主義者同盟は、帝国主義者にたいする闘争の先頭に立つとともに、革命運動の推進部隊として、みずからをきたえるために全力を上げるだろう。

プロレタリア世界革命の勝利のため

全世界の社会主義のため

革命的前衛党の確立のために

戦闘的労働者は共産主義者同盟に結集せよ！

共産主義者同盟

はじめに

—— いまなにをなすべきか？ ——

左翼反対派と新しい前衛党

全世界に組織されているプロレタリアートの公認の前衛組織である諸国共産党が、日和見主義の党に墜落し果てた今日、真に革命的な共産主義者が「何をなすべきか、」の問は、すでに発せられた。

第一次世界帝国主義戦争が火をふくと同時に、社会排外主義の立場に公前と移って、ブルジョアジーの忠実な下僕になりさがった第二インターナショナルの諸党にたいするレーニンとロシア・ボリシエヴィキの態度はどのようなものであったか？

「日和見主義にうちまかされた第二インターナショナルは死滅した。日和見主義を打倒せよ。」(レーニン)

これがレーニンの態度だったのだ。プロレタリアートの前衛党はひとたび結成されれば、永久に前衛党として存在しうるだろうか？ もちろん、そのような保障は、確定的にあたえられてはいない。共

佐久間元

産主義とプロレタリアートの血の歴史は、このことを如実に物語っている。マルクス主義の創始者によって、直接に指導された第二インターナショナルの諸党は、日和見主義に転落した。そして、レーニンはこの事実をまえにして、いかなる種類の妥協とも無縁であった。

今日の事態はどうなのか？

全世界の、公認の共産主義運動指導部は、日和見主義をその一身に体現しているにもかかわらず、その前衛党という名称のゆえに、生きながらえ、日々、プロレタリアートを欺瞞しおおせ、かつまたその全利益を裏切りつづけているのである。この党は、一枚岩の党という神話によって、あらゆる革命的反対派を官僚主義的に弾圧し日和見主義の温床として、存在しつづけている。ここにこそ、今日の真の共産主義者が、ふたたび、レーニンと同じように、日和見主義から分離し、日和見主義を打倒するためにたたかわねばならない理由がある。

一、日和見主義からの組織上の分離

革命家、レーニンの教訓を悲痛な想いで学びつつ、いまでは、レーニンの決意を自己の決意として、共産主義運動の公認の指導部がおちいった日和見主義を打倒し、世界革命をめざして闘う新しい前衛党の確立をはかりつつ活動している**共産主義者同盟**は、その組織論において、真にマルクス主義的立場を堅持することが絶対に必要である。

代々木所感派の官僚支配の火の粉を、いまや、わが身に浴びつつある代々木共産党の左翼の部分でさえ、トロツキズムの反革命性というドグマによりかかって、革命的翼にたいする「理論的思想的批判」を、「構造的改良派」の修正主義の立場からおこないながら、神話のまえに拜跪する道化役者の役割を演じている。この事実こそがもっとも明瞭に、なにびとの疑う余地もなく、かれらの立場を代々木共産党内部の派閥として性格づけているのではないか。そうであるならば、この派閥に属する一人が、革命的な左翼反対派を目して「派閥抗争」に終始するものと語ったことは、笑うべきことにはない。

共産主義運動の担い手である、ただ一つの階級勢力をプロレタリアートとして把握し、ドイツ革命の具体的展望を明らかにした若きマルクスは、次のように述べている。

「批判の武器は、もちろん武器の批判にかわることはできない。……しかしながら、理論といえどもそれが大衆をとらえるやいなや物質力となりうる。」(ヘーゲル法哲学批判序説)

カーチが見事に分析してみせたように、一定の時期に客観的に存在する階級意識の最高の可能性を、明確につくりだし、そのことよって、この客観的可能性と事実上の平均的意識状況との開きを、革命を促進する方向で埋めていくという意義をもっているのである。

このような階級全体からの意識的前衛の分離は、共産主義運動の全歴史の過程で、一回的におこなわれればそれでよいというものではない。各国において一度だけ、この組織上の独立がおこなわれ、前衛党が確立されれば、それで万事が終るということではけつてないものである。結成の当初において、革命的な方針のもとに労働者階級との生々とした相互関係を保っていた組織が、歴史の発展過程においてこの生々とした相互関係を喪失してしまい、日和見主義にまで転落する可能性を、歴史の弁証法はいくたびとなくしめしているのだ。

第二インターナショナルの諸党がそうであった。レーニンが鋭く分析したように、これらの党の指導部が、帝国主義段階における超過利潤のおこぼれにあずかる労働貴族の占有するところとなるにおよんで、これらの党は、決定的な瞬間に、自己を社会排外主義として完成したのだった。したがって、このときにこれらの党は、「ブルジョアジーの代弁者」になり下り、「一定の時期に客観的に存在する」プロレタリアートの階級意識の最高の可能性を表現するものではなくったのである。

歴史の現実の、この複雑な展開は、今日、同じような情景をふたたびプロレタリアートのまえに描いてみせている。

第二インターナショナルの日和見主義の打倒を通じて、真に革命的な前衛党の結成と第三インターナショナルの結成を実現したレ

そして、理論と実践とを媒介する形態こそ、組織なのである。組織という観点から問題が提起されるときに、はじめて、理論にたいする実践の見地からの有効な批判が可能になるのであり、これまでのあらゆる日和見主義は、この立場をまったく欠いているために、組織上の問題の意義をみる事ができなかった。今日にいたっては前衛党内部の決定的な意見の対立を、ただ理論的な対立の形だけにおしとどめ、そのことによって、結局は、反対派の抹殺を試みるのである。しかも、組織上の義務づけを不当に拡大しながら。

レーニンが主張したように、「政治的なものを、組織的なものから、機械的に切りはなすわけにはいかない」のであって、真の共産主義者は、理論における日和見主義からの分離を、組織における日和見主義からの独立にまでおしすすめないわけにはいかない。この点において、日和見主義からの組織的分離に必然的にもなう過渡期の一時期における戦術、日和見主義的組織の内部に存在する革命的部分を、自己の側に決定的にひきつけるために、その組織の内部にとどまって、革命的宣伝・煽動をおこなわなければならない、という戦術を、加人戦術として、固定化し、絶対化して「原則的問題」と把握し、過渡期の一時期を、長期的な歴史的一時代にまで、不当に拡大する第四インターナショナルの組織方針は、基本的に誤謬である。しかも、なおその上に、「純粹トロツキスト」の中核を幻想し、大衆団体の内部にまでセクト的組織方針を持ちこむのが、わがトロツキストの諸君なのである。

「プロレタリアートが経過する種々の発展的段階においてプロレタリアートの全利益を代表する」(共産党宣言)ものとして、階級全体からの意識的前衛の、組織上の独立を表現する前衛組織は、レーニンの指導のもとに、社会民主党から共産党への脱皮をこげたコミンテルン諸党は、レーニン死後のスターリニストの裏切りによってソ連邦の歪曲された過渡期国家に物質的基盤をもつ、特権官僚層の党へ変質し、この党はソ連邦の「社会主義」の絶対化と、世界革命を直接に裏切る平和共存政策とに利益を感じる**日和見主義への転落**を完成してしまった。

しかも、第二次世界帝国主義戦争後の現在にいたって、原水爆兵器を掌中におさめたブルジョア権力の下でプロレタリアートは、この権力打倒のための唯一の途である世界革命ではなく、この権力との平和的共存を強いられており、「人類破滅」の危機意識にさらされてさえるのである。だからこそ、真の共産主義者によって、今日の日和見主義の打倒が提起されざるをえないのであり、この新しい前衛組織は、今日の状況下におけるプロレタリアートの階級意識の最高の可能性を表現するものとして確立されざるをえないのである。

しかもこの新しい前衛組織の確立は、既存の日和見主義組織との激しい闘争の過程をへて、この日和見主義の打倒を通じておこなわれるほかにないのである。階級全体からの意識的前衛の、組織上の独立は、真に革命的な部分の、既存の日和見主義組織からの分離の過程として表現されねばならない。

この過程は、公認の共産主義運動指導部の力が、まだ大きく、意識的前衛の力が、まだ相対的に小さいだけに、多くの困難をともなうであろう。しかしながら、この過程において不可避免的に存在する過渡期の一時期は、革命運動の利益のために、少しでも短縮されることが必要であり、そうでなければ、革命的左翼は一個の宣伝団体

にとどまらざるをえないだろう。

そして、この分離の過程を特徴づけるものはなにか？

それは、流動する現実の革命運動の状況なのだ。日和見主義からの組織的分離の過程の最初の時期において、革命的左翼の組織上の中核、既に強固な中核の存在を予想することは、はなはだしい誤謬におちいることになる。分離を必然ならしめる過程は、なによりもまず、現実の運動の進展によって特徴づけられるのであり、当時においてすでに前衛組織の存在を予想することは、自家撞着におちいることである。もちろん、分離の過程を長期的なものではないと断定することは正しくない。しかし、その過程を寸秒でも短縮することに失敗するならば、それは必然的に、一個の宣伝団体にとどまるほかないのである。

日和見主義からの組織的分離は、決定的に、断固としておこなわれ、寸秒を争って、労働者階級の多数を獲得することに努めなければならぬのだ。現実の前衛組織は、運動の革命的昂揚の時期に運動の内部において、これに影響力を持ちうるまでに指導性を発揮しつつ、プロレタリアートの意識の前衛を一人でも多く組織する過程でのみ成長してくるのである。

分離の瞬間に、純粹な中核の存在を予想し、極端なセクト主義におちいる人びとは、前衛組織と、その個々の黨員との関係においてその「形式倫理的」側面を組織問題全体の唯一の原理として把握しているのであり、その組織の革命的規律は、レーニンが指摘したように、黨員の献身ということと同時に、党と大衆との生々とした相互関係、とりわけ党の正しい政治的指導であることを看取しえず、同時に、大衆との生々とした相互関係を失わない革命的实践によっ

二〇回党大会における上からのなしくずしの「スターリン批判」によって、困難を乗り越え切ろうとした。そして現実のスターリン批判の衝撃は、ハンガリア革命として火をふいた。

六全協 後、党の日和見主義的指導を、自己の革命の方針によって批判しつつ、学生運動の全体の昂揚をもたらす過程において、スターリン批判を受けとめた革命的部分は、三十余年来の「マルクス主義の創造的發展」の歴史を、マルクス主義の客観主義的歪曲の歴史として断罪し、マルクス主義理論の分野において、真のマルクス主義の革命的再生のための活動をはじめたのであった。そして同時に、スターリン主義の打倒は、「哲学を止揚する」途をたどって革命的实践の中へ持ちこまれていった。

全世界の公認の前衛党は「トロツキズムの反革命的反社会主義的本質」について、それが共産主義運動の貴重な経験として、確認済みのものとして語っているが、レーニン死後の共産主義運動の歴史的教訓を、多少とも真剣に検討する労をいとわぬものにとつてはこれが卑劣なドグマであることを看取することは容易なはずである。

革命におけるプロレタリア的性格を主張する部分、国際的には、モスクワ共産党のヘゲモニーを拒否する部分、一国的には、指導部の方針に反対して、かれらの官僚支配を危くする部分等々。これらにたいしては、右と左の見境いもなく投げつけられるのが、トロツキズムの烙印であることは、何びとの眼にも明らかである。

第二次世界帝国主義戦争の末期、フランスのバリ蜂起の際に、ブルジョアジーの手から権力を奪取することを提唱した共産主義者たち、モスクワに反旗をひるがえしたユーゴの共産主義者たち、ブルジ

てのみ、強固な前衛組織の確立が可能なのである、ということに気がつかないのである。

分離の過程を経過する革命的翼が、現実の階級闘争の中で、既存の指導部の日和見主義の方針にたいして自らの革命の方針を公然と対置し、闘争を現実に指導する部隊としての力量を蓄えることに成功することがなによりも必要なのである。このことに成功してはじめて、プロレタリアートの意識的部分を自己の隊列に加えることができる。革命的労働者を独自の前衛組織に、日和見主義の諸組織から区別して組織することに成功するときに、新しい組織は一個の宣伝団体にとどまることなく、新しい真の前衛党として成長するであろう。

日和見主義の党からの理論的組織的分離を、プロレタリアートの階級闘争の鉄火の中で、革命的労働者を自己の組織に独自に組織する成功の過程においてなしとげること、これが新しい前衛党を強固に確立する可能性を保障する唯一の方法なのである。

二、左翼反対派の結集と新しい前衛組織

日和見主義の既存の前衛組織から左翼反対派が分離して、本質的にプロレタリアートの革命的な前衛組織としての基本的性格をもった共産主義者同盟が確立されるにいたるまでの全過程は、左翼反対派の諸分派の統一戦線的な反代々木の闘争によっていざどられて

いる。

下からの革命的胎動におびやかされたソ連邦共産党の指導部は、
「アジーとの闘争を強調したインドの共産主義者、戦後、ただちに社会主義革命を主張した日本の共産主義者。様々な色合いをもった、これらの部分がすべて、「トロツキスト挑発者」であった事実は、歴史的な文書がふたたび抹殺されなにかぎり公然の事実なのである。

だからこそ、代々木共産党の内部で戦術的に左翼化してきた革命的翼は、スターリニストのドグマからトロツキズムを奪還しなければならなかった。左翼反対派として、終始、スターリン主義の日和見主義と闘って、その生涯を閉じたトロツキーの理論の、スターリン主義にたいする決定的な優越性によって、この部分は開眼されたのである。

しかしながら、このことは左翼反対派が、すべて同じようにトロツキズムを撰取したということ必ずしも意味するものではない。ひとしく左翼反対派とよばれる部分に、二、三の先達のエピソードとして、トロツキー・ドグマチズムにおちいった部分と、そうではなく、トロツキズムを主体的に、革命運動の前進のためにとらえかえし、そのスターリニズムにたいする基本的優越性とともにその欠陥、とりわけ現代の垂流にいたって、抜きがたいまでに固定化されている弱点を、自ら克服してきた部分とが存在している。もちろん、左翼反対派の諸部分が、公認の日和見主義党の打倒の目標において一致するかぎり、この目的のために統一行動をくむ様々な可能性が追求されることは疑いないところなのであって、これを絶対的に拒否することは許されるはずもないだろう。

しかしながら、いまでは、反代々木の闘いのための左翼反対派の無原則的な行動の統一について語ることは、新しい前衛組織を確立して、世界革命の一貫としての日本における革命を有効に促進する

立場からするならば、十分に慎重でなければならぬ。

左翼反対派の諸部分の、当面の戦術の共通目標の実現のための統一戦線を結成し、あるいは統一行動をおこなうという方向は、何びこの眼にも明らかなることのようにおもわれている。マルクス主義の革命的本性の再生のための理論活動において積極的な役割をはたしてきた黒田寛一は、かつて革命的反対派の組織上の問題を論じたことがあった(五八年三月、探究三号)。そこにおいて黒田は正当にも、トロツキーの垂流たちが、組織的中核の純粋性にこだわってセクト主義におちいっていることを指摘した。そしてかれは、「実践上のセクト主義は、じつに理論上の教条主義の必然的な結果でありそれが現実的なあらわれである」という立場にたつて、多くの正しい指摘をおこなった。

「焦眉の課題は、じつに統一戦線、戦術にある。ただもっぱら真に革命的な左翼反対派の創造を目標とするだけでなく、同時に中央指導部や幹部連に不満をいだき、かつ抵抗しつつある一切の反対派勢力と提携し、それらと統一戦線を結集したり、あるいは統一行動をとって当面のわれわれの目標を有効的に実現してゆくのでなければならぬ。共通目的を実現するための統一戦線と統一行動の問題を忘却して、目的を実現するための手段としての中核組織の結集と強化のみを自己目的化するの、まさしく逆立ちである。」(傍点原文)

このように、左翼反対派の組織上の問題提起をおこなった黒田は「もちろん、このような統一行動をなすことは、革命的な統一戦線の中核組織の理論的および実践的な骨抜きを、なんら意味するものではない」という重要な指摘と同時に、この中核組織の性格

を次のように規定したのである。

「この中核組織は、ただトロツキズム一辺倒の教条主義者の集合体であるべきではない。むしろトロツキズムをも自らの一契機としてつつみこみ、現代のマルクス主義を創造し、かつ現実へ物質化せんとする実践的な立場に立脚した真の革命的共産主義者の強固な中核体でなければならない。かかる中核体の理論的支柱は……創造的革命的マルクス主義でなければならない」

しかしながら、このような組織上の展望に立ちながらも、なおかつ、黒田が、「革命的高揚期における既成諸政党の動揺と瓦解にたいしてわれわれがうつべき手は、既成諸政党の内部の動揺分子や革命的労働者たちを反対派の中核組織(たとえばトロツキスト連盟など)にひきつけることだけあるのではない。むしろこの中核組織が従来の形式をすすんで破棄することにより、新しい形態——たとえば日本トロツキスト連盟などに所属したり統一行動したりする革命的諸分子を中核とした革命的共産主義者の結集体としての新しい共産党——を創造するでなければならない」(傍点原文)と主張するとき、新しい前衛党をつくりあげる力は、左翼反対派の統一行動よりもなによりも、現実の大衆闘争における指導性の恒常的な獲得であることについての指摘が弱いことが批判されねばならないだろう。

「創造的マルクス主義の立場にたつ革命的共産主義者を中核とする」ということ自体が、いかなる立場において、いかなる行動によって為されるのかを追求されなければならないのである。さもなければ、この中核なるものは、革命的インテリゲンチヤのみを主体とする一個の宣伝団体にすぎなくなってしまうにちがいない。理論の(四)、五月闘争が、何びとも否応なく、このことを強制したのだ。」「たちまち組織上の問題に委らざるをえなかった」(ルカーチ)のである。

春闘をたたかった日本の労働者階級は、現在、「危険な状況」にたちかいたたと語られている。今年の春闘を特徴づけるはずだ。た、ブルジョアジーの「合理化政策」は、一昨昨年と不況の中で資本の集中・独占を強化した大ブルジョアジーが、現在の状況の中でこそ、日本経済の「体質を改善し」、固定資本を近代化し、労務費をへらし、搾取率をあげて利潤を拡大し、世界市場の争奪戦において勝利をおさめて、資本の海外輸出を増大させて、帝国主義的進出を強化しようとする企図の現れであった。

このような状況の中で、総評は、春闘を経済闘争に高次の政治要求をつけ加えた「総労働対策総資本」の闘いとして性格づけたのであるが、一月中に単組の体制づくりを終り、二月中から闘いに入ると、二月下旬から三月上旬をヤマとするというスケヂュールに端的にうかがえるように、「経済要求と高次の政治要求の結合」とは、実力闘争は、合理反対闘争を中心としてたたかうのではなくて、いかにげん金賃闘争だけで、あとは空文句と選挙、ということにすぎなかったのである。

総評主流に反対する部分においても、たとえば代々木共産党にしても、現実にはブルジョアジーと闘っている労働者階級にたいして、「警職法闘争の力を安保闘争へ」という変り映えのない方針に、さらに中立方針をつけ加えてだし、経済闘争と政治闘争との結合と

正当性は、ただちに組織上の中核を可能とするものではなく、けっしてないのであって、理論を実践に媒介する組織の確立は、意識的前衛の革命的实践によって、現実の階級闘争を革命を促進する方向へ指導し、プロレタリアートを自己の側へ組織する意識的努力がこの闘争の過程で十分に發揮されるときのみ、成功するのである。

左翼反対派諸分派の統一行動と統一戦線の結成は、観念的に強調されてはならないだろう。新しい前衛組織は、これら諸分派の統一戦線の中から、直接に成長してくるということはけっしてないのであって、いかなる部分も、階級闘争を、革命を促進する方向で指導することに成功し、かつプロレタリアートを自己の組織に加えることに成功するかによって左右されるにちがいない。そして、このことは必然的に、新らたな分離の過程をも予想するのである。

三、新らたな日和見主義の抬頭

ひとしくトロツキズムの洗礼をうけ、共産主義運動の公認の指導部の「一国社会主義建設」と「平和共存政策」の日和見主義に反対する革命的翼の内部にも、決定的ともいえる理論上の対立が存在している。そして、この対立は第四インターナショナルの評価をめぐる論争から、安保改訂を阻止する現実の階級闘争の過程で、一挙にいわば地上にひきもどされざるをえなかったのである。ルカーチがのべたように、「理論を出発点として、最も妥当な行為に必然的に通ずるような契機」(傍点原文)を発見しようとしたときに、理論と実践とを結合する、「本質的な解決策」を求めねばならなかったのであり、理論的対立が、みずからたんなる理論や、抽象的な考え

いう空文句を連発して、現実の経済闘争を進めるうさでの指導方針を全く示さず、闘争をうちきって選挙へ突入するという議会主義的方針を、何びとにも負けず主張したのであった。しかもこの党は、昨年十二月一日の「アカハタ」の主張で、ちょうどこの日におこなわれた総評常幹の方針とまったく符合する、「来年の春闘は、政治闘争と経済闘争とが結合した大闘争になる」と語り、現在では「資本家は労働者の力だけでは破れないから、国民的な闘争で打ち破らねばならない」と、無条件に総評を支持し、労働者階級を裏切ったのである。

プロレタリアートのすべての指導部のこの日和見主義的裏切りのゆえに、労働者大衆の間からは、組合不信の声までがあがってきた。いまこそ、日和見主義者の改良主義的方針にたいして、革命的な方針と指導と目標が、明確に設置されることが、絶対に必要なのであり、活動家を共産主義の理念の下に結集し、革命的労働者を、真に革命的な新しい前衛組織に結集するための明確な組織方針が提示されねばならないのである。

革命的方針によって、現実の労働者階級の闘いに目標をあたえ、新しい前衛組織へ獲得して行く活動は、国際的な視野から階級的立場に断固として立ち、プロレタリアートの階級的利益のためにたまたから活動家の、広汎な大衆的組織を確立する活動と切りはなされては、絶対にならない。このような活動家組織を、現実には無視し、セクト的な自称前衛組織の内部へ、一人一人を獲得する努力だけでは、プロレタリアートの内部において、新しい前衛組織の根を強固に据えつける必要はもろろん疑う余地がないとしても、結局のところ、ピラミッドだけに終始する少数の革命的インテリゲンチヤの集団

にとどまらざるをえないであろう。国際主義共産党、あるいは革命的共産主義者同盟が、プロレタリアートにたいする、このような組織的展望を持ちえないのは、これらの組織が、組織論における日和見主義に毒されているからにはほかならないのである。

ブルジョアジーの野望の表現である安保改訂を粉砕するための闘争の過程において、左翼反対派内部の、トロツキー・ドグマチズムに犯された新たな日和見主義の擡頭が、顕在化した。それは、一九三八年の第四インターナショナル創立協議会において、トロツキーによって提出された「過渡的綱領」の誤謬を拡大再生産するものとしてあらわれている。最小限綱領と最大限綱領の橋渡しをするといわれる「過渡的綱領」は、当時の情勢を、「おとろえつつある資本主義」と、直接性において把握することにより、「過渡的綱領」を固定化してしまい、ブルジョアジーの権力の打倒と切りはなして、「過渡的綱領」を絶対化する今日の亜流を育くんではまったのである。

「実際、それらの中のあるものは、今やアメリカにおける統一せるAFL-CIOからポリヴィアのCOBやチリのCUTに至る、種々の労働組合組織の公式の綱領の一部である。」(パブロ)このようにさえ主張した第四インターナショナルの主流をなす指導部が、今日、日本において高々と掲げられている、「炭鉱の無償国有化」「社共の統一戦線政府」「労働者政府の樹立」等々、国際主義共産党や革命的共産主義者同盟のスローガンをみたならば、おそらく、我が意をえたりと思うにちがいない。今日の階級闘争の現実の中で左翼的なスローガンを掲げるこれらの部分が、現実の闘いの中で必然的に改良主義におちこみ、戦術面での右翼日和見主義に転落して代々木共産党との融着を示し、組織上のセクト主義として、自己を

仕上げざるをえないのは至極当然なことである。

さらにまたこれらの部分は、安保闘争に対立させる形で、労働者階級の闘争の中心的課題を「合理化反対」の闘争として提起している。このことはかれらが、現実の闘争を指導する能力を全く喪失していることを物語っているのだ。労働運動の今日の危機的状況は、合理化反対を闘わなかった幹部の裏切りと、それにたいする根本的な批判を方針として、うちださない日和見主義的な諸組織によってもたらされたものであり、今日、闘う目標も、方針もあたえられないところから、一層この危機的状況が深刻化しているのである。これを闘わせる方向で切りぬけていくこそが、現在もっとも重要なことであり、政治闘争としての安保闘争がその重要な契機の一つをなしているのである。この観点にたつことができないがゆえに、かれらにプロレタリアートの中心的課題から、無媒介に、直接的に、現実の闘争の渦中へすべり下りてくる。そして、現実的な、なんらの有効な方針を一つとして具体的に提起することができないのである。

さらに、プロレタリアートの課題を、これまた、無媒介的に学生運動の内部に持ちこむ結果として、実践的に闘うことができず「学生運動の転換」を学生全体のものにするという空論の上に安住してイデオロギー活動の強化や討論集会によって、このことを実現する以外に手がなくなってしまうている。情勢の極左的把握は、そのまま、実践上の日和見主義として表現されるのだ。

前衛組織を自称しながらも、組織方針をもちえないがゆえに、プロレタリアートの階級闘争を中心に据えて、あらゆる階層の統一行動を、革命を促進する方向で指導しうる可能性を、完全に奪われて

しまつてさえている、これらの部分は、すべての運動に前衛の役割を担わせようとするのであり、組織上のセクト主義とらばらな、左翼反対派の無原則的な統一戦線戦術に腰を落着けざるをえなくなくなってしまうのである。

理論上の相異は、現実の闘争の中で、必然的に組織上の問題を提起した。いまこそ、**新たな日和見主義と理論的組織的分離を促進し、プロレタリアートの階級闘争の鉄火の中で、闘争を実際に指導し、プロレタリアートの多数の獲得に全力をあげて、名実共に共産主義者同盟を新しい前衛党として確立することが、緊急な課題として提起されているのだ。**このような前衛組織の存在なしには、左翼反対派の統一行動や統一戦線は、たんなるラウド・スピーカー的な力しか發揮しえないだろう。

四、ふたたび第四インターナショナルについて

スターリン主義者の牛耳るところとなったコミンテルンの日和見主義の打倒をめざして、国際的な左翼反対派として一九三八年に結成された、トロツキーの第四インターナショナルは、トロツキズムの組織論における誤謬と「過渡的綱領」の誤謬の絶対化とを内在的原因として、今日では、世界革命を遂行するインターナショナルとしての存在価値を失ってしまったている。

黒田寛一はかつて(探究二号その他)、主としてトロツキズムの組織論の誤謬の側面から、第四インターナショナルにたいする有効な批判を展開したのであったが、その後にはたつて(探究、別冊第

一号、現代における平和と革命）、『反帝国主義』という概念は、普遍的には、世界革命の完遂を、特殊的には実現された労働者国家の擁護を、個別的には各国の種々の資本制国家権力の粉碎を、それぞれ意味する根本的で統一的概念である」として、それがけっして「第四インターの基本路線を否定するもの」ではない、ということをも強調している。

「労働者国家の擁護」ということが、ソ連邦その他の「社会主義」と世界革命戦略の把握の全くの無理解からでてくるものであり、実践的には有害でさえあるという点については、既に多くの同志によって語られている（共産主義、一号、二号）。問題は次の点にこそあろう。

「日本国家権力の打倒をプロレタリア世界革命の一貫としてたたかいてらう」としているわれわれの闘争は、それゆえ同時に、反スターリン主義として展開されなければならない。それがわれわれの闘争の当面の主要な環である。そして当面のこのような闘争の実体的基礎は、スターリン主義の汚物で充満している代々木共産党官僚を打破しつつ、革命的共産主義者の結集体としての新しい前衛党を、スターリン主義路線と敵対して闘争を展開している第四インターナショナルの一環として組織化することにある。それなしには、日本革命を世界革命の一環としてたたかいてらうことはできないからである。」（強調引用者）

実践的な観点にたえず、対象の政治的経済的分析を媒介しないがゆえに、普遍、特殊、個別という概念を、世界革命、労働者国家の擁護、各国のブルジョア権力の粉碎、というように、機械的に適用せざるをえない黒田の弱さは、新しい前衛党を確立するための組織

論上の実践的な観点を欠除した統一戦線戦術の誤謬を、国際的な視野においては、「第四インターナショナルの一環」として、これまた、統一戦線戦術を適用する仕方ではか把握することができないのである。しかも、組織論上のこれらの誤謬は、「第四インターナショナルのトロツキー政治綱領の正当性」（強調引用者）という、黒田の政治的経済的把握の弱さとも密接に結びついているだろう。

左翼反対派の中核としての新しい前衛組織は、国際的にも、国内的にも、反対派諸分派の統一戦線戦術の中からは、絶対に成長してはこないのである。現実の階級闘争の過程において、理論上の相異を組織上の問題として提起し、あらゆる日和見主義からの理論的組織的分離を、革命を促進する方向で達成しつつ、闘争を指導する方針を提起し、かつまた、プロレタリアートを獲得する活動によってのみ、はじめて新しい前衛党は確立されうるのである。新しい前衛党を確立するための、このような条件を満たす活動がなくては、左翼反対派の統一戦線は、実践的に無意味なものとなるだろう。

（一九五九、五、二一）

教育労働者の進むべき道

—日教組大会の課題—

井 上 実

部、中幹部のさまざまな裏切りによつてはぐくまれてきた妥協的右翼部分がその反対派をおさえて勝利することを心ひそかに期待している。

ジャーナリズムは、大会がいかに勤務評定闘争を総括し、教育労働者の闘いの方針をつくりあげるか、という問題より、人事問題にその焦点をしぼってみかまえている。

こうした注視のなかで開かれる日教組第二一回定期大会の果すべき任務はなにか。

朝鮮戦争を契機として、日本の独占資本がたちなおり、強化されてくると、彼らは労働者階級にたいする全面的な攻撃を開始した。この攻撃のなかで、もちろん、教育も教育労働者もその対象の例外ではありえなかつた。

この攻撃は、教員の政治活動を禁止する教育二法から露骨におもてだつたものとなり、保守合同のち、いよいよ教育三法案の登場となつて全面的なものとなつた。これは、いうまでもなく、任命制

六月十日より高知において日教組第二一回定期大会が開かれようとしている。ここ一年、数多くの労組の会議のなかで、日教組の中央委員会、大会ほど注目されたものはなかつただろう。この日教組第二一回定期大会もまたそうである。五七年まつの十六回臨時大会で発せられた非常事態宣言以来、一年半にわたつて日教組が全組織をあげて闘ってきた勤務評定粉砕の闘いは、当然この大会の中心点であり、この闘いの具体的な総括のなから、大会は明瞭な方針を全教育労働者に示す任務をもっている。

一方、文部省は、とにかく五八年度は勤務問題の年であつたが、五九年度は「地ならし」教員再教育プランに示される教員再教育の年であるとみせかけて、勤務闘争を過去のものとして忘れさらせようとしている。また、はげしい闘いのなかで、まったく悪質な大幹

教委法案と教科書法案、そして臨教審法案の三つである。

ボス支配をめぐりた地教委の実施は、彼らの急速な、そして全面的な攻勢の武器としては不十分であることを千葉官公労機関連問題などで知ると、彼らは教育行政権の完全な掌握のために、任命制教育委員会という直通パイプを敷設し、教育内容は教科書法案をもって統制し、さらに臨時教育制度審議会設置法案による長期の、大学をも含めて全般的な教育制度の再検討と再組織をめぐしたのである。ここに彼らの全面的な対教組および対教育制度攻撃の政策の砲列がしかれた。

しかし、この彼らのプランは、もう一つの課題であった小選挙区制法案と、この教育三法案にたいする労働者階級を中心とした闘争によって、任命制教委法のぞいてすべて粉碎されたのである。

こうした反撃のまえに、彼らのプランの遂行は若干の停滞や混乱をよぎなくされたが、五六年十月の任命制教委の実施を軸に、彼らの砲弾はつぎつぎと教育労働者の頭上をおそってきた。いわく、F項バージ、執筆者辞退事件、教育長会議、学校長会議、道徳科特設、教育課程の全面改定、学校管理規則の制定、管理職手当、大学設置基準、黄色組合の結成など、など。

五七年の春闘の質上げ闘争と五月の首切り反対権利擁護の闘いにおいて国鉄労働組合を中心に示された激しい労働者階級の革命的エネルギーの爆発は、新潟闘争にたいする中央の中止指令といった幹部の裏切り、十月闘争の空振りと屈辱的な藤林幹旋案の受諾となつて敗北をよぎなくされたが、この国鉄労働者にたいする集中的な攻撃が一段落すると、彼らは、教育労働者を次の集中砲火の目標にあげたのである。

任命制教委と学校管理規則などを軸に、日教組に最後の打撃を与えるべく勤務評定の強行実施が企図されたのである。

愛媛闘争のあと、五七年すえの日教組の非常事態宣言は、まさにそれをうけての戦闘開始の宣言であった。この闘いは、すべての教育労働者に中間的な、あいまいな立場にとどまることを許さなかった。全体として日本の労働運動が、支配階級と日和見の幹部のインシアティブのもとに長期底姿勢論といわれる闘争放棄の傾向をたどりはじめた段階において、ブルジョアジーの側からの系統的な攻撃とあらゆるマス・コミを動員しての妥協的な世論形成の集中砲火を受けながらも、ホワイトカラーの組合といわれ、かつては労働者階級の後衛にやっとなつて位置づけられた教師の組合が、敢然として一切の妥協を排して高姿勢で闘争を前進させ、さらに、いち早く警職法粉砕闘争の原動力となつたことは、まさに世界の労働運動の歴史にその例をみない劃期的な闘争であったといえよう。ブルジョアジーはここに教育労働者の闘いによって震撼せしめられるという恐ろしい経験を体験させられたのである。

こうして五八年、勤務闘争が全国のすみずみにその波紋をなげかけるなかで、一方では闘いの理論、あるいは教育論、教育観という形で、さまざまな見解があらわれてきた。

戦後の教育改革の評価、そして勤務に代表されるブルジョアジーの攻撃をなんともみるか、またわれわれのめざす教育はなにか、といった設問に、あらゆる潮流がさきをあらそって回答をだそうとしてひしめきあい、また新たなものにとつてかわられていった。

ここでは、勤務闘争の教育的意義が強調され、教育の理想が「未来の日本」との関連で語られ、「民主国家」が目標となり、その壮つとしての攻勢のなかで評定書提出を阻止しようとした闘いは、そしてついには周桑郡などの孤立したなかでも屈しなかった闘いはブルジョアジーに教育労働者の闘争力のおそろしさを心の底までしみわたらせた。こうして幕を切っておとされた九一年余の勤務闘争、それを、とうり一べんの抽象的一般的な自己批判や、責任の下部への転化による居坐りや開きなおりではなく、具体的に、しかも大衆的に総括するなかで五九年度の闘争方針と、それをうらずける体制を確立すること、そのことが大会がはたすべきことではないだろうか。

五七年十二月、必死にねばりぬきながらも、ついに闘いを一旦終らせねばならなかった愛媛教組二十九回臨時大会で、西宇和、周桑などの未提出地区の代議員はいった。

「教員の良心からどうしても書けんとして反対しつづけてきた勤務評定を、今さら提出せよという原案には納得出来ない」「昨日までわれわれは子どもと教育を守る闘いだと呼びつづけてきた、多くの父母もわれわれの叫びを理解してくれているのだ。ここでわれわれだけが腰だけになっていいのか」と。

しかし、激しい八時間余りの討論のあと、結局「この段階では事態の解決をはかるべきだ」という執行部案を了承し、全国的な闘争への発展を期する以外に、この汗と砂ぼこりにまみれてすみあげられた苦闘の経験は生かさないことが確認されたのである。そしてそれから十日のちに日教組第十六回臨時大会が開かれた。

十二月二十日、全国教育長会議は、さきに決められた全国教育長会議幹事会の勤務評定案を了承し、四月に全国一斉にそれを実施することを確認した。文部省は都道府県各教育委員会がこの案を参考と

大な未来への地図のなかで、教育は歴史を動かす原動力、ないしはそれに近いものとして位置づけられる。それらは「民主的教育を確立する」「教育を国民の手に」と呼び、国民教育論と総称される一団の理論となつてあらわれる。

こうした既成の理論家の理論は闘いのなかで明瞭にあやまりであり、逆に闘争の足を懸命にひっぱって混乱をもちこんだことが明らかになつてきた。そして、ついには闘わんとする教育労働者がこれとの闘いをぬきにして闘いは発展しなかつたといわざるをえないままでにいたつてきた。このことはまた、発展した現実の闘いによって既存の理論家のあやまりがうきぼりにされてきたともいえる。

ブルジョアジーはかくかくのこをするものであると論じていることによつては絶対に前進することはできない。それよりも、なにかがゆえにかかる勤評実施が現在うちだされ、またそれとどのようにならうかによつて闘いがすすめられ、またなにかが闘いのより一層の発展をおしとどめたかを具体的に総括することによつて、明確な闘争方針を確立し、そのもとにおける闘う組織的な体制を急速にうちたてねばならないだろう。

しかも闘いの総括は、自から闘ってきたものによつておこなわれこれだけの大闘争のなかからだされた貴重な教訓と今後の展望は大衆的なエネルギーとされなければならないのだ。

二

六十四日間の「皆んなで闘った」愛媛の教育労働者が果教委、県当局、警察権力、自民党などの独占資本の政治権力のあらゆる手段を

し、速やかに勤務評定を実施することを強く希望するという大臣談話を発表した。愛媛の闘いを全国的な闘争として勝利することをしなかつたこと、すなわちその敗北は、ここに全国的な勤務実施の突破口を開かせた。勤務評定は全国的な闘争の段階に入った。そのことは、同時に闘いも全国的な闘争として、日教組全体が全組織を挙げて闘わなければならないことを意味した。

日教組第十六回大会は、愛媛の闘いを厳密に総括し、闘いの方向を打ちだすべき任務を課せられていた。大会は段階的敗北主義や永久抵抗論などを十分に克服していたとはいえなかつたが、最後の段階においては休暇闘争を含む強力な統一行動をもって闘い、実行使をもって勤務の実施を阻止するという基本的態度と方針を五十万の教育労働者に示すという任務を果たした。そして四八年マッカーサー書簡による労働三権の剣奪にたいしてだまされたとき以来、二度目の、そして日教組独自でははじめての非常事態宣言を全員一致で確認したのである。

愛媛を崩すことによって突破口をきりひらいた政府自民党は、つづいて四月一斉全国実施をめざしてつぎつぎとその布石を打ってきた。彼らはつづいて岩手、愛知、富山をその対象に設定し、愛知、富山で強引な抜き打ち実施、ないしは妥協の形で突破した。こうして四月一日、首都東京での突破をめざし、これで全国実施の主要な布石にしようとした。

ひとたび闘争に起ちあがれば巨大な闘争力を發揮するだろうが、執行部を日和見幹部によって握られているために「眠れる獅子」となっている東京を突破すること、それと並行して各県で強行実施すれば、日教組左派の拠点といわれる近畿、四国も容易に包圍するこ

とができよう、と。東京は、四月全国実施を許すか、阻止するかの鍵を握っていた。

四月二三日、都教組四万の教育労働者は勤務完全粉砕のために敢然とストライキで起ち上った。組織教育労働者のこの未曾有の激しい闘争は、決定的段階における勤務闘争を大きく高揚させ、ブルジョアジーに日本の労働者階級の抵抗の巨大さを思い知らせた。そしてこの闘いは全国五十万の教師にこれこそが闘いであり、またこれでこそ闘いぬけるという確信を与えたのである。

しかし、この闘争は決してたんたんなる発展の道を行んだのではない。むしろ、幹部のあいまいな、妥協的な方針をのりこえて進んだ下部組合員の大衆的エネルギーこそがもたらした闘いではなかつたか。さらに、なぜ教師がこれだけの巨大な闘争をおこなないながら、そのおなじ日に勤務の実施を許したのか。そして、この日に結集されたエネルギーはなぜ即座に次の闘いを開始しえなかつたのだろうか。問題はまさにここにある。

一月十七日の都教組第十六回中央委員会が「最悪段階には休暇闘争を含めた実行使を以て闘うこと」を決定した。だが、都教委が一月早々から小中学校長会や地教委に試案の説明をはじめ、二月にはいって都教組や都高教に試案の説明をはじめたのにたいし、しかも下部大衆がただちに大衆動員で応える用意をしていたにもかかわらず、都教組幹部はそれを無視した。そして大衆行動を組織するかわりに、第一次スケジニールとして全分会での父母集会、春闘研究会、勤務講習会の組織、および共闘体制の確立とピラ、ボスターの情宣活動、さらに二八日の第一回団交のときに第二次スケジニールを発表した。すでに都教委が実施を表明し団交が開始されてい

るときに、そのようなスケジニール闘争で闘いが勝ちぬけるだろうか。下部大衆は、このスケジニール闘争では満足できなかった。墨田区教組は二月一日に「勤務評定全面粉砕」の臨時総会を、千二百名の組合員を結集しておこない、具体的な行動方針を大衆的に決定した。北多摩教組も二月十九日に「勤務闘争臨時総会」を開き、三日間の職場討論、地域労組などの共闘体制の確立さらに父母集会の組織などを決定した。一人一人の組合員をまきこんだ闘いが都教組中央の指導をのりこえ、支部の活動家によって組織されてきた。そして、三月八日の晴海埠頭のほとんど十割の、都教組四万人の結集した大集會が、今まで幹部交渉にたよって大衆行動をおさえてきた幹部に、休暇闘争の具体的な展望とそのため臨時大会の開催をおしつけた。臨時大会は下部大衆の闘いのエネルギーが準備したのである。そして幹部の驚くべきほどの官僚的な大会運営に怒りを爆発させながら、三月二十日の臨時大会は、「最悪段階には休暇闘争を行使する、指令は戦術委員会に一任する」という四月七日入学式ポイント——ストライキ——をもつても闘うことを表明し、大衆行動の出発点を築いた。二二日、二五日、二六日の団交には、それぞれ分会二名動員、二割動員、三割動員とはじめて大衆行動が展開され、全支部は動員の体制に入った。二六日の団交で二八日に団交の打ち切りが予想され、第八回団交は三月の闘いの山であった。

都教組の三割動員と地評、都労連、都学連の支援動員で、都教育庁の中庭は一万五千の労働者にうずめられ、嵐のような渦巻デモとシニプレッヒコールが庁舎をゆるがした。

ついに教育長は動揺し、「七日のストを避けるため教育委員会と話し合う」といわざるをえなくなった。事態は急速にかわっていつ

た。首都の教育労働者は、みずからの闘争の力を確信をもって知るようになった。二九日の第九回団交で、教育長は遂に四月一日の実施を断念したのである。そして、その日、日教組と都教組の合同戦術委員会では、都教組執行部の「闘いは一段落した。動員体制を解いて四日からまた闘う」という提案を拒否し、休暇中も動員体制を維持し、さらに行動を一層強化する方針を決定した。決戦は四月にもちこされたのである。「勤務反対区民大会」が各地でもたれ共闘がすすんだ。こうして四月十四日の全都一斉職場集會では十六日から二三日までを最悪の段階とし、一斉休暇の体制が着々とかためられてきた。

当局側もこれにたいして、十一、十二日には関東主管部長会をひらき、つづいて十七、十八日には下田で関東ブロック教育長会議を開き、教育委員会は強引に団交をうちきって二三日に強硬に実施する方針をきめていた。

したがって十九日の団交は決定的な意味をもっていた。それにもかかわらず、教委が一方的に団交を打ちきっても、都教組幹部はただちに行動に立とうと身がまえて集まっていた組合員に公然とその事実を知らせて具体的な闘いを指示するのでなく、あたかもまだ団交が続くかのような幻想をばらまいていた。交渉はすでに決裂していた。都教組が二一日ふたたび団交を要求したが拒否された。このときしかも大衆動員がおこなわれていなかったのである。

日教組は二二日を第五波全国統一行動とすることを指令し、全国一人のこらざる教育労働者が三時から一斉に大会を開いて勤務粉砕の行動に立ちあがった。そして、本島都教育長は「教員の服務について」を各校に通達し、さらにPTAや地域のボスを動員しブルジ

「アジャーナリズム」の宣伝を利用して教育労働者の闘争をきりくずそうとした。

他方、都労連は右翼幹部とむすんで平和的解決のため「アッセン」にのりだしてきた。

そのたびに支部活動家を中心としたつきあがが妥協をのりこえた。そして、都教組に結集する首都の教育労働者の権力支配への怒りは完全な十割休暇となって燃えあがった。さらに、この闘いは、やがて福岡、和歌山、そして高知、群馬へと引きつがれ発展させられ、九・一五闘争を準備した。

しかし、権力と対決することをせまった東京の教育労働者の闘争は、その後どのように発展させられただろうか。その十日時に開かれた定例教育委員会は各支部代表の傍聴する面前で、提案から決定までわずか二七分で動評規則と実施要領を決定し、即日公布したのである。この事態に直面し、これからいかに闘うべきなのか？ たちだちに都教育庁を包囲し、決定をてっかいするまで闘うべきではなかったのか？

このときにあたって、都教組幹部はおどろくべき指導をなした。今まで幹部をつき上げ、乗り越えて四・二三闘争を準備し、成功させた下部組合員に与えられた方針はなにであつたか。

- 一、団交強化によって闘うための条件をかくとくする。この団交には異案事項の諸要求を結合させる。
- 二、第二段階闘争を直ちに展開する。とくに多摩地区に重点をおき、各支部の闘争力を投入する。対区闘争も展開する。
- 三、第三段階闘争にそなえ、校長との話し合い活動を活発に行う。
- 四、第四段階闘争の戦術は、一―三の闘いの発展の中で検討し決

定する。

五、以上の闘いを成功させるために父母対策、共闘拡大強化をはかる。

それと弾圧対策（法廷闘争）。ついに四段階永久抵抗論のなかに活動家のエネルギーはすりへらされていった。都教組執行部の四・二三にむけての態度は、ただ日程を消化するといった、闘争の立場にたない指導であり、そして四・二三以後は、権力者の弾圧をみまもってすくすくという闘いをまったくわすれた指導であつた。こうして闘いを発展させるなかで確信をもってきた活動家は、闘うべき方向を見失ない、あれだけの歴史的闘争のあとは、日に日に敗北感をみながら、ついに和歌山にひきつがれた闘いをなら大衆行動を起すことなくみごろしにしてしまったのだ。

四月の東京の闘いはきびしい教訓をのこして終結した。そして、かくも「完べきなまでに整然と闘われた」東京の闘いがついに許した突破口により、四月から五月にかけて、あるいは関東で、東北で闘いがくりひろげられつとも次々と敗北し、またたく間に三十数都府県に実施は強行されていった。

だが、ひきつがれた和歌山の闘争は、攻撃への転機を切りひらいた。五月二日職場代表者会議、五・二団交、五・六団交、五・一七団交、五・二〇団交と一歩一歩県教委当局をおいつめ、このなかで七者共闘会議が結成され、大衆の圧力で統一団交権がもちとられた。十八日休暇闘争の全員投票、そして五・二七団交、ここで県教委は団交の再開を約束しながら六月二日、行方をくらまし、六月三日かきうちに動評を実施した。このぬきうち実施にたいする六月三日か

ら七日までの憤りにみちた第一波実力行使。和教組、和高教、和大会、解放同盟、教育庁職組、地評の七者共闘の全力をあげての闘争、万人監視のうちの団交。中学校長や県教委指導主事らもごぞつて動評の撤回を教育委員につめよる。ついに保体課長、指導課長代理、学事課長代理さえも動評実施決定の撤回を要求して県教委と対決する。ハンスト説得失敗におわつた栗栖教育委員は、動評実施は差別を助長することがわかつた、今後皆さんと共に撤回を要求していくと教育委員の辞意を表明して七者共闘側につく。これは教育委員会側内部が、まさに七者共闘の強力な闘争のまえに矛盾をおおいかくせなかつたことを示し、教委は動揺をかざねた。このときこそ、全国的な闘いでもって完全に全教委を辞職させ動評実施を撤回させること、かくてわれわれの突破口を、ここに切りひらくこと、このことこそが和歌山の教育労働者と全国の教育労働者のなすべき任務ではなかつたか。だが全国的な強力な実力闘争によって支えられず、また七者共闘も、この教委側の動揺をまえに延々二三時間間の団交を三つの条件を確認してうちきつた。

八日第十三回和教組臨時大会は第一波闘争の成果を確認し、第二波を二三・四・五と決定した。だが、この第二波はあまりにもおそすぎた。このすきまをとらえ、内藤初中局長が入りこみ、警察関係の会議がもたれ、自民党の指令がだされた。そして、九日の団交にのぞんだ七者共闘にたいし、西川教育長は七日の三条件を完全に破壊し、それにたいする怒りをこめた即座の坐りこみに血にうえた棍棒がふりおろされた。西川教育長は団交一切拒否を声明した。教育庁前に坐りこんだ教育労働者と学生に、武装した警官隊がおそいかり、たちまち大混乱となつた。彼らは近畿中の警察権力を動員し

反撃の体勢にうつつたのである。

十三日、県下八カ所で三万人を結集した郡市民大会が開かれ、闘いは第二の段階に突入した。

大衆行動による圧力で余儀なくされた失地を、政府権力と、警察権力の強力なテコ入れでふたたびとりもどした教育委員は、教師の側の闘争体制未完了の状況のみで「賃金カットを含む行政処分」で第一波闘争にこたえたとおどしてき、闘争の切りくずしをねらつた。これ以上後退はけつしてせず、強硬に勝ち抜こうと政府・自民党直接の指導がむきだしになされて攻撃がかかっている以上、もはや一県の規模で、また、教育労働者だけでいかににはげしく闘おうとも、局面の打開は困難な事態にたちいたつていた。

全国闘争を！ として第一波闘争における労働者の父兄としての闘争参加ではなく、生産点での強力な闘争を！ これこそが、闘いの前進の鍵をにぎっていた。その規模は決して巨大なものではなかつたが、そうした方向で第二波闘争はすすんだ。いち早く国鉄労組が南近畿地方本部を和歌山に移駐して二五日の時間内職場大会を決定し、全電通、全通も前後して職場大会の決定をしたことは、第二波の体制をきびしい圧力のもとで組もうといっていた教育労働者をはげまし、二三・四・五日の闘いを、七五％、八〇％、八〇数％と一日毎に上昇する闘いをやり抜かせたのであり、また、その教師の苦闘に地評も力強く応えたのであつた。この日の日教組統一闘争は関西、四国、中国と未実施県を中心に二時授業カットで闘われた。こうして、全国闘争への展望の芽を作りだして第二波は闘われ、その直後きた官憲の不当弾圧に屈せずに闘いの炎をもちつづけた第三波によって、大阪、兵庫、京都を中心とした関西全体の闘いに発展

する方向を作りだしていったのである。

だが、第三波闘争に関西ブロックが支援にたち、さらには高知、群馬で激烈な闘いがはじめられ、いよいよ全国闘争に発展するようそうをせしめたとき、次にだされた方針はなにであったか。和歌山の闘いからいささかでも教訓をくんでいただろうか。実力闘争で支援するのではなく、八・一五、一六の「勤評阻止、民主教育を守る国民大会」というカンパニアであった。たしかに「敵のあらゆる妨害にもかかわらず、全国から五万にのぼる労働者、父母、青年、婦人、学生が参集」したことは偉大なことにはちがいない。しかし九月から全国的な提出拒否をいかに実力で闘いぬき勝ちぬくか、といった具体的な方針でこの五万の結集はなされていただろうか。

総評は常幹会議で、和歌山闘争の経験に学んで、と称して、組合員子弟の盟休という戦術をたて、総評傘下の全労働者の生産点における強力な闘争をくむことをさせた。下部活動家が、ひしひしと地域共闘をすすめても、幹部は有効な闘いを組織しようとしなかった。こうして九月の提出期をむかえ、九・一五闘争となったのである。総評が労働者の生産点での実力行使、なかでも最高の武器であるストライキ戦術を回避して、組合員子弟の盟休といったあいまいな態度をとったにもかかわらず、日教組は、労働運動の全般的低姿勢のなかで、敢然として、一切の妥協を排してすすむべく、九・一五闘争を設定した。ブルジョワジーは孤立状態のなかで闘う日教組に、系統的な攻撃をくわえ、ブルジョワ・ジャーナリズムを挙げて動員し、事態を一つの紛争であるとみせかけて妥協的な世論を形成しようとした。だが、けっしてひくことなく闘おうとすることは、明らかに文部省をおいつめた。このときになっては、今までの「勤評は

仲間をさべつする」とか「先生にレッテルをはることにする」といった議論はもはや職場にも、そして新聞にもあらわれなかった。事態は、そのような感性的段階ではなかった。独占資本が教育を全面的に支配しようとして、教育労働者に攻撃をかけている、このことが明瞭にうかがわがってきたのである。九月十二日、難尾文相は、「教職員ならびに父兄に自重を要望する声明」を発表したが、極悪の右翼分子以外は、だれもそれをまともにはうけとらなかつた。文部大臣が教組と話し合いもせずに、これだけの教育労働者の反対をおしきって強行するのは、なにかおかしいと、さらにすすんで、まさに日本の教育が危機にひんしている、と。

下中弥三郎氏ら全国大学学長グループの斡旋にたいして、文部省は高い姿勢でつっぱねた。少々むりをして、今のうちに教組をやっつけておく、と。

和歌山・高知での十割休暇をはじめ、一七都府県が闘争に入った。まさに教育労働者の実力での闘いは世論を分断し、これほどまでに教育労働者の闘いがすべての中心事になったことはなかつたろう。独占資本の攻撃の魔手について、大衆的な討論がまきおこり、下部組合員の大衆的な力によって闘争がすすめられた。

だが、このようなきびしい闘いが進められる最中に、妥協的な世論に迎合して闘争をうち切ろうとする部分が公然と登場してきた。

一つは、県教委をしげきすることになるという「思慮」ふかき神奈川県教組にみられる闘争不参加であり、もう一つは、都教組委員長長谷川提案といわれるものである。長谷川提案は「日教組としては、今回の統一闘争があればどの決意をもってスタートしたが結果としては比較的平穩に終わったわけだ」とひとごとのようにうそぶき

さらに「おそらく組合指導部は現場から遊離したせまい組合主義の闘争に竹やり式に突っ込んで行くことになり、組合員は失望して組合から離れ、戦線がバラバラになってしまう」と。そして具体的に提案する。「このやり方に対して全国民を結集してこれを孤立させ打倒するところにわれわれの目標を置かねばならない。その場合、必ずしも教員組合だけが独立して、あるいは総評という労働組合の応援を得ただけではこの戦いが勝るといえるものではない、今や国民の総意によって教育を守ろうとする芽がたくさん出て来ている。(中略)そこで解決の新しい方式として各地区で集会を開いて、勤評の是非だけでなく、教育全体について国民が話し合いをする機会を作る。同時に中央では日教組が各界を招待して、代表的な意見をまとめていく。この機関が日教組のヒモつきと思われぬように勤評賛成の人もどしどし入れる。こうした国民運動には日教組はもちろん、文部省も耳を傾けないわけにはいかない(朝日、九月二日)」、と。

闘いとは無縁な位置に身を置いている人の傍観者の言葉ではなく、全国の闘いの鍵をにぎる都教組の最高幹部の発言であり、しかも四月の闘い以降、大衆の闘うエネルギーを、闘わぬ指導を積極的にだすことよってくさらせ、闘いえない状況を積極的に作りだしてきた右翼幹部の発言であるだけに、黙っていることのできないものであった。

その裏切りは以上の点だけにあつたのではなく、なによりもつぎの点にあつたことを明らかにしなければならない。

九月十五日の闘いは、苦闘であつた。政府権力から気遣いじみた弾圧のなかにあり、一方では、労働戦線はまだ低姿勢を保持し、

合理化、首切りの嵐のなかで、小西六、王子製紙苦小牧、日産化学などの労働者が、英雄的に血みどろの闘いをいどみながらも、個々バラバラのままで放置されている現状のなかでの闘いであり、しかも、組織内部には、そうした現状に意識的に乗り、最大限に利用し闘争を小さなものにしようとする部分が明確にあり、神奈川県教組の幹部のごとく、闘争不参加を内外に声明することによって、敵階級に利する役割をはたす分子をもふくんでの闘いであつた。

九・一五の時期において、労働運動の混迷をうちやぶる役割を依然として日教組はおっていたし、じっさいに全国的な実力闘争として巨大な役割をはたしたのだ。しかも、闘わせないという指導のため下部労働者のエネルギーはよどみかけながらも、爆発しうる力をもっていたのだ。そのようなときに、どう闘いを発展させるべきなのか、そして春以来の闘いのなかでつちかわれてきた階級意識を基礎にどう全組合員のエネルギーを闘いに活かすのが指導者の任務であつた。自ら闘争をさばることによって作りだしたマイナスの面を強調し、拡大するための長谷川発言といわねばならない。

このような裏切りにもかかわらず、九・一五以降も、東北で、また関西で勤評阻止の闘いがくまれ、仙台、奈良、徳島で道徳教育研修会ポイコットがはげしく闘われたことは、闘いの指導方針によっては、日教組がおっている全労働戦線の血路を開く課題、十一月十二月に闘われるであろう全通、炭労、合理化などの闘争に現在の闘争をひきついでいくという困難な課題をはたすことのできるエネルギーが存在することを明らかにした。

このエネルギーこそが、他の戦線にさきがけて警職法闘争を実力で闘うことを準備したのであり、この意味においてこそ、孤立して

かで階級性をきたえることによって、その後の闘いに洩りしれぬ影響を与える性格をもっていた、いわば一つの岐路ともいべきものであった。

しかし周知のように、プロレタリアートの前衛と名を冠した日本共産党は、この闘争を革命的に指導し、闘争の一層の拡大を勝利の方向に指導することなく、新濁を孤立のまま集中砲火をあびさせ、その後の国鉄の致命的な壊滅にまで導いた革命運動における決定的な誤りとしてわれわれの記憶にあたらしい。

国鉄の藤林幹施案体制への敗北からの脱出の道が、わが教育労働者の闘いであったし、その意味で日本労働運動の進展の鍵をしつかりとその手のなかに握っていた闘いであった。その闘いにおいて、日本共産党は教育労働者のまえにどう闘う方向をさし示したのだろうか。結論をいうならば、それは闘争の役に立たなかったというだけならまだしも、闘いの前進にブレーキをかける役割を演じたことをわれわれは指摘しなければならぬ。

かんたんにみてみよう。

闘いが、他の戦線の支援なく、孤立のなかで闘われねばならぬとき、しかも独占資本の牙城にまっこうから、はげしくぶつかっていき、敵の集中砲火を全身にあびて、闘いを妥協し、中止をしようとする一部の動きが一層明確になってくるのは当然のことであった。上ノ山の日教組第十七回定期大会は、そうした妥協部分を克服して、戦国的な部分が指導権を握って、いかに闘う体制を一層強く作りあげるかにその課題があった。

この時、日本共産党はこのようにいった。

「この大会において、幹部の選挙をめぐる一切の対立的傾向をさ

け、組合民主主義を徹底することが緊要である。今日の情勢のもとでいささかでも内部の動揺と対立を助長するような動向は慎重に避け、いましめなければならない(アカハタ)」

ということは、妥協的幹部も十分登用して勤評闘争をやっつけようのである。党は平垣派に結集する日教組の戦国的部分に断呼たる方向を指ししめし、他の労働戦線に共闘をうながすのではなく戦闘的部下労働者をつねに孤立の方向にいやる策動をつづける妥協的幹部にもビタイを呈したのである。

そのそこにあるものは、勤評闘争の階級闘争としての性格をつかめず、いかにして労働者の闘いを全国闘争として発展させ、その過程で中間諸階層をもひきつけて勝利へということではなくて、つねに中間層をつかむことに腐心し、先頭を切って闘う労働者のエネルギーを広汎な人民の闘争に解消してしまいう日和見的思想をその根源にもっている。

九・一五闘争のあと、すでにのべた日和見の潮流を巧みにつかんでの長谷川提案の発表というきわめて裏切りの策動のおこなわれていたさなか、九月二六日のアカハタは、主張でつぎのようになる。

「われわれの反撃の重点は、あくまでも勤評強行の態度をとっている政府の政治的意図を明らかにし、勤評そのものもたらす結果について大小の集会による説得活動を強めることである」「従来、勤評闘争は、せまい組合のわくのなかでのたたかいとしてすすめてきたうらみがある。そのため、行動の面でも画一的で単調な手段が選ばれ、戦術決定にも生硬さを生む場合もありはしなかったかが反省されなければならない」

神奈川勤評が発表されたときも、日本共産党はこれに対する態度がただちに明確にできなかったことはそれまでの主張からも当然といえるだろう。そして日教組中執が神奈川勤評を否定してはじめてその見解を支持するにいたったにすぎない。しかも今後のたたかいは「この思想的には最後まで非妥協で、戦術的には統一を第一義とした、末端組織からつみあげられた柔軟なたたかいかいをもととして、大きく発展しようとしてたたかうならば、この複雑なたたかいの第一歩を切り開くことができるであろう。(アカハタ一月七日)」と、

具体的な展望もないばかりか、現在の課題は勤評反対闘争最大の困難は「これらのばらばらな状態をどう統一してたたかうかにあるとして、どのようにして闘いの展望をきりひろくかというのではなく現実の傾斜のみをみてそれを下で統一しようとする。

日和見の方針を支持しそうな大衆がいるからといって、そのもとの無内容な「統一」を呼びかけて、戦闘的部分のエネルギーをむざむざと失わせ、革命運動に貴重な部分を失うのにみずから手をかすが前衛党のはたすべき任務だともいえるのか。

現在では、前衛党と称しながら、その機関誌「前衛」において「新局面に立つ教育運動」という、これまた今後の闘いの基本は学校のなかにおける教育内容の問題であるとお説教を開始している。すなわち「今後の勤評絶対反対闘争は評定書を出したかどうかにかかわらず戦術に固定しては進まない。全人民の教育運動を進展させる民主教育確立の長期にわたる闘いを通して、職場で実質的に粉砕していくという展望をもって行なうことが大切である。この闘いの基本は学校を基礎にした教師集団による教育内容への闘いである(前衛六月号)」と、勤評闘争の成果を「現在(四月)における全国的な勤

評実施状況をみれば、そこにはすでに最初の文部省案はたたかいの過程で大中に計画を変更させられた。全国教育議事長会議案、長野方式、神奈川方式、東京四町方式その他地域の実情に即して多様な形態方式がとられた。さらに北海道未実施、京都、高知、福岡のように闘争を展開中のところなど、全く不統一な現象を呈している」といったところに求めていることも明らかにされよう。

われわれは、いったいなに故に闘争をしてきたのだろうか。地方の実情に即したものを求めたともいえるのだろうか。また職場のなかで実質的に粉砕されるものであるならば、なぜあれだけのはげしい闘いが必要だったのか。

教育労働者の勤評闘争においても、もはや日本共産党は指導の力を失い、むしろ闘いに害毒を流しており、一年余にわたるはげしい教育労働者の闘争のなから、今日、その破産であると、はっきりいわねばならないのである。

三

戦後の民間教育運動は、あるいは戦前の潮流をひきつづき、あるいはコア・カリキュラム運動が輸入され、百花齊放の様子をしめしていた。なかでも、戦前の第二次教育運動のなかの三つの主な潮流すなわち教科研を中心とする運動、生活綴方運動の流れ、そしてプロレタリア教育運動の三者のうち、前二者は戦後新たに再編成された教科研と日本作文の会として主流をなし、民間教育運動の王座をほこっていた。

勤評闘争以前にはその他数えきれない程の民間教育運動の諸潮流

はあるいはがみ合い、あるいはなれあいのまま、主として教育研究運動という名のもとに教室および一部の学校でその王国をきずいていた。そしてここからは次々と「教育実践の記録」が出版され、教育界の著名人を生みつづけてきた。これらの運動は教育運動に特有ともいえるきびしさのない、なれあいの、サークル主義のなかで、その春を平和にたのしんでいたのである。

この春の楽園は、いま、動評闘争の発展とともにゆりうごかされはじめた。このことは当事者において明確に認識されていないがまことに不幸なことである。たとえば教科研の機関誌「教育」はその一〇〇号を記念して、現段階における教育労働者、教育研究者の任務を、苦難の歴史の伝統のうえにさらに明らかにし、今後いかに闘いぬいていくかを明確にするのではなく、歴代のおもいで話しに大きなページをうずめつくしている。

だが、既成の諸運動およびその理論家がいかに惰眠をむさぼろうとも、この歴史的な闘いに立ちあがった教育労働者は新たな課題に直面した。すなわち、闘争をおしすすめるなかで、かかる既成の理論と闘わずしては、闘争を進展させることができず、そのため、本業的な理論家たちに、教育労働者はすでのままたちむかつていかなければならなかった。

さらに、日教組が五七年に各組員一人毎月一円を拠出することによってつくりあげた国民教育研究所は闘いの現実のなかから新たな理論をうちだすべくこの理論における闘いにくわわった。

「前衛」(五八年)七、八月号で、現在の独占資本の教育への攻撃について、それはますますプラグマティズムの泥沼にはまりこんでいくものだと述べ、それを打破するために鑑とするソビエト教育

学の「成果」人工衛星とともに宇宙に飛びさっていった矢川徳光氏は、「前衛」十一月号で動評闘争を中心とする教育労働者の闘いについて、闘争そのものからではなく「党大会の成果にちなんで」、「民主教育擁護のために」という論文を発表している。この論文で動評闘争の本質は階級闘争であるという断定がおこなわれている。「党内資料」を党大会の決定と対比して、決定とくいちがうゆえに、あやまりであるとしている。すなわち、動評闘争が階級闘争ではなくて、国民運動として考えられなければならない、と。「反動政府の動評強行は、第一には米日独占資本が独立と平和と民主教育のとりである日教組の統一と団結を破壊しようとしているものであります。しかしそれはまた同時に教育労働者である諸君と労働者階級との連帯をきりはなし、子どもと民主教育を守るうとするすべての国民のねがいをおふみにじるものであります(日教組臨時大会への党大会メッセージ)」、それゆえに「民主教育擁護の闘争は『国民的抵抗運動』として展開されるべきであり、それは教員組合だけの問題でなく教組とその闘争を支持して闘う労働者階級との問題にとどまるのでもなくて、労働者階級を指導者階級としての全人民の統一行動の課題とするべき問題である」と。そしてこの闘いをきわめて「ひろい人民層を統一する国民運動」とするために、階級闘争ではなくてとあつまりその本質をかなぐりすてる解釈をもって闘争のあり方を

父母一般に解消するということを平気でやっている。すなわち、この全人民の統一戦線の基盤は、ブルジョワジーがプロレタリアートを資本のくびきにつないでおこうと攻撃をかけているそのことではなく「子どもと民主教育を守るうとするすべての国民のねがい(一七回党大会「子どもと教師と教育を守りましょう」傍点矢川)」に

出発することであり、その当然の帰結として、「この『できるだけひろい大衆』といわれているものなかに、階級意識など、てん

でもたないが、子どもと教育をたいせつだと思っている父母たち(「先進的な教師たち」からは、いまではもう間にあわないとサジをなげられている父母「一般」)がふくまれている」のであって、それらを統一行動に組織することが任務であると規定する。「すべてこれまでの社会の歴史は階級闘争の歴史である」ことは忘れさられ論点は階級闘争であるという連中が闘いを狭く把握していると、問題の本質を巾のひろさといったままの無内容なものに解消させていく。こうした矢川氏の思考方法をもっとも端的にいあらわしたことは日教組にたいする評価のところであろう。「日教組が国民大衆の広はんな支持をうけ、文部省からおそれられる存在になったのは、労働組合としての一般性の面の闘争におうよりも、むしろ教育研究運動という特殊性の面での活動をとおしてであった。」

こうした現実の闘いの発展からなら学ぼうとしないたわごと、口では労働者階級を中心とする全人民階級層といいつつ、労働者階級そのものの闘いには目をふれず、ようするに日々のブルジョワ新聞論調と文化人の動向に一切が左右される。これが単なる「学者」のたわごとであるならばとにかく、「前衛党」の名において発せられて、活動家を混乱させたばかりか、頑強に闘いの足をひっぱったことは、いまや労働者階級の名において告発しなければならぬであろう。

これは一人、矢川氏その人の責任ではない。矢川氏がその論拠としているモスクワ宣言と第七回党大会決定にみられる、日本共産党および国際共産主義運動そのものが、すでに労働者階級の利益を裏

切り、おそるべき無能ぶりとはつきりしていることの一端にほかならないからである。

日本共産党中央委員会宣伝教育部編の「民主教育を育てるために」というパンフレットは、「日本民族の将来に希望をもつ心ある労働者階級、国民の皆さん」「わたしたちの学校を、国民の幸福の土台をきざすところ、日本民族の繁栄と日本文化の発展に寄与するところにしていかななくてはなりません」「学校職員は、自分たちは父母のねがいにこたえて子どもの成長のために働いているものである」「こと、民族のあとつぎを教育する光栄ある仕事にしがっているものであること、これを、ひとしく、胸において、校長をはじめとする職場の統一をはかっていかななくてはなりません」「正邪・善悪・真偽・美醜を、自分の力で見分けることのできる子どもに育つことは、親にとっても、民族にとっても、この上ない喜びといわなければなりません」「そもそも教育というものは、日本の社会の発展のためにあるのですから」「学校で、日本民族の繁栄と日本文化の発展の基礎をつちかう教育であって、くれれることを期待します」といったおどろくべきブルジョワ民族主義者となって「国民のための国民による国民の教育」を提起する。「日本共産党は、単に労働者階級の利益だけを考える党ではありません。日本の労働者階級の解放を通じて、大多数のまじめに働く日本国民を幸福にすることを願っています。したがって、学校は、労働者階級だけのものではないこと、それどころか、学校教育は国民のなかの諸階層全体のものであること、それらのすべての子弟たちの成長と幸福にかかわりのある事業、国民的な事業であることを、よく考え、努力しています。公の学校は国民全体に奉仕すべきものであることを、もちろんよく知

っておりませう」と。近代市民社会のよりよき市民にならうとするこの願いは、もはや現実の闘争以前の問題であろう。独占資本にたいして、民主的であり、教育に手をつけないうでくれ、教育は国民的なものにしてくれ、と要求し、闘いを憲法、教育基本法の精神を守るという終着駅にむけさせようとする事、このことは、かくも闘ってきた教育労働者にはあきらかに無縁のものであった。

それにもかかわらず、こうした「前衛党」の教育論は大手をふるってあるまじわる。だから社会民主主義者は誰れにも遠慮する必要がない。あれだけの論争になった神奈川勤評は、「教育を政治から切りはなし」中央集権的教育行政にたいし、県教委、教師、父母による教育権が確立されたのである、と神教組執行部はのべたてているが、中立性および教育権といった問題が一人歩きをはじめ、そうしたことが目標とされてくる。

日教組の「民主教育確立の方針(第二次草案)」は、一、教育行政の抜本的改革による教育権の確立、二、教育の機会均等と学校体系の改善、三、僻地、同和、特殊教育の充実をはかる、四、教育財政を確立し、父母負担の軽減をはかる、というのから、一四、教師の倫理を確立するという項目にいたるまでの方針案でもあるが、実際に現在どのような歴史状況がわれわれの前にあり、そこでの階級闘争の力関係がどのようなようになっており、われわれがここにおいていかなるべきかといった具体的な客観的現実とそこでの根本的な課題という発想で作られたものではない。

机上の論争ではなく、現実の闘いのなかから出発するものとして新しい研究家集団として登場した日教組国民研究所は内外のあらゆる誹謗と妨害をはねのけて、勤評に代表される教育労働者への攻め

これは階級対立が克服され分業が止揚されてはじめて可能になることである。

自然と人間との闘争、さらに階級闘争のなかで歴史的にきずきあげられてきた知的労働の所産である知識といったものも「疎外された労働は、人間の類的存在を、また自然ならびに彼の精神的な類的能力を、彼にとって疎遠な存在、彼の個人的生存の手段にしてしまふ、それは人間から彼自身の身体を疎外して彼のそこにある自然のようになり、彼の人間の存在を疎外して彼の精神的存在であるかのようにする(マルクス)」といったとき、かかる現実の変革をぬぎにして、いかなるプランを立てることによってこの知的労働と肉体労働の分裂からくる矛盾を学校で解決することはできない。「環境と教育に関する唯物論的学説は、環境が人間によって変化され且教育者自身が教育されねばならぬということを忘れていた。(中略)環境と人間の活動との変化の合致または自己変動は、ただ革命的实践としてのみ把握され且つ合理的に理解される。(マルクス)」

いろいろな事態を解釈し、それに自からの期待を付与することによって、先進的に闘う教育労働者に、教育的価値のため、教育独自の方法で闘え!と足をひっぱっている現実においては、まさに現実の闘いの発展そのものなから世界を変革するためにこそ理論は作り出されねばならないことを強調しなければならぬ。

四

以上、勤評闘争が、いかに革命的な下部大衆の苦闘によっておしすすめられてきたのか、そしてこの闘いの過程で、右翼日和見主義

撃を独占資本の攻撃であることをみやぶって、教育労働者に多大なこうげんをなし、現在もっとも期待される研究集団となっているが不幸にしてこうした独占資本の攻撃にたいして反独占の統一戦線をかかげることによって現代マルクス主義派の誤謬におちいっている。

教育的価値のみに問題を限定し、独占資本による教育支配に反対するゆえに、教育に国民的基礎を求め、そこにおける父母、なかでも労働者階級を中心とする諸階級の父母の教育要求にねざす、というところで父母の接触を求め、ここに出発点をみだして国民教育論は、逆説的というならば、これこそまさに戦術論をすべてに優先させているといわれるべきものではないだろうか。

なぜなら、われわれの対象は一般的国民の育成ではなく、学校をおえれば労働者、農民となっていく人々であり、それゆえにこそ、かかる人々の権利の擁護と鉄鎖からの解放の道がまず優先されるべきであり、また、教育労働者が、労働者階級の子弟の未来を通じて労働者階級と結ばれるのではなく、なによりも労働者階級それ自身の利益のもとに結合されることこそが闘いを発展させる鍵であり、そのなかから革命的な教育論が生れるのではないだろうか。

教育内容の問題にふれ、教育は体制の側のみ奉仕するのではない「よみ、かき、さん」は労働者階級の利益にも奉仕するのである。しかも父母のいつわらざる欲求である「よみ、かき、さん」の力をしっかりとつけてやること、このことが教師の任務であるといった教育論が、まことしやかに論ぜられたこともあるが、ここでこうしたものに、くだくだと論争をかきかねる必要はないだろう。また能力の全面的発展のために、ということがしばしば強調されるが

的幹部がどのように闘いをうらぎってきたのか、さらには国民教育論といわれる、なによりも国民とともに闘え、教育の場で教育独自の方法で闘えという理論がはたしてきた役割について論じてきた。そして、ふたたび、現在教育労働者に課せられている任務はなにか、という問題にふれなければならない。

なぜならば、ブルジョワジーの側からも勤評問題は過去のものだと印象づける系統的な宣伝がなされており、また一方戦線内部の右翼的部分は日本共産党をも含めて、現在までの勤評闘争はやはり、今後の闘いの基本は学校のなかにおける教育内容の問題であると説教を開始している。

しかも、十五万字におよぶ龐大な日教組大会の議案は、闘いの教訓として抽象的一般論をのべているが、たとえばあれほどの論争であった神奈川勤評と臨時大会には一言もふれていないことでも明らかのように、そこでは具体的な闘いの教訓を提起しえないままになっている。五九年度方針案にしても一、勤務評定阻止の闘い、二、生活水準向上と社会保障制度確立の闘い、から、七、平和を守り、国際連帯を強化する闘い、にいたるまで、小項目一―四の闘いの目標をかかげているが、これらが今日までの闘いの成果と教訓のうえにたつて、どのように具体的な闘いをすすめるべきかとしているのかまったく不明瞭なままにしている。

今必要なのは、すべての目標をられつすることだろうか。否! 明確にすべきことは、現在目前にひかえている安保改定阻止の闘い、いかに闘うのか、そして五八年にひきつづき、さらに強力に九月の評定書提出期の大闘争をいかに準備して闘いぬくか、という方針がうちたてられることこそ、そして、それを実行し指導しうる執

行部を確立することそがなすべきことだ。そのためには、闘いの具体的な総括にまなび、教育的にのみ教育労働者の任務を限定しようとする動きを打ちやぶっていくことをなしにはなさないだろう。

教育労働者の利益も、そしてまた教育の確立も、労働者階級が自らを解放することによってのみ可能であることが明確である以上これまでのなかでつちかわれてきた教育労働者の階級的視点にたった闘いが明確に設定されなければならないのだ。

☆ ☆ ☆

教育労働者

定価80円
季刊

第1号

勤評体制打破と民主教育の発展のために 渋谷敏夫

島教師とその生活 森凡

職場から 私たちの町 中村三郎

群馬闘争 I 吉井享一

職場における勤評闘争と今後の課題
——都教組の一年間の闘いをかえりみる——

神奈川勤評騒動記 山坂虻内

ソビエトの教育改革に思う 山川潔

第2号 山本五郎

勤評闘争と日教組の課題 井上実

日教組定期大会方針案への疑問 山田祥二

職場から 「おてつないで」 上田芳子

葛飾における「都指導室の一斎訪問」拒否闘争 高橋広子

《書評》 五八年度民研レポート『教育を国民のものに』 鈴木五郎

科学的な社会的認識を育てるために 鈴木茂

労働の質と量

「前衛」六月号「トロツキズム批判特集」を批判する

加藤明男

日本共産党中央機関誌「前衛」は一九五九年六月号で、実に四十頁を上廻る紙面を費して、現代トロツキズムの批判を試みている。

編集後記によれば「この極左・空論・日和見主義の実体は、こんどもひきつづいてバクローしていく予定である」とあるから、おそろくこれからも、このような論文に紙面を割くつもりなのであろう。

私も共産主義者同盟の一員として、おそろくこのトロツキズム批判というのは、わが同盟の理論活動についての攻撃だろうと思って期待しながら読んだ次第であった。

内容は果して、もつとも正当なトロツキズムといえる国際主義共産党の諸君はさしおかれて、主として、わが同盟の姫岡氏の論文に攻撃の焦点が集中されているのであるが、これではトロツキズム批判という看板は若干不正確という感を免れなかった。

われわれ同盟の基本方向が、トロツキーの活動の全面的正当化とその教条の絶対化のために推進されるものでないことはいままでもなく、われわれをトロツキストとよぶことは、真に厳密な意味では

正確とはいえないからである。われわれはまず、なによりもマルクスの偉大な科学的所産に基礎をおくことを中心としており、本誌一号に見られるとおり、百パーセントトロツキーを守るものではないのである。しかし、トロツキーはいまでもなく偉大な革命家なのであって、その不屈の闘争のうちに終った生涯は、なんらの偏見もなしに労働者階級の解放のため闘おうと念ずる者にとつてはしごく当然のこととして、強い感銘を与えずにはおかないのである。単にその革命的情熱と資質だけではなしに、ロシア第一革命において、十月革命において、国内戦の軍事指導において、理論についても、実践についても、トロツキーから学ぶべき点は実に豊富なものである。

私などにはある意味ではトロツキーの反対派としての活動から、はじめてスターリン主義の克服と、革命的マルクス主義を学ぶ方向を知つたのであって、トロツキーに負うところはきわめて大きいといわねばならない。

いまだに「トロツキーは、スターリンとコミンテルンの方針の誤った部分ではなく、主として、その正しい部分に反対して闘ったのである」(不破哲三氏)などとひとりよがりな歴史観に安住したり、「レーニンの死後、党と国家のおもな指導的人物としてのスターリンは、マルクス・レーニン主義を創造的に運営し発展させた。そして、レーニン主義の敵——トロツキストや、ジノヴィエフ一味その他ブルジョアジーの代理人に反対する闘いの中で、彼は人民の意志と願望を示したのであり、傑出したマルクス・レーニン主義の闘士としての名にそむかなかった」(ふたたびプロレタリア独裁の歴史的经验について)という中国共産党の御託宣をくりかえすことによって、神話にひとしいデッチ上げの歴史によりかかろうとする人々(北海道委員会学対部)の多い現在である。トロツキーの正当性を断じて守り、彼についての不当な中傷と徹底的に闘うことは、真の革命的マルクス主義者かどうかを判別する一つの重要な指標ともいえることである。ジノヴィエフやスターリンが(最近二〇回大会以後どうしたわけか)ブーリンとともに逮捕されたトムスキ―カルイコフが「名誉回復」されている)三十年代、見るも無残なスターリン主義への屈服を余儀なくされたところに見られるように、若干動揺性を持った幹部であったとしても、彼らをブルジョアジーの代理人に仕立てるためには、松川事件以上のモスクワ裁判というデッチ上げが必要だったのである。一貫してスターリンの誤謬と闘い、そのトロツキーの活動が、反革命である、などというものは、無智にもとずく偏狭さか、一定の特殊な利害の前に労働者階級の犠牲にしようとするセクト主義者にほかならない。虚心に「ロシア革命史」なり「次は何か」なりを読んでみるならば著者の

すべてを焼きつくす革命的熱情は、かならず胸をうつはずだからである。

こう考えるからこそ、私は、今「トロツキスト」とよばれることをおそれないし、そう罵倒する諸君にこそ、トロツキーの著作を真剣に学ぶことを呼びかけたいのである。

もちろん、われわれはトロツキーに対する悪意ある偏見と闘う以上、トロツキーの無内容な神秘化や絶対化にくみしえないことは当然である。

トロツキーが、革命の後退期にあったとはいえ、スターリン主義者に敗れていった歴史は、世界プロレタリアートの貴重な経験として、正しくその教訓がくみとられねばならない。トロツキーについては、好嫌の感情的判断の前に、その活動から全面的な教訓が学びとられねばならないのである。偉大な革命的方向も、その痛切な敗北の教訓も。

ちやうど、それはわれわれが、五〇年当時の日本共産党の大分派闘争において、偉大な革命的精神はもちながらもスターリン主義のわく内に止まったがゆえに真にみずからの革命性を貫徹しえなかつた国際派諸派の活動から無限の教訓をくみとると、類似の問題である。国際派、とくに統一委員会、統一会議派分派がいかにスターリン主義の限界内に強くしぼりつけられ、単に日本共産党内の正統派争いに終止して、第二のモスクワの批判の前に潰滅し去ったとはいえ、その弱き誤謬を、最悪の分派所感派の決定的な犯罪的日和見主義と同列に論ずることは断じて許されないことである。階級闘争の歴史は、「肯定的な側面はどれだけで、否定的側面はどれだけか」などという平板な歴史に単純化されるものでは絶対でない。よ

り基本的に革命的な部分と日和見主義の闘争のダイナミクスとしてのみ、その教訓は真に理解されるものである。スターリンかトロツキーか、歴史の現実の進展がこのように問題を提出していた時、革命的プロレタリアートの取る道はスターリン主義との決定的な闘争であり、トロツキーの基本的正当性の承認でなければならなかったはずである。

私はこのような立場から、トロツキーの活動の全面的な再評価も、第四インターの意義とその限界も、明かとなるのであり、このような前提の上に、第四インターの活動も含めた全世界プロレタリアートの歴史的经验に学んだ新たな革命党への展望も開けるものと思うのである。

大分前置きが長くなったが、トロツキーに対する没理論的な批判が横行している現在、われわれがトロツキズムに対していかなる態度をとるべきかを明かにすることが始めに必要だと考えたので、くどいぐらいのべたわけである。

トロツキズム批判については、われわれはいまいちな態度でいてはならないと思う。トロツキーのしごく常識的な正当性までも暴力的におしつぶそうとする批判に対しては、ただちに反撃せねばならない。たとえトロツキストとレッテルづけられようとも、前衛六月号のごとき、批判には、無条件に闘かわねばならないのである。

前衛の多くの筆者がトロツキズム批判としてのべていることは、なにもトロツキズムなどというまでもなく、マルクス主義についてしごく基本的な点についての攻撃である。

いわく「世界革命について」、いわく「一国社会主義の不可能性

と平和共存のギマン性について」いわく「価値法則と商品生産のな社会主義について」

これらはいわばマルクス主義の核心ともいうべき点であって、なにもトロツキーの独創ではない。大体「平和共存を長期にわたって」存在させるために闘ったり、「社会主義にとって修正されるとはいえ価値法則は必然」などというのがマルクス主義にとっての公然たる攻撃なのである。

世界革命と、商品生産を揚棄した社会主義のために闘ってこそ、はじめてマルクス主義者なのである。この立場を放てきして、彼らがほかならぬ平和共存にしがみついたり、社会主義に価値法則が存在するなど強弁しているのは、いうまでもなく、彼らが、利己心なく労働者階級の解放のため闘おうというのではなく、現実のソヴェト外交を支配する公認マルクス主義を擁護し、現実のソヴェト社会を美化するために、客観的な知性をみずから閉じ、現実の俗流的弁護論者の立場に立っているからにほかならない。

ここでは紙面の都合で彼らが、マルクスの偉大な経済学的業績までも、現実のあるがままのソヴェト社会の擁護のためにはふみにじって止まないか、という点にだけしぼってのべてみよう。この点にこそ、ある意味では、マルクスがもっとも偉大な武器とした、科学的批判の精神が、現実秩序の前に、見るも無惨に投げすてられていることが如実に見られるからである。

北海道委員会学対部の諸君は「姫岡式経済学の非「マルクス主義の本質」と題して、スターリンが「労働の量」に応じる分配を棄てたとは、一体いつどこにおいてか」という点の検討から始つて

「姫岡式経済学は、このように、浴流的ソビエト批判ブルジョア社会弁護論とくしくもまた当然に一致する」というきめつけをもつて断定している。

もちろん私の見解は姫岡氏の経済学とすべての点で一致するとは思っていないし、また、前掲筆者の片言がマルクスの命題と異っている点をほじりだして修正主義者のレッテルをはろうとは思われない。

しかし、スターリンが労働の量に應じる分配を棄てよ、といっていないからといって、彼が労働の質による分配を分配の契機としてもちこんだ点をどうして弁護することができるのだろうか。

彼らは、スターリンが「労働者の熟練度について、当然うけるべきものを報償するような賃銀組織」(全集一三卷)をつくることを任務とし、スターリン憲法一一八条に「ソ連邦の市民は、労働の権利、すなわち仕事を保証され、労働の量と質に相応する給付を受ける権利をもつ」とあることを見てもなんらあやしむことを知らな

い。「マルクスは労働の質と量を相容れぬ対立概念として把握したのではなく、正に反対に、前者は後者に還元されることを前提として『平等の尺度、すなわち労働』(ゴータ綱領批判)」といったのだと曲解してすまじこめるところである。

彼らは「労働の質的差異は、基本的に支出された労働量の差と照応する」と考えて、とに角労働の質と量とは対立する概念ではないのだから、ソビエト社会で、労働の量に應ずる分配と共に労働の質による分配という考えが持ちこまれても、大したことはないと思ふべきである。

「を運転する労働と、旋盤を回転させる労働とは、技術的にはまったく異ったものであり、作りだされる生産物もそれぞれ人間社会に必要なものとはいえず、異った性質をもつ有用物である。労働の質とは、このような具体的有用性の面であらえられた概念であり、その上での労働の質的差違として考えるべきではないのであるか。

とすればもちろん、この量と質とはまったくきりはなれた概念ではないとはいえず、やはり労働の相対立する側面なのである。単に『質は量に照応している』といってしまうわけにはゆかないのである。次元の異った側面なのだから、各社会において、それぞれの労働がとる形態に応じて検討されれば勝手に結びつけただけでは、問題は混乱する。

純粹の資本主義社会では、いうまでもなく、すべての労働は資本家によって、資本家のためのものとして行われる。人間の労働生産過程が労働力を商品化されることによって、資本のための資本による価値形成⇒増殖の過程となるのである。

ここでは、労働の量の側面は、商品を生産する労働が、抽象的人間労働として、生産された商品においては、商品の同質性を示す価値を形成するものとなる点においてとらえられる。

労働の質的差違は、具体的有用労働としての労働が、それぞれの商品の使用価値を形成することに示される。

いうまでもなく、価値は、すべての商品が同質で、単に量的にだけ異っている関係であり、使用価値とは具体的な有用性なのであって、それぞれ商品の二要因をなすものであり、それぞれの存在を前提しあうて、はじめて自らも存在できるものである。けっして各商

一体、しかし労働の質による分配とはどういうことなのだろうか。

もちろん、労働が人間社会の社会的生活に必要な物質的代謝を充足させる人間の労働を意味する以上、労働の量と質とがぜんぜん別個のものであるはずがない。それは人間の労働の二つの側面を意味するものにほかならない。

人間の社会が、各個人の生活の総括であると同時に、一つの社会的な生活をなすものである以上、各々の具体的な労働は本来全体的な総労働の各可除部分を構成するものであり、さらに同時に具体的にはそれぞれの有用物を生産したり、社会的に必要な運輸、簿記の仕事にたずさわるものとなるのである。労働の量とは前者の側面をさす概念であり、労働の質とは後者の側面をさす概念なのである。

社会主義社会においては、このような人間の労働は、完全に一つの共同体的な労働に組織され、各人の労働が全社会的総労働の分子であることは、労働する者の意識にとっても直接明瞭な形であらわれるようになる。万人が一人のために、一人が万人のためにある社会であり、さらに生産力の高度な発展とともに、各個人に固着された分業は揚棄されて、必要に応じて、真に自由な社会が建設されるのである。

労働の量とは、このように、各労働が等質性としての側面であらえられて、その上であらわれる量的差違にほかならない。

社会主義社会は、共同社会である以上、人間生活に必要な物質代謝は、つねに共同労働であり、自然にたいして、総体としての人間による労働という性格は完全に明らかとなる。

もちろん、個々の労働は具体的には異ったものである。トラクタ

品にはばらばらに切離されてあるものではない。

資本主義社会では商品は資本によって生産されるのであるから、資本家は、商品の具体的な有用性に関心をもち、もつものとしてではなく生産価格に転化して利潤をもたらすものとしての価格の形成と増殖にその関心をもつものである。簡単にいえば、資本家は商品が役にたとうとたつまいと、もうかりさえすればよい、という考えなのである。

しかし、一方では生産手段をもたず、みずからの労働力を商品として売る以外に生活する道をもたない無産労働者が存在する時には資本は、商品化された労働力によって、労働による生産の活動をもみずからの関係のうちにとり入れて、社会的生産を推進する力をもつようになるのである。

資本制社会が、恐慌のような根本的矛盾を必然的に露呈するものではあっても、各資本家が、利潤追求を目指して無政府的に勝手に生産しあうても、一応社会的な再生産過程を推進することができるのは、人間労働を労働力商品とし価値による交換関係を確立しえたからにほかならない。

この社会の中では、労働者と資本家の関係は、単なる生産物の分配の関係ではない。労働者は自己の生産した商品を資本家とわけあうのではないのである。生産物商品商品は基本的には、資本によって資本家のために生産されるのであり、すべてその処分権は資本家の手中に存在するのである。労働者は、みずからの労働力を売った対価を賃銀として受けとるのであり、その労働力がどう使われるかは資本家によって決定される。労働者は生産物から賃銀をわけとるのでなく、生産のはじまる前に、みずから商品を売って売った時に

その対価を資本の中から払わせるのである。一般には賃銀は生産の終わった後に支払われるために、まるで賃銀が生産物の中から支払われるように思われているが、決してそういうものではない。分配は資本家や地主、つまり所有階級の間で行われるのである。もちろん、資本家が資本家であるためには、生産を継続せねばならないから、彼は商品売って貨幣にかえ、その中から次の生産に必要な労働者をやとうために賃銀を支払わなければならない。資本家は可変資本を支出しなければ資本家たりえないので、賃銀部分が存在するわけだが、これは剰余価値、すなわち利潤の部分が地代や利子や産業利潤の形態で資本家間に分配されるのはまったく異った関係なのである。

したがって、資本制社会では、労働の質による分配も、量による分配も問題とはならない。労働者は自らの労働力の価値、すなわち自分や家族、子弟の社会的存続に必要な最低生活資料をうるに足るだけしかうけとることができないのである。それ以上の生産したものは、すべて資本家にしぼりとられてしまうのである。

もちろん、資本制社会は、前資本主義社会と異って、生産力水準が決定的に上昇しており、生産者は、それぞれの自然的条件にしばりつけられた固着性を一応ぬけていている。農奴が農奴以外のいかなる労働もできなかったのは異って、産業労働者は決して一職種に固定されたものではない。もちろん現実の社会では、だれもがどの労働もできるなどというのではないことは当然だが、しかし、資本主義にはこのような単純労働と複雑労働の差をとり、すべての労働を単純労働化する傾向が存在していることは本質的な点として考えねばならない。労働者が一労働種類にのみ活動でき、ほかの仕事

ものなのである。そうした場合、そこでの生産物の分配は、一体なによつて規制されるのだろうか。

労働の質的差違は社会主義になってもますます多様干差万別のものとなるだろう。具体的な労働種類の差までがなくなつて質的にも単一な労働になつてしまはずがいない。

しかし、この社会では、基本的には万人に高等教育がほどこされ生産技術水準が決定的に高くなつていのである。そこでは基本的にいかなる人間も、いかなる労働業務につきうるものとなつていことに注意せねばならない。決して職業的差違に基づくような社会的特権の差は存在できないのである。

だれでもがトラクター運転手をやれ、また、だれでもがオートメーション工場を管理できる時、一体どこにだれが社会的により大切にあり、だれがより劣等かなど考えることができるだろう。

もちろん、各個人の身体的差異はあるから、能力にも差はある。しかし、社会的な労働力を各部分に計画的に配分するという点からいつても、資本主義の場合、まだ中心的産業においても、若干残されていたような単純労働化されない部分は、基本的に単純労働化されていくと考えるべきではないだろうか。運転労働と、管理労働が、基本的に同質のもの、同質の人間労働力の支出に還元され、計量されるのであれば、計画的な労働力の配置は不可能だからである。各個人の能力差は、労働量を給付する上での量的差として理解されるようになるだろう。ある者は同一時間により多くの労働を給付し、ある者はより長く働ける、というように。

だれもが社会的に必要なことをやっていると、その生産物の分配を規制するものが、労働の量的差違以外にないことは当然である

はできないというのでは、自由な労働力の移動はありえず、したがって、資本主義は自律的に自己の運動を推進していくというその機構を停止せざるをえないことになつてしまふ。

労働の量による分配を考える時には、労働が均質なものとしての総人間労働に還元されるようなものとなる時、すなわち、各人の労働種類の選択が自由に行えるようになる時でなければならぬであろう。各人に固着した熟練労働と単純労働の対立などが消滅し熟練労働者が特殊な個人に限定されるということとはなくなつていなければならない。

労働がこのように完全に単純労働化し、肉体労働と精神労働の対立が消滅してしまうのは、もちろん共産主義社会ではじめてありうることである。しかし、すでに資本主義社会においては、手工業的な、前資本主義的産業を残すとはいへ、基本的な部門において、労働を単純労働化する傾向を明確にするのである。

そこで次に社会主義社会と共産主義社会の分析に入つてみよう。労働者が自分の労働が自分のためではなく、他人のために行われるという資本主義社会は、人間社会にとって本来のものでは絶対ではない。それは生産関係の一歴史的形態にすぎないのであり、真の自然な自由の人間社会では、すべての人間が協力しあつて労働する共同体となるのはならぬ理想的理想ではなく、現実の社会発展がもたらす当然の結果である。

社会主義社会では、なんともいう通り、全体の労働が社会的な総労働として組織されるのであるから、各人の労働は当然にその総労働の構成部分となるのである。そこでは、それが社会的必要に合致し計画的に組織されたものであるかぎり、それは社会的に不可欠な

う。

優等地を農耕するトラクター運転手は、たしかに劣等地を耕作する者にくらべればより多量の小麦の生産にあずかつて力あつたかもしれない。劣等な土地を耕作する者は同じだけ働いても、少ししか生産できないのである。しかし、社会にとつて、どれも一定の穀物需要をみたすために必要なだから農耕が行われているのである。

だとすれば、このトラクター運転手たちの労働になんの差がつけられようか。同じだけ労働したのなら、社会主義社会では当然同じだけとるのである。

もちろん、労働には強度の差がある。同じ時間内に、同じだけ身体各器官が活動するものでなく、短時間に多くの労働をすることもあるだろう。しかし、これは労働量の差として処理されることである。優等地と劣等地のトラクター運転手の労働が同一の基準に労働量に還元されるばかりでなく、質的に異つた労働、トラクター運転労働とオートメ工場管理労働の間にも、同一の基準に労働量が、分配の尺度となるのである。

こう考えてみる時、社会主義社会では、正にマルクスが各人は労働にに応じてうけとるといっている意味が明確になるのである。

ここで勝手に労働の質による分配などという概念をもちこんで、生産高比例制のソヴエト賃銀制度(大体社会主義で賃銀制度がある、などというのが珍妙なのだ)を社会主義的と強弁しようとしても無理な話である。工場管理者が一般労働者にくらべて、数十倍もの報酬をうるようなことは断じてあってはならないのである。

もちろん社会主義社会は旧制度の母斑を残した社会である。そこでは自己の労働給付に応じてしか、うけとることができないのであ

る。そこではマルクスがいうとおり、「個々の生産者は、彼が社会にあたえただけのものを——控除した後で——」（これは社会的総生産物中から、生産手段の補てん、追加、危険保険だけでなく、生産にぞくさない一般行政費、学校、衛生設備のような共同施設、労働不能者のための基金等を控除した上で分配が行われることをさしている——筆者）正確にとりもどす。彼が社会にあたえたものは個人的労働量である。たとえば、社会的労働日は個人的労働時間の総和からなり、個々の生産者の個人的労働時間は、社会的労働日のうちの彼の提供した部分、すなわち社会的労働日のうちの彼の持分である。彼は（共同の基金のための彼の労働を控除したのちに）、これこれの労働を提供したという証書をうけとり、この証書をもって、消費財の社会的貯蔵から、おなじ量の労働が必要であるだけのものをひきだす。彼は一つのかたちで社会にあたえたのとおなじ労働量を、べつのかたちでうけとるのである」（マルクス「ゴータ綱領批判」より）

もちろん、各人の肉体的精神的不平等から、労働が尺度となるにしても、各人が給付しうる労働の大きさと強度は異なったものとなるだろう。したがって労働が不平等である以上うけとるものも不平等である。それは労働量に応じて不平等なのである。

こういう関係を考えれば、ソビエト賃銀を基本的に支配しているといわれる、出来高払制が、労働量による分配とはまったく異質のものであることは明かではないだろうか。

社会主義社会はもちろんまだ完全な共産主義ではない。完全な共産主義社会では、個人はもはや分業にしばられず、労働そのものが生活の欲求となり、「各人は能力に応じて、各人にはその必要にお

うじて」分配が行われてゆくのである。

芸術家や学者や農業労働者などという職業的差別は完全に一掃され、真に自由な人間社会ができ、人類史が始るのである。

以上大分冗長になったが、「労働の量と質による分配」などという迷論が「横行している」ことは、どうしても黙過できないので、あえて意見をのべた次第である。

大体、この北海道委員会の人は、ソビエトが社会主義であるという前提の上に立って、社会主義論をやるからどうしても無理がでてくるのである。

科学的方法は、そのようなドグマの合理化のためではなく、ソビエトの現実があるがままの点から分析するものでなければならない。そう考えれば、スターリンでさえ、彼の社会主義論で悩まされた、ホルホーズ的所有形態の過渡性まで見失って、「社会主義的生産の二つの基本的形態」は「国营生産形態とホルホーズ形態」なのだから「商品」は社会主義にも存在しているなどという馬鹿げた結論に達するはずがないのである。

資本主義と社会主義の差は、単に価値法則が生産の規制者たる位置から、社会主義的生産に利用されるようになる、などという点にあるのではない。社会主義は価値法則を利用するのではなく、廃絶するのである。

これらの人々は、価値法則というのは商品生産の法則であり、「剰余価値の法則」とはちがったものとして考えるスターリン主義者共通の誤謬をまだ持っている。

「剰余価値の法則」とはなにかよく判らないが、価値法則は資本

でも、生産の分配はあっても交換はなく」というのは「全くひどい偽造」でもなんでもない。

それを北海道委員会の諸君は「マルクスは第一段階においては、ひとつの独自の交換をみとめている」として、例の社会主義社会で労働給付に応じて他のかたちの労働量をうけることを生産物の交換になぞらえていることをもって鬼の首でもとったようになってい

しかし、この労働に応じて他の労働生産物をとることが、どうして生産の分配だけではなく交換だといえるのだろうか、社会的総生産物の中からとるだけのことであって、自分の生産物を他者の生産物と交換するのでは絶対でない。

こういう揚足とりは、結局のところは「姫岡式経済学は、このように、俗流的ソビエト批判ブルジョア社会弁護論とくしくもまた当然に一致する。この両者の間にはたしかにある等価関係理論的価値法則が作用している」（傍点は原文）などということにしかならないのである。こういうくだらぬ駄洒落をとばすひまに、もう少し冷静に現実を見ることができないものだろうか。

私も間違っている点がわかればよろこんであらためるつもりである。しかし、あまり無内容な馬鹿馬鹿しい罵倒からは、決して生産的論争は生まれぬことを前衛筆者の諸君は知るべきである。

ただただ、既存の現実のわくの中でしか問題を考えることができず、批判のための批判として寄木細工をつづけても一層理論的不毛となるだけの話だろう。

化石化したスターリン主義のドグマにしがみついているのだとしてたら前進する労働者階級の闘争の前に爆砕されつくす運命にあることを忘れてはならない。

主義社会で、労働力を商品化することによって始めて必然的基礎をうるのであって、資本制社会をはなれて価値法則を考えるのは無意味である。無産労働者化しない小生産者にとっては、報酬が必要生活費に落ちつくといった必然的關係は見られないのであり、したがって、交換関係にも、価値による規制を必然とすることはできないのである。

こういうことはいくらスターリンが価値法則は商品生産の法則で剰余価値の法則が資本主義の法則だといったからといって、マルクス経済学はごまかされないのである。

私などがいうまでもなく、こんなことは宇野弘蔵氏の労作をはじめとして、すでに古くから日本の経済学では水準的常識となっ

てゐることである。

ともに虚心にマルクスの経済学を学ぶというのであれば別だが、ソビエトの現実を美化するために、科学的分析をはなれるとすればそれは俗流経済学にてんらくせざるをえないだろう。

マルクスが「生産手段の共有を基礎とする協同組合的社会的内部では、生産者は自分の生産物を交換しない。同様にここでは、生産物についてやされた労働は、この生産物の価値としても、すなわちその生産物の有する物的特性としてあらわれることもない。なぜならいまや、資本主義社会とは反対に、個人的労働はもはや間接にではなく直接に総労働の構成部分として存在しているからである（ゴータ綱領批判）より」といっているのは、なにも完全な共産主義についてだけいっているのではない。労働が総労働の構成部分となり生産物に個人所有の刻印をおすことがない以上、社会主義社会に生産物の交換がないのは当然である。姫岡氏が「いずれの段階をと

疎外論の探究(一)

問題の提起——どのような探究か？

森 茂

一、まえがき

(1)

ソ連共産党二一回大会が、高らかに「共産主義社会の建設」を宣言したとき、三年前の二〇回大会が全世界の共産主義運動の中にひき起したあの衝撃を思い出すと、まるでもう遠い昔のような気がする。

そして、二〇回大会が与えた、ソ連共産党の「自己批判」は、スターリンの「個人崇拜」にたいする「批判」として、すでに「集団指導」の確立された今日、もうなんらうんぬんする必要のない「実践的に克服された」問題である、というように、どの国の共産党も語っている。

現在の国際共産主義運動においては、あの歴史的なハンガリアプロレタリアートの蜂起や、ポーランドの「政変」や、あるいはフラ

ンス共産党の敗北や、を含んだこの三年間の世界プロレタリアートの経験は、すべて「二〇回大会の決定がまったく正しかったことを示している」にすぎないらしい。

二〇回大会が与えたあの電撃的な衝撃は、共産主義者のどこに吸収されてしまったのだろうか？

どの国の共産党にも起ったあの動揺は、なぜに、共産主義運動に対する根底的な追求にまで深まらなかったのだろうか？

ごくわずかの、本當にごくわずかの革命的プロレタリアートだけが、スターリン批判を、共産主義運動の根本的批判としてうけとめほりあげた。

ごくわずかの革命的プロレタリアートだけが、おそれることなく共産主義運動の敗北の追求につきすすんだ。そしてすすみつつある。当然、激烈な闘争を、生命をかけた党内闘争をもともないながら。

この人々はまったく少なく、現在ではまだまだまったく力が弱いが、すすんでいることが重要である。

(2)

スターリン主義の批判は、さまざまな面からはじまり、そして進んでいる。政治戦術の批判から出発して、諸科学の批判にいたるまで。

スターリン主義が前衛党のあらゆる活動に害毒を流しこんでいるから、あらゆる場面で闘争は必然である。

ところで、その批判が、多くスターリン主義哲学の批判から出発したことは、興味ある事実である。

スターリン主義哲学の批判には、スターリン主義批判の核心がふくまれていることを、この事實は示しているように私には思われる。

けれども、スターリン主義哲学の批判は、完成したと考えてよいだろうか？あるいは、少なくともスターリン主義哲学を崩壊せしめるにいたるだけ十分な打撃を、くわえたといえるだろうか？

たしかにスターリン主義哲学にたいする、三浦つとむの、黒田寛一の、ルフェーブの攻撃は、スターリン主義批判の突破口をきり開く偉大な攻撃だった。それは疑いもなく、スターリン主義の呪縛から革命的プロレタリアートの眼を開かせる最初の一撃であったにちがいない。

だが、それは、突破口をきり開いたにすぎない。

スターリン主義哲学は、それがあまりにナンセンスであるがゆえに、大衆をとらえてはならないにしても、共産党の権威のおかげで、まだ崩壊はしていない。

スターリン主義哲学は崩壊せしめねばならない。

とすれば、スターリン主義哲学の批判は、まだはじまったばかりである。

スターリン主義を崩壊せしめるものは、いうまでもなく物質的力であり、スターリン主義ではない、マルクス主義が、大衆をとらえることであり、その理論をもつ党をつくりあげることである。

だが、その真のマルクス主義の復活のためには、スターリン主義哲学の粉碎のための理論研究が、徹底的におこなわれねばならない。

註(1) 日本における黒田寛一、フランスにおけるルフェーブの活動など。

(3)

スターリン主義哲学の批判がしばしば「疎外論」の探究をめぐっておこなわれることは、また大いに興味ある、そして重要なことである。

なぜなら、たしかに前号で同志佐久間が語ったように「疎外論」こそスターリン主義がただの一言もふれなかった問題であり、しかも若きマルクス、エンゲルスの共産主義論が、これを中心に組み立てられた問題であるからである。

だが、この問題も、まだあまりのべられていない、ので、まして解明された点は、疎外論の全体からみればほんのわずかである。

考えてみればわたしはここで、スターリン主義哲学についていうその前提として、マルクス主義哲学を頭においている。

しかし、そもそも哲学とはなんだろう。さらにマルクス主義哲学とはなんだろう。

スターリン主義哲学はこれについて、まったく落語のような解答

を与えてくれる。それについては、あとでのべよう。

だが、マルクス主義哲学とはなにか、さらに、マルクス主義とはなにか、という間にすら、これまでのスターリン批判はむしろスターリン主義哲学の誤った見解を粉砕することはできて、まだ完全な自分自身の答を、もっていないと私は思う。

スコラ論議の問題として、そうした問題をうんぬんするのではない。スターリン主義との生命をかけた闘争においては、そういう理論的説明もまた必要であり、その説明が、疑いもなくスターリン主義への打撃になるからこそ、問題にするのである。

以下、スターリン主義哲学における疎外論の抹殺について、私の考えをいくつかの点でのべてみようと思う。

この文ではいくつかの点での問題提起にとどまるが、以後、さらに問題をほりさげていきたいと考えている。

私の思考の未熟さは私の文をどうしてもわかり解いものにする。

また、こうした政治機関誌で、そういう性質の展開をすることに、もたしかに困難がある。

みなさんの批判を待ちたいし、スターリン主義批判の前進のために、いくらかでも役立てば幸いである。

二、「解放の頭脳」としての哲学を再生せよ！

「ドイツ人の解放は人間の解放である。その解放の頭脳は哲学でその心臓はプロレタリアートだ。哲学はプロレタリアートを揚棄せずには実現されえず、プロレタリアートは哲学を実現せずには自己

を揚棄できない」^(註1)

少しマルクスをまじめに勉強した人ならだれでも、右の言葉を知っている。一八四四年の共産主義思想へ急速に接近しつつあったマルクスの「ヘーゲル法哲学批判」の序説の「要約」として「人間の解放について、および人間の解放と「哲学」との関連について、書いた言葉である。

しかしこの言葉がなにを意味しているかを深く考えた人は、あるいはこの言葉を文字通りなかにを語っているかを理解した人すら、マルクス学者の間にはなんと少ない言葉だろう。

この文のつぎにはつぎの有名な結語がある。

「内的諸条件がすべて満たされれば、ドイツの復活の日は、ガリア(フランスの古名)の鶏鳴によってつげしらされるであろう。」

なんと、この語は、今日の国際共産主義運動の禁句「世界革命」を、すなわち「ドイツ人の解放は人間の解放である」という思想を具体的な革命の展望において語っているのである。

ドイツ革命は、フランス革命によってつげしらされるであろう！というこの素晴らしい直観の正しさは、一八四八年の二月のバリ蜂起が、イギリスをのぞく全ヨーロッパに波及したことによって実証されたものである。

ところでまた「ドイツ人の解放」否、そうでなく「人間の解放」の「頭脳は哲学」で、「心臓はプロレタリアート」だとマルクスはいう。解放の「頭脳」は、ほかのどのような学でもなく、「哲学」であるとマルクスはいつている。この言葉の意味を、まじめに考えて大衆に説明したマルクス学者がなん人もいただろう。あるいは、この言葉を、研究に値する、と記憶のノートに書き込んだ哲学者さえ

どれだけのだろう。

今日、スターリン主義者によってあまりに墮落させられたマルクス主義哲学の再生のころみだが、哲学の「有効性」の不足の見地から、あるいはその他種々の哲学の「修正」を改めるといふ見地からおこなわれている。

だが、「哲学」をマルクスに復帰せしめようと努めるならば、かならず、マルクスの右の言葉について、まじめに考えてみねばならない。「哲学」をあらゆる墮落から救う道は、それをプロレタリアートの解放の頭脳としての見地から検討することが必要である。

スターリン主義哲学にたいする批判が、そこにおける「疎外論」の抹殺の追求から始められる場合が多いことは、ゆえあることだろう。若きマルクスとエンゲルスが、とりわけマルクスが、その全体系を組みあげていった基礎の概念である「疎外」論のスターリン主義哲学における抹殺を指摘することは、疑いもなく、無条件に正しいことであり、必要なことである。

しかし、それを、指摘すると同時に、さらに進んで系統的に、全体として展開することが必要である。

スターリン主義哲学を、全体としての体系においてとらえることまた、その運動において、すなわち、成立と発展史としてとらえること、が、問題の全体としての説明のためには不可欠である。

そこでの疎外論の抹殺についても、全体としてのマルクス主義哲学のなかに殺され、なかに生かされたか、そしてそのなかで疎外論の抹殺がどんな意味をもっているか、というかたちでなければ、問題の正しい指摘はできて、全体としての正しい説明はできないだろう。

たとえばスターリン主義哲学の批判として「客観主義」という用語が今日普通につかわれる。

この言葉を科学における「人間の無視」という、今日普通に使われる意味で使ったのは黒田寛一であろう。黒田寛一はこの言葉を田中吉六や三浦つとむの用語からもってきた。

しかし、田中や三浦の用語法と黒田の用語法には、本質的な、あるいは深刻なちがいがあつた。なによりも、たとえば、三浦つとむの「客観主義」という概念の中には、機械的唯物論の批判はあつても疎外論の喪失にたいする批判は、全然ふくまれていない。

そういった点を考えて、スターリン主義哲学の本質を、もっともよく大衆にバカロする言葉として、客観主義という用語法が最適かどうかというような考察はだれによつても、まだ行われていない。

註1 マルエン選集大月書店版補巻4一九一―二頁

三、スターリン主義哲学「体系」の批判

最近数年間に翻訳がだされて、われわれが容易に入手できるスターリン主義哲学の「体系的教科書」は、最近で前号で同志佐久間が批判をかいた「哲学教程」コンスタンチノフ監修「史的唯物論」アレクサンドロフ「弁証法的唯物論」の三種類ある。

「哲学教程」は「スターリンの個人崇拜を克服したのちのソ連邦哲学界の新しい「成果」(教程、訳者のことば)だそうだが、それにしては、三つとも、まるで同じ構成をもっている。

まったくマルクスが絶対にいわなかったことを、マルクス主義と

称して使いまくるこれらの本を読むと腹がたつことおびただしいし、ぜんぜんにも教えられることのない「教科書」を読むつづけることは、砂をかむ思いだが、ただ落語のような面白い言葉を拾おうと思えば、なかなか沢山ある。

この「体系」はつぎのようである。哲学教程を引用してみると

①哲学とはなにか——「哲学の主要な特殊性」？——「多かれ少かれ全体的な（?!）多かれ少かれ全体的」とはなんだ？（世界観である）」

②世界観とはなにか——「世界とはなにか（?!）それは永遠に存在しているのか、それともなんらかの仕方でも出現してきたのか（?!）」すなわち「なにが本源的か——思考かそれとも存在か（?!）物質か？といわないのか（?!）——という問題」「さらに、われわれの思考は現実の世界を認識できるかという問題である」

③世界観はこの解答の仕方によって唯物論と観念論の二つの「流派」（一）にわかれる。

④マルクス主義哲学は、唯物論のもっとも発展したもので「あらゆる運動および発展のもっとも一般的な諸法則を研究する」それが弁証法的唯物論で、これを「社会生活の諸現象の認識にしひろげ」「社会生活の科学的な理解」をうるとそれが「哲学的世界観（?!）哲学とは世界観だったではないか？」のなくてはならない一部分である「史的唯物論」で、弁証法的唯物論と史的唯物論がマルクス主義哲学を構成する。

以下「弁証法的唯物論と史的唯物論」の「体系」がつづくがそれは省略しよう。

エンゲルスがいつものしなかったことを「引用」することはもうない、と人は思うかもしれない。

冗談じやなく。

つぎの比較を見たまえ。「マルクス主義哲学は、エンゲルスの言葉によれば、『なにかとくべつの諸科学においてでなく、実証の諸科学においておのれを確認し、実証しなければならぬ世界観』である。*エンゲルス「反デューリング論」国民文庫版第一冊、二二五ページ」（哲学教程三四—五ページ）

「近代唯物論は、古い唯物論のたんなる復旧ではなく、古い唯物論の基礎をひきつづきのこしながら、さらに、哲学および自然科学の二千年にわたる発展と、この二千年間の歴史そのものとの全思想内容をわけくわえるものである。それはもはや哲学ではまったくない、たんに世界観であり、この世界観は、なにか特別の科学中の科学においてではなく、実証の諸科学においておのれを確認し、実証しなければならぬのである」（反デューリング論「国民文庫版第一冊、二二五ページ」）

驚き入った話だ！このようにエンゲルスをせんぜん歪めて、まったく反対の意味に引用して「教科書」を構成するとは、なんとという恐るべき「世界観」を、このスターリン主義哲学者たちはもっていることか！！

第二、マルクス主義哲学が「弁証法的唯物論のほかに「史的唯物論」という構成要素をもっているとは、エンゲルスはけっしていかなかった。

史的唯物論は「哲学である」⁽⁹⁾と、エンゲルスはけっしていかなかった。

マルクス主義哲学のこうした把握が、マルクス、エンゲルがけっしておこなわなかったものであることは少しまじめにマルクス・エンゲルスを勉強した人ならだれでもわかる。

第一、マルクス主義哲学は「多かれ少かれ全体的な」世界観であるなどと、彼らは一度でもいったらうか。わが日本のおそらく「哲学教程」の著書より多少頭の古い「新・哲学教程」の著書は、マルクス・エンゲルスの唯物論を科学的な世界観の「萌芽」だなどと大胆なことをいうが、この規定を「注目すべき規定」といったが逆の意味でまったくそのとおり。エンゲルスは哲学は世界観ではないとなど、人度もくり返していつているのだから。

「空想より科学へ」の言葉は、マルクス主義を少し勉強した人ならみな知っている。「近代唯物論は本質的に弁証法的であり、それはもはや他の諸科学のうえに立つどのような哲学も必要としない。もろもろの事物の、およびもろもろの事物にかんする知識の、全体的関連のなかでのおの科学がしめる位置をあまりにせよという要求があらわれくるやいなや、この全体的関連をとりあつかう特殊な科学はすべて不用となる。それまでの哲学全体のうちでなお独立して存続するのは、思维とその法則にかんする学問、すなわち形式論理学と弁証法である。そのほかのすべては、自然と歴史にかんする実証科学的なかに解消する」⁽⁷⁾

エンゲルスは、事物の全体関連は、哲学から個別科学へ移行する、といっているのだ。

最近、スターリン批判のあとでは、スターリンがしばしばやったように、マルクス・エンゲルスを歪めて引用すること、マルクス・

った。（この当否は別に論ずるがここではこの歪曲した引用が問題である）このマルクス主義と、無縁な哲学体系を、最初に作り上げてみせたのは、ほかならぬスターリン自身のソ党史の中の「弁証法的唯物論と史的唯物論」であった。

この三八年に書かれた大論文は、紹介されるや日本のマルクス哲学者をも、あまり型破りで、単純なドグマがならんでいるために仰天させたが、たちまちこの「正しさ」の解釈に没頭させてしまった。まったくこの御用哲学者にとっては、ソ同盟「共産党」の歴史の、スターリンによる途述に、誤りがあるはずがないではないか。

ごくわずかな勇敢な哲学者が、この論文を批判した。三浦つとむは、この論文の「生産」が物質的生産に限られており、人間の生産についていっていないことを批判した⁽¹⁰⁾。

だが、この論文が、疎外論をその最後の残りまで完全に哲学から追放してしまった事実を中心に批判したものは、すなわち私が最初にのべた「人類の解放の頭脳」としての哲学の見地から全面的に批判したものは、私は知らない。

けれども、真にプロレタリアートの解放に生命を賭けて闘うことを決意する者ならだれでも、こうしたたぐいの背教のマルクス主義がその哲学の出発点に、大衆が抑圧されているという事実をおかぬことに、すなわち、疎外論を無視することに、深い憤りを感じねばならぬはずである。

若きマルクスが、否、共産主義思想に達したマルクスが、終生その「世界観」の基礎としていたものが抑圧された大衆の実存であり、

そしてその哲学的な把握が「疎外」であることを知る者なら誰でもスターリンのどんな言葉の修正よりも、疎外論を哲学から追放したこのやり口には、激怒を感じねばならぬはずである。

スターリンはなにゆえに、この疎外論の入る余地のない体系を作ら上げたのだろうか？

それに完全に答えるには、この体系が作られるための前提をつくらねばならぬ。ソ連哲学界における十数年にわたる闘争を全体としてとらえなおし、だれの哲学的見解のなすが、どのように攻撃され、打倒されていったかを見てみねばならない。

それはここではできないが、一九三八年、十月のボルシェヴィキの中央委員の九〇名までがスターリンの手によって殺され、コミンタインの指導下に資本主義国のプロレタリアが次々と敗北させられソ連の大衆は、過酷な出来高賃金制をスターハートフ運動の中で苦しめられていたそのとき「社会主義建設の発展」の旗印によって自己を合理化せねばならなかったスターリンが、どれほど、真の社会主義を怖れたか、そして真の共産主義を怖れたか、を想起せねばならないだろうし、そして、したがって理論戦線では共産主義理論の修正こそスターリンの緊急事であったこと、を考えねばならないし、しかも疎外論こそ、マルクスの共産主義思想の核心であったことを想起せねばならぬだろうということも語っておいても、いいすぎではないだろう。

- 註1 哲学教程I合同新書 9ページ
- 註2 // 17ページ
- 註3 // 18ページ
- 註4 // 35ページ

れず自分の頭でマルクス・エンゲルス、レーニスを学び、そして、自分の物理学の研究において主体的にマルクス・エンゲルス、レーニンをとらえようとしたものであったから、多くのスターリン主義御用学者には無視されたか理解されなかったが、ほんのわずかの革命的な学者をとらえた。それが田中吉六や三浦つとむのマルクスの研究、初期マルクスの研究、そして、「実践」「主体的活動」の分析を生みだしていった。

なかでも、とくに「ニュートン力学の型成について」と「技術論」は、前者は名高い「三段階論」によって、後者は「技術とは人間実践（生産実践）における客観的規則性の意識的適用である」という規定によって、有名であり、また後の研究の基礎となっている。

たしかに、武谷三男の「弁証法」の研究には、学ぶべき多くのものがある。そしてそれは、直接にスターリン主義に対する疑問、批判を讀者に作りださうものである。

けれども、武谷のこの「弁証法」には、どこか真のマルクス主義とはちがったものがある。今日まで、日本の哲学におけるスターリン主義批判は、かならずといってよいほど武谷をかつき出すがだれ一人として、その点をはっきり語らうとしないが。

その点とは「武谷三男には「疎外論」が全然ない、ということである。

たとえば技術論をとってみよう。

なるほど技術を「人間実践（生産実践）における客観的法則性の意識的適用である」と規定することは、戦前の唯物論研究のように技術を「生産手段の体系」とするよりはるかに包括的な明確な規定である。

- 註5 // 46ページ
- 註6 // 98ページ
- 註7 青木文庫版 88ページ

註8 河出新書「現代哲学読本」(五四年八月刊)の「哲学を学ぶ態度」で、三浦つとむは、ソ党史の「弁証法的唯物論と史的唯物論」がマルクスの引用を、歪曲して引用していることを示した。(四三ページ)それは次の通り。「経済的基礎の

変化とともに、巨大な全上部構造が、おそかれはやかれ急速に、変革される」(スターリン、国民文庫版「弁証法的唯物論と史的唯物論」一三九ページ)
「経済的基礎の変化とともに、巨大な全上部構造が、あるいは徐々に、あるいは急速に、変革される」(「経済学批判序言」国民文庫版十ページ)

註9 右と同じ。また「弁証法、いかに学ぶべきか」(双流社刊五〇年五月)も、この当時のものとしては驚くほど大胆な指摘をしている。

四、「技術論」と疎外論

戦後日本の二〇回大会のスターリン批判以前の、スターリン主義哲学の再検討の試みの出発点であり、原動力であったものは、二一年に発行された武谷三男の「弁証法の諸問題」であった。

物理学者として戦争前、戦中にまじめにマルクスを勉強し、自分の学とマルクス・エンゲルスの業績とを結びつけようと努力し、書きためた論文を集めて発行したこの小冊子はあらゆる権威にとらわ

しかし、この技術論には、技術がほかならぬある人間群の技術ではないこと、労働者大衆は技術から分離させられていること、そしてまた科学者も技術者から分離させられていること、についてのまったく無関心がある。

論理的に不十分な点を指摘しよう。第一、ここでは、自然科学における技術についてだけいっているが、社会科学における技術は実存しないか。たとえば、政治技術、軍事技術、経営技術。これらの「技術」と自然科学における「技術」の区別と同一についてこの規定はなにも明らかにしない。

第二、技術の歴史的规定がぜんぜん明らかにされない。これはこの発表後の論争の中で二、三の人によって提出された疑問だが、説明されずに終わっている。

第三、なぜ技術がたえず科学に移行するか、また科学がたえず技術に復帰するかは、与えられた事実として以上には展開できない。しかし、これらよりも、なによりも問題なのは、技術をこのように規定しては、人間労働一般の規定と区別されえない。

「技術は本質であり、技術家はその現象形態である」と武谷は主張する。

けれども、技術は技術家と切り離せない。なぜ、技術家の実存するか、の問の答と、なぜ技術が実存するか、の問の答は不可分である。客観的法則性の「意識的適用」といっても、これは社会的な適用と個人的な適用が区別されていないから、科学者の「意識的適用」と、技術家の「意識的適用」と、労働者の、技術に命ぜられた「意識的適用」が区別されない。

真のマルクス主義者にとっては、現存の資本主義社会では、人間

労働は疎外された労働としてしか実存しないという把握を持つものにとつては、技術を、人間労働一般から直ちに展開するのではなく人間労働の疎外された形態として、人間労働が、疎外によってうける形態規定の一つとして、技術を把握することが正しい。

科学者が、目的意識的に行なう労働と、労働者が、強制され、命令されて行なう労働とは、抽象された空虚な労働としては同一であり、また、対象化された生産物においても同一であるが、二人の主體的活動においては快樂と苦悩とに区別される。両者における労働を抽象し、その同一性において技術を抽象することには、完全な規定としては不十分さがある。そしてこの不十分さにこそは、その規定が**共産主義的ではありえないものがあるのだ**。

この疎外論を導入してはじめて、技術と科学との相互移行が空虚にでなく生きた現実において分析され、自然の技術の人間の技術(政治、軍事経営等の技術)との相互移行が説明され、技術の人間労働における歴史的な形態規定が——魔術、錬金術から、眞の社会的人間労働へ移行すべき過渡的形態としての技術が分析されるだろう。

これは武谷の論文の一つの批判にすぎない。しかし「疎外論」をマルクス主義の核心におくものならだれでも、深く考えればこのような問題につき当らざるをえないだろう。

けれども日本のスターリン主義哲学批判は、武谷をこのような立場からのりこえようとはしなかった。

そのかわりに、武谷とマルクスを折衷しよう、という努力があるいは武谷よりかかってマルクスを解釈しようとする努力が、しばしばおこなわれていた。

問題を、このように提起することが必要である。この見地から、

深刻な、徹底的な「探究」が、開始されねばならない。

五、疎外論探究の論点

疎外論がまだ再生していない、ということについて、そのことだけ私を私しつこく書いてきた。

それは、今日のわれわれの世界革命の大業において、眞の革命的な思想・理論を復活させるためには、おそらく第一に、疎外論の正しい把握がきわめて必要だからである。

スターリン主義を絶滅し、マルクス主義を、すなわち、マルクスの共産主義による資本主義の批判の展開を再生させることは、疎外論の正しい復帰なくしてはありえないと私は思う。

革命戦略と戦術の確立のためにも、マルクス経済学の復活と発展は緊急の課題である。だがマルクス経済学の復活も、それをつらぬく弁証法を、疎外論の基礎の上において展開しなければ、資本論が疎外論の基礎なしには成立しなかったように、不可能だろう。

しかも、まだマルクス主義の復活は、完全にはなしとげられていない、ということとは、声を大にして語られねばならない。

みずからスターリン主義打倒を唱え、スターリンとトロツキー闘争においてトロツキーを支持しながらレーニンとトロツキーの理論的差異はなかった、あるいは大したことはなかったなどということをして、問題の深刻な追求を放棄せしめようとする者は、今日の理論戦論においては、**反革命行為を行うものである**。

そしてこういった傾向にたいする一切の妥協的傾向もまた、今日の理論戦線における**裏切り**であると率直にいわねばならない。

さて、現在まで日本でも、あるいは世界的にも、疎外論の「探究」はしばしば行なわれてきたし、行なわれている。(スターリン主義者の手によってすら。)

その個々の検討はここではしないが、それが十分な「探究」をなさない理由として、次の二つの点を指摘せねばならない。

その第一は、疎外論は、一種の人生談議として、他の個別科学、および個別科学の対象たる人間活動から切り離し、空虚な抽象の王国にこれをもちあげてあそびに使う傾向。

疎外論は哲学であり、哲学でなければならぬ。それは、疎外という把握が、個別科学ではできない人間活動一般の把握であるからである。しかし、ということは、すべての自然科学、人間活動が、ここに抽象され包括されているのであり、逆にいえば、すべての人間活動に、疎外という概念は適用される。

また、疎外とは、すべての人間活動に適用されるのだから、無自覚な大衆の活動をも包括し、規定する社会的な規定である。

疎外論を人生談議にスリかえ、まるで日々の生活のウツプンを疎外のようにいい、それを張らす活動のように政治活動を考え、それを疎外の回復などという馬鹿者がいまだにいるが、これは疎外論とはまったく無縁である。

その第二は、これも疎外論を自分勝手な抽象の王国に追いやるやり口だが、疎外論を、マルクスの全展開においてとらえる努力をせず、疎外についての個々の言葉を切りはぎして満足する傾向。

疎外論は、極度に抽象的な規定であるが故に、それ自身のうちにとどまっただけは無意味な、規定にとどまり、他のものへの移行において、自己を豊かにしようとする。

疎外概念は個別科学への復帰において、とくに社会科学への適用において、自己を生かす。

だから、たとえば経哲手稿の「疎外論」を、それだけとり出して、完成したものとして、共産主義論の万能薬とするほどばかげた話はない。

マルクスの疎外論を、その発展において、全体として、とらえる努力をすることが必要である。経哲手稿における疎外論だけでなく神聖家族におけるそれ、さらに、とくに、フォイエルバッハ・テーゼ第一における疎外論について、それらの発展、連関を、主体的にとらえ、そしてそれから、その諸学への、そして資本論への移行を考へるべきである。

ふたたび花田・吉本論争について

丸井 喬

花田・吉本論争(論争というよりはむしろ衝突とよんだ方がふさわしい)については、すでに第一号の時評で触れられていた。しかしこの問題がそれから数ヶ月経過した現在にいたっても、いぜんとしてわれわれの前に大きな問題が投げかけていることに変わりはない。しかしその間に、いくつかの問題点は明かになっただろうか。そしてこの衝突を今日状況の中で正しく位置づけることによって、そのもつ意味をみずからのものとして考えてゆこうとする芸術家がどれだけいたのだろうか。ヤジ馬的な、ことなかれ主義的な雰囲気の中に、平穩な気分の中で一寸した見せ物ぐらいいにしか受けとられず見過されそうとしつつあるか

に最高に緊張した視線を注ぎ、あまりにも性急に価値判断を下そうとしたがゆえに、かえって事件の全貌をとらえそこなった部分もまたいることも事実だ。そして今までの衝突について書かれた文章の多くはこのようなものである。第一号の時評にせよまた『探究第六号』の中井安、尾形文高の各論文にせよ、この論争の正しい位置づけにあたって現実の芸術の状況への考察を忘却することによって、完全に失敗している。それはこれらの文章が、花田の主導する『記録芸術の会』の運動の理論を単にたまたま否定し去るにすぎず、これを内在的に批判していないところから明かである。

展させられた時明かになるだろう。しかしわれわれは論争への発展や、あるいはこれらによって結着がつけられていたりするのを待ってはられない。マヤコフスキーに言わせればこうである——「物体あるいは事件が大きければ大きいほど、遠ざからなければならぬ距離も大きくなる。能力のないものは全貌を反映するために、ひとところにどまって、事件が経過するのを待つことになるが、能力のあるものは、理解しうる時間をひきずり出すくらい前方へ抜駆けするのである。」

この論争が実り豊かな成果をもたらさないうちという考えは、その解決を事件のなりゆきに任せようとする日和見主義と紙一重である。実り豊かな成果はわれわれがひき出せばいいのだ。そしてその場合、われわれはあくまでわれわれ自身の当面している芸術の課題を見つめることを怠ってはならないであろう。二人の間に端を発した衝突は、もともとそれ以外の場所でも検討され、激しい論争が展開されなければならない。

ここ数年来、スターリン批判以後顕著に

それでは当の吉本自身は花田の理論を十分に批判しているか——この間には、この衝突が両者によってさらに論争にまで発

なったマルクス主義陣営における理論的な転換、すなわち客観主義への訣別の一つのあらわれとして、芸術理論の分野においていくつかの問題提起がなされたのは当然のことであった。もともと典型的なものは、『マルクス主義は死んだか』(現代詩一九五八、四)などをはじめとする、三浦つとむの一連の評論である。そして彼の主張の多くはしばしば吉本と一致するが、吉本は決して意識的に客観主義批判をふまえてはいない。三浦の提起した問題のおおのいは、ともかく芸術理論を正しく確立しようとするにあたって、たとえネガティブな形態においてであろうと、つまりそれが新しい理論を直接には指し示すことはなくとも、既成の公認理論の破産を暴露しこれを現実にしたきつつけることによって新しい視点を設定するという形態においてであろうと、曲りなりにも通過してゆかねばならないものであった。『マルクス主義は死んだか』を三浦は次のようにしめくくっている——『マルクス主義芸術理論はまだ幼い。これを育てるための健康な論争を私は期待している。花田清輝対吉本隆明、蔵原惟人大井広介などの論争が実現すること

を私は希望している。その中でマルクス主義芸術理論がどこに生きているかも実証されるにちがいない。』

さいわい、彼の希望した前者の論争が実現した現在、われわれはこれらの問題を検討する絶好のチャンスに立ちいたっているわけだ。

われわれはここでは客観主義批判とドキメンタリズムの問題について注意を促したいと思う。というのは、この問題が現在の花田・吉本論争を説明する。すなわち乗り越えるための根本的な鍵の一つであり、今まではあらゆる場でもその頭や尻尾をチラチラさせてきたにもかかわらず、肝腎のドキメンタリズムを標榜する記録芸術の会の連中に、この問題と真正面からとりくんだものがほとんどなく、相変らず自己のテーマの細分化のみ没頭しており、そのため三浦や吉本の再三にわたる問題提起や攻撃がさっぱり核心をつかまない空廻りに終りかねないという現状の中で、これを説明しうるのはわれわれにおいては他にないからであり、また中井、尾形の諸氏が、ドキメンタリズムを客観主義の名の下にすでに批判しつくされたなどと考えているのでは

ないかと、心配するからでもある。この場合吉本でなく三浦をひきあいに出したのは後者の方がより集約的にこの問題を追求していると考えたからであって、前者でもまったくかまわぬ。

芸術を史的唯物論においてどのように位置づけるか。ここで三浦は表現である芸術を認識である科学などと同列におくことの誤りを指摘する。そして芸術の表現としての特殊性の追求は、とつぜん芸術そのものの創造過程の考察になる。そこで三浦は、作家の内部世界に媒介されない外部の現実がそのまま作品の内容を形成するといった内容の形式に対する優位論からひき出されてくる。ペリンスキーをはじめとする蔵原などの理論を、作家主体の問題を抜きにした客観主義であるとして批判する。

蔵原は、作家の日常の努力によって自己の内部世界を高めそこに芸術の基盤を定めるのではなく、内部を作り出す実体を内部世界から現実の世界へおいやり、「我々の主観——プロレタリアートの階級的主観——に相応するものを現実の中に発見すること」を要求していた。

ここでその政治イデオロギーが内部世界

を現実とぶつけて論理化してゆく過程において捉えられたのではなく、論理化されていない内部世界がそのまま政治イデオロギ―によって包装されているにすぎないような前時代の詩人たちの戦争責任、転向の問題を追求し、その視点から過去におけるプロレタリア文学運動理論の批判を展開し続けてきた吉本と、三浦は一致する。そして吉本が花田の大衆芸術論をモダニズムとして否定するように、三浦も「蔵原理論が客観主義の戦前派であるのに対し、ドキメンタリー理論は客観主義の戦後派である」としてドキメンタリズムを否定する。

ここにわれわれは芸術の存在論ないし原理論と、芸術創造の方法論との素朴な同一視をみないわけにはゆかない。すなわち三浦が芸術理論における客観主義として批判したところの素朴反映論なるものは、花田らの記録芸術運動が、シニール・ドキメンタリズム(花田)、新記録主義(安部)などの旗印の下に、まさに克服しようとしているグリヤソン流の、あるいは今村太平洋の既成のドキメンタリズムではなかったか。三浦は古いドキメンタリズムも新し

いドキメンタリズムも一諸くたにして、ドキメンタリズム一般を客観主義として否定したが、これはおそらく十九世紀リアリズムの創造過程を考察することによって引き出されてきたであろう、創造過程一般に通用する原理的な問題を、歴史の規定を負っている今日における方法論の問題に、そのままあてはめようとしたところに出てきたものであるが、この論理をおし進めていけば、今日の芸術が負っている歴史的な課題の方法論的な追求において、当然それを一九世紀リアリズムまでひき戻してしまふ結果になるであろうことは明白である。

そしてこの存在論と方法論を無媒介のまま直接的に結びつける素朴な同一視が、異質な要素を常に自己の中にとり込んでゆくことによっておし進められる芸術の発展を阻害してきたことも事実であり、吉本の、
「芸術は芸術、娯楽は娯楽」説も、このあたりに起源があるにちがいない。ともあれこの観点では、アヴァンギャルド芸術を批判的に撰取したりすることはおろか、その理論をいくら細分化していてもアヴァンギャルド芸術の提起した問題などに出合う

ことは一向になく、お互いにいつまでも平行線をたどり続けるに違いない。ここに新しい一つの客観主義がある。

現代マルクス主義者の古典的性格

——不破型構想の批判——

浦 川 敏

はじめに

現代マルクス主義者不破哲三氏は、講座『現代マルクス主義』第三巻において、「社会主義への民主主義的な道」を論じた。その日本革命への具体的適用として、『現代の理論』創刊号で「日本の憲法と革命」と題する一文を発表した。不破氏の構想は、氏自身が認めているように、二十回大会後に行われはじめたイタリアの革命論争を直接の契機としてなされたものである。不破氏の構想には、イタリアの革命論争が単なる契機として作用しているより以上に、剝切されてきている部分が多分に見うけられる。それゆえ、不破氏の論点を整理し、批判する場合には、その原初理論となつていいたリアの革命論争——イタリア共産党の「構造的改革」と定式化された——そのものをとりあげる必要が生じてくる。しかも、イタリア共産党の「構造的改革」論を支えている理論的前提は、イタリア

共産党創設者であるグラムシの革命理論であるといわれ、その実践的前提は、一九三六年のスペイン人民戦線政府の成立であるといわれている。イタリアの「構造的改革」論を検討する場合には、その二大支柱となつていられるといわれるグラムシの革命理論とスペインの人民戦線政府との問題にまでさかのぼって論点を明らかにすることが、必然的に要請されてくるわけである。ここでわざわざ「といわれる」なる語を使用したのは、この二つの前提が、正しく理解されて現在の「構造的改革」論に直結しているというよりも、かなり程度の都合よく歪曲されて前提にされているという意味を含んでいるためである。二十回大会後の国際マルクス主義理論戦線で主流を占めているイタリア共産党の理論は、右にみたごとく、グラムシの革命理論とスペインの人民戦線政府との二前提を検討したのちに、はじめ、問題点が明確にされることになるだろう。ここでは、資料の不足、力量の限界、紙数の関係等でこの問題の根底的検討は到底なしえないので、次の機会にゆずることにして、さしあたって不

破氏の現代マルクス主義を説明することにどうやらざるをえない。マルクス主義の創造的發展の美名のもとに、いくたびか古典的改良主義の理論が登場し、いくたびか消えうせていったことだろうか。イタリヤの構造的改革論の直系、不破式現代マルクス主義が、真にマルクス主義の創造的發展であることを期待しつつ、氏の所説を分析することにとりかかろう。

一、不破構想の基調

「現在、社会主義革命の路線が民主主義的な道とよばれるのは、それがつぎの二つの側面をもっているためである。すなわち、一つには、労働者階級が、主敵である独占ブルジョアジーを打倒するのは、直接社会主義的綱領をかかげることなく、民主主義的綱領（反独占の深刻な社会的改革と結びついた）のもとに広範な反独占連合を結集しつつ、社会主義に前進しようとしていくことであり、いま一つは、変革の手段として議会を利用し、議会の民主共和国の形態で資本主義から社会主義への移行を実現しようとしていることである」（『現代マルクス主義Ⅲ』一七五頁、傍点原文）。不破氏は、まず社会主義への民主主義的な道をこう設定する。そして、日本における民主主義的綱領の原型を、『日本国憲法』の民主主義的性格のうちに見出す。『現代の理論』創刊号で、不破氏はこの点を主張する。それでは、氏は『日本国憲法』（以下単に憲法とよぶ）のどこに民主主義的性格を見出したのだろうか？氏は冒頭で、憲法の制定経過の中から民主主義的性格のよってきたゆえんを説明する。すなわち「この憲法のうみの親は、第一に、第二次大戦を闘って独伊フ

てゐる。

不破氏は、以上のような政治制度の民主主義的な骨組みをもった憲法を出発点において、国家権力掌握への政治過程の分析へと進むべく。

「日本の労働者階級が当面している……民族的、民主的任務をかちとるために、広範な統一戦線を土台として革新政府がうちたてられることである。樹立された統一戦線政府は、民族的、民主主義的任務を成功的に実現する過程で、急速に第二の社会主義的変革の段階に移行するために、みずから革命権力に転化させねばならない。……統一戦線を基盤にした革新政府は、ブルジョアジーの生死をかけた兇暴な抵抗にうちくだされなければならない。労働者階級を中心に、民主主義勢力全体を工場や地域での下からの統一戦線組織に結集しこの革命的力量に依拠しつつ、政策の面でも、国家権力獲得の面でも大胆に前進しなければならぬ」

不破氏の構想の基調をなすものは、大体このようなことであり、あとは、革新政府のとるべき法的措置についての提案がなされているわけである。

二、移行形態論争の歪み

「共産主義は、われわれにとっては、作りだされるべき一つの状態、現実が基準とならなければならない一つの理想ではない。われわれが共産主義とよぶのは、今の状態を廃棄するところの現実的な運動である。この運動の諸条件は、今現存する前提から生れてくる」（『ドイツ・イデオロギー』）。マルクスには新しい社会を創作した

ァンズムと日本軍国主義を打倒し、戦後の「時期の情勢を支配した世界人民の巨大な革命的民主主義的運動である」と。この場合に注意しなければならないことは、法律一般についてもいえることだが「日本憲法の民主主義的性格」を、その成立状況から抽出せんとする試みは、それほど決定的に意味のあることにならない、という点である。一たび制定された法律が、その制定者の手から離れて、その時々々の社会状況の中で定立させられると、法の制定者の意図いかんにかかわりなく、法の執行者の恣意にゆだねられることになるからである。権力を握っている者が、自己の支配を維持するためにその法の解釈を最大限自己に都合よくゆがめるのであり、制定当時の諸条件はならぬ規定的要因とはなっていないのである。吉田から岸へと至る、時の権力保持者の憲法解釈は、まさにこのことをはっきりと示している。

戦後の政治変革の中で生みだされた憲法が「労働者階級が社会主義への移行に利用しうるブルジョア民主主義的政治形式として、われわれにどのような政治制度を興えているか」を、氏は続いて追求する。1、中央権力の構成……中央の国家権力は、一見すると、立法権をもつ国会、行政権をもつ内閣と官僚機構、司法権をもつ裁判所という三権分立の形態をとっているが、その政治的な構造を分析してみると、日本の国家形態の最大の特徴は、国会と国会のみに基礎をもつ政府が国家機構全体を支配する決定的地位をしめしている点にある。2、地方権力の構成……典型的な民主的地方分権制度の導入と直接民主主義の諸制度の広範な導入。3、市民的な自由と権利の確立……これらの政治制度に魂をいれ、その民主的利用を可能にする決定的条件としての、国民の民主的権利と自由が確立されて

り、幻想したりするという意味での空想主義は一滴も存在しなかった。マルクスには、共産主義の原理がア・プリオリに存在したのではなく、現実の自己のよってたつ基盤を分析し、そしてそれを否定しなければならなくなった時にはじめて、それによって代る現実的なものが共産主義としてあらわれてきた。それゆえ、マルクスは、旧い社会から新しい社会への転換をつねに自然的過程として研究してきたのである。

二十回大会は、社会主義への移行の多様な形態の可能性を確認した。この移行形態は、『民族的な道』、『平和的移行』、『民主主義的な道』などの可能性として提起され、論争が始められた。そのうちに、論争が集中する点は、旧い社会をどういふふうにして新しい社会に変えるかということにしばられてしまい、旧い社会の何を、どういふところを変えて新しい社会でどういふものにするのか、という点は、ほとんど省りみられなくなってしまった。すなわちプロレタリア革命を主張し実践する場合に、革命の内容はもうきまっていた前のごとくとしておいて、もっぱら革命の形態（平和的か暴力的か、とか、国家は破壊するのを利用するのかなど）だけを問題にするようになってしまった。しかし、革命の内容・本質はけっしてわかりきった自明のことなのではなくて、まさに本質的理解の欠如にこそ、移行形態論争がゆがめられ、革命への前進が停滞している最大の根拠があるのでないだろうか。さらに、移行形態を重要視するあまり、形態に革命の内容が従属させられるという転倒が起ってきた。たとえば、現段階の民主主義が、労働者階級の解放闘争において占めるべき位置という観点からではなく、社会主義への平和的、議会的移行と関連づけ、それを理論的に裏づけんとする価

値意識から民主主義が検討される、といったような傾向である。「道の可能性をまず最初に定立することは、移行形態を革命の内容から独立させて、一人歩きを始めさせる原因になる。不破氏が設定した社会主義への民主主義的な道は二つの側面をもつことには、氏自身の言葉で紹介しておいた。しかし、氏の構想をみるならば、民主主義それ自体の構造を若干追求する姿勢を示しながら、全体としては、あくまでも「現憲法の規定する政治制度のもとで、労働者階級とその指導する革新勢力が合法的に政府を樹立し、さらに権力を掌握する可能性がひらかれているかどうかを論証するために民主主義が問題となっているのである。すなわち、ブルジョア民主主義からプロレタリア民主主義への転化の内容は、本来なんであるかを検討し、その転化を実現するためにはどういう方法でやったらよいか、という形で問題を提起するのではなく、社会主義への移行の民主主義的形態（もしこういふ語が使えらるる）の可能性をまず定めて、それを論証するためにだけ民主主義が必要となってきたのである。方法論のまったくの転倒によって、氏の革命論は構成されている。

いわゆる「動脈硬化化したマルクス主義」に息吹きを回復させ、現代的段階のマルクス主義の創造を主張する潮流が展開している。現代マルクス主義の基幹をなすものは、不破論文に典型的に表明されているように、「民主主義の再評価であり、民主主義の進歩性」である。この民主主義の再評価が、移行形態の多様な可能性から演繹されてきたものであり、その発想法においてすでに歪められたものであることは、今指摘したばかりである。だが、「現代マルクス主義者」が評価しなおして民主主義の内容の新しいところは、一体どう

いうことであろうか。

彼ら現代マルクス主義者が考察する民主主義は、つねにファシズムに對置された民主主義、あるいは封建的諸制度に對置された民主主義的諸制度であり、この比較からでてくる民主主義の進歩性が問題になっているわけである。この相対的進歩性を、いつのまにか絶対的進歩性へとすりかえつつ、彼らの民主主義論は展開されていく。かつてレーニンが、カウツキーに向ってこういった。「カウツキーは、歴史の教科書をくりかえすうちにひからびてしまった中学教師のように、二十世紀にはかたくなに背をむけ、十八世紀に顔をむけて、絶対主義と中世的制度とにたいするブルジョア民主主義の關係について、古ぼけたことをまたしても、信じられないほど退屈に、多くの節のなかでくりかえしているのである！」(レーニン『プロレタリア革命と背教者カウツキー』全集二十八卷、二四四頁)。現代マルクス主義の新しいところは、表現形式においてのみ妥当する。現代マルクス主義が、近代民主主義の進歩性を主張する内容において意味することは、彼らがあれほど忌み嫌ったあの「近代主義」に何周期か遅れてたどりついた、ということにほかならない。しかも「民主主義の成立当初の進歩性」を主張する内容においては、日本共産党の指導部が獄中十八年の後に、理論認識としては二七テーゼ・三二テーゼの段階にとどまり、そこから一歩も前進しえないままに、現実感覚としてはアメリカ民主主義のすばらしさに驚嘆し、認識は旧来のままで、ただ感覚においてのみ社会状況を判断していた当時のそれとなら変わらないのである。近代主義と獄中十八年の感覚との混合という内容をもった現代マルクス主義の新しいところは、スターリン主義世界観の根底的批判から脱皮した認識論をもたないがゆえに

いぜんとして感覚の新しいに終始せざるをえない。

三、プロレタリア独裁の否定と新しい型の民主主義

い型の民主主義

マルクスは、一八四四年に『ユダヤ人問題によせて』なる論文を著し、そこで、当時もっとも進歩的といわれたフランスの二七九三年の憲法に言及してこれを批判している。市民社会の人間に、民主的権利を附与するようにみえる憲法でも、その根底をなしているものは、あくまでもブルジョアの所有の自由に立脚した階級分裂の現代的表現であることを、法哲学的角度から鋭く分析したのがその内容である。マルクスがこの論文で指摘している内容は、憲法の民主主義的性格を分析する際に、決定的に重要な意味をもってくるのだが、ここでは詳述する余地がない。不破氏が、憲法の中の市民的自由と権利の確立を、封建的諸規則あるいはファシズムのそれと対比して、大いなる進歩性を見出している時に、形容詞をつける必要のないマルクス主義は、すでに一八四四年に、二十世紀のプロレタリア民主主義とブルジョア民主主義とを對置することによって、市民的自由と権利の限界ならびに止揚の方向を明確に指し示していたのである。(マル・エン選集補巻四一五二一―五頁参照)。

マルクス主義を、真に創造的に発展させたレーニンは、民主主義を無視しなかったばかりか、民主主義なしには社会主義が不可能であることを一貫して主張し続けた。「およそ『民主主義』とは、資本主義のもとではきわめてまれに、きわめて条件的にしか表現されない『権利』を宣言することであり、それを実現することである。

しかし、このように宣言しなければ、いまずこの権利のためにたたかわなければ、このような闘争を趣旨として大衆を教育しなければ、社会主義は不可能である。……社会主義は、つぎの二つの意味で、民主主義がなければ不可能である。(1)プロレタリアートは、民主主義のための闘争によって社会主義革命の準備をしなければならない。この革命を遂行することができない。(2)勝利をしめた社会主義は、民主主義を完全に実現しなければ、自分の勝利を維持し、人類を國家の死滅へ導くことができない」(レーニン『マルクス主義の戯画と帝國主義的經濟主義』とについて)全集二十三卷七六―七頁(傍点原文)

一九二〇年代後半から三〇年代前半にかけて、ブルジョア独裁がもはや民主共和制的形態では権力を維持することが不可能になってファシズム運動が急速に成長していった。この時点で、当時のマルクス主義者は、ブルジョア独裁の支配形態として民主的形態とファシズムとの間にある差異を理解できずに、闘争目標を一般にブルジョア独裁打倒へと向けた。ヒトラーが、ドイツで権力を掌握するや、ファシズム形態の狂暴性に驚いて、ブルジョア独裁の一支配形態としてのファシズムということを忘れてしまった。そこで、マルクス主義者は、ファシズムに反対し、それにとって代るものとして民主主義をもってきた。それまでブルジョア民主主義廃棄のために闘ってきたこの闘争目標が、今度は逆に、ブルジョアという形容詞が慎重に削除されて、労働者階級の防衛する最高のもの、獲得すべき最大のものとと交換されることになった。ファシズムとかブルジョア民主主義とかいう形態が出現してくるブルジョア権力の本質を變革することが革命の課題にされるのではなく、本質的內

容はそのままにしておいて、現象形態をどうするかが唯一の中心課題になってしまった。民主主義は、その階級性を失った無内容なものとなり、革命で変革すべき内容は忘れさられ、支配形態と移行形態とだけが、とりのこされることになった。こうして人民戦線政府という革新政府に代表される、ブルジョア民主主義でもプロレタリア民主主義でもない、新しい型の民主主義が生れてくる。この新しい型の民主主義の権力を握っているものは、だれなのか？ブルジョアジーなのか、それともプロレタリアートなのか？いや、ブルジョアジーでも、プロレタリアートでもない、新しい型の階級なのか？現代マルクス主義者は、素朴な疑問を抱く人民大衆に、わかりやすく答をだす義務がある。不破氏の統一戦線政府は、「その階級の性格においては、戦後革命期に日程にのぼった反帝、反独占の民主主義的権力、労働独裁でもプロレタリア独裁でもない新しい型の民主主義政府と同一の性格の政府」(『現代マルクス主義Ⅲ』一八三頁)である。不破氏の理論の出発点である「イタリア共産党の綱領的宣言要綱」はこう表現している。

「すでに、二つの戦争のあいだの時期に、政治闘争の発展によって明らかになったことは、一九一七年にロシアのプロレタリアートが直面したものはちがった、新しい情勢が生じうること、したがってまた、階級勢力の配置や、民主主義および平和のためにおこなわれるべき闘争の諸目標と関連して、権力の問題が違ったやり方で提起され解決されうることであった。したがって、はじめには、十月革命のちに採用された形態での、プロレタリアートの独裁ではない『労働者政府』について論ぜられ、ついで統一戦線政府および人民戦線政府について論ぜられた。共産主義者は単独では

なく、他の諸政党と協力して政権につくこともできるということが文句なしにみとめられ、ブルジョアジーの進歩的諸政党との協力も排除されなかった。こうした新しい戦略・戦術の基礎になったのはファシズムの前進を助けファシズムを打倒する必要があったことである。しかし、これが出発点となって、プロレタリアートの独裁でもなければ、ソヴェト制度でもなく、権力のことになった形態である新しい型の民主主義という考え方が作りあげられるにいたった。この仮説は、スペインでファシストの攻撃から共和国を擁護した時期にもっともはっきり実現された」(『社会主義への前進』一三六―一七頁)

ここには、革命の内容と移行形態とをごちゃ混ぜに混同して、階級と権力の概念を捨象した、最新のマルクス主義の創造が、端的にあらわされている。ことさらに面倒に、「権力のことになった形態である新しい型の民主主義という考え方」をつくりあげて、プロレタリア独裁を否定する必要はない。問題はまことに簡単明瞭なのだ。「ブルジョア国家の形態は多種多様であるが、その本質は一つである。これらの国家はみな、形態はどうあろうとも、結局のところ、かならずブルジョアジーの独裁なのである。資本主義から共産主義への移行は、もちろん、きわめて多数の多種多様な政治形態をもたらさざるをえないが、しかしそのさい、本質は不可避的にただ一つ、プロレタリアートの独裁であろう」(レーニン『国家と革命』全集二十五卷四四五頁。傍点原文)。

現代マルクス主義者は、階級闘争を忘れさせてしまったので、民主主義の階級性など思いもよらない。「もし常識と歴史をばかにするのでなければ、いろいろの階級が存在するかぎり、『純粹民主

主義』をうんぬんすることはできず、うんぬんすることができるのは階級的民主主義だけであるということ、明らかである。『純粹民主主義』とは、労働者を愚弄する自由主義者のごまかし文句である。歴史上知られているのは、封建制度とてかわるブルジョア民主主義と、ブルジョア民主主義とてかわるプロレタリア民主主義である」(レーニン『プロレタリア革命と背教者カウツキー』全集二十八卷二五六頁。傍点原文)。ブルジョアジーの独裁とプロレタリアートの独裁とのあいだに、なんらかの中間権力の存在を設定したり、また、ブルジョア民主主義とプロレタリア民主主義とのあいだに、なんらかの中間的な新しい型の民主主義を設定したりすることは、ブルジョアジーとプロレタリアートの二大階級のあいだになんらかの中間的階級を作りだすことを要請する。現実の資本主義社会において、この中間的階級の役割を、進歩的自由主義的ブルジョアジーとプチ・ブル中間層とに果させようとした努力のあらわれが、人民戦線政府の樹立であった。現代マルクス主義者は、結果が原因になり、原因が結果になる論理の無限の循環をめぐらせつつ、世界史の新しい情勢の名のもとに、つぎつぎとマルクス主義理論を創造していく。しかし表現の新しさも、古典的改良主義の中味をおおいかくすことは、絶対にできないのである。「カウツキーには、すべての労働者に理解できる明白な真理がわからない。なぜなら、彼はどの階級のための民主主義か、という問題をだすことを忘れたからである。彼は『純粹』(すなわち無階級的)あるいは超階級的か？(民主主義の見地から論じている) (レーニン『背教者カウツキー』前掲二六四頁。ゴジックは原文)。現代マルクス主義者は、ブルジョア民主主義が封建的制度やファシズムにくらべれば進歩的な

ものであり、プロレタリアートはブルジョアジーに対する闘争にあたって、ブルジョア民主主義をかならず利用しなければならぬという、わかりきった自明の真理を「証明」するために、際限ないおしやべりを重ねる。そうして、プロレタリア民主主義へ転化することを妨げるために中間形態として、新しい型の民主主義をついたてにしてしまう。独占ブルジョアジーの一かたまりを除いて、あらゆるブルジョアジーとプロレタリアートを同化させて、皆が自由で平等な権利をもった民主主義を作りあげようとする。マルクス主義の創造でも改良でもなく、マルクス主義以前の空想的社会主義へもう一度逆戻りしようとするのである。「もとマルクス主義者」カウツキーを主要な代表者とする今日の日和見主義は、階級闘争の承認をブルジョアの諸関係の範囲にかぎろうとする。日和見主義は階級闘争の承認を、まさに、最重要な点までは、すなわち資本主義から共産主義への過渡期、ブルジョアジーを打倒し、彼らを完全に絶滅する時期までは、おしひろげない。現実には、その時期は、不可避的に、未曾有にはげしい階級闘争の時期であり、未曾有に鋭い形をとった階級闘争の時期である。したがってこの時期の国家もまた、不可避的に新しい型の民主主義的な(プロレタリアと無産者一般にとつては)、また新しい型の独裁的な(ブルジョアジーにたいしては)国家でなければならぬ」(レーニン『国家と革命』前掲四四五頁。傍点原文)。新しい型を論ずることは、まさにこのよ

四、プロレタリア権力組織創造の拒否

「日本の国家形態の最大の特徴は、国会と国会のみに基礎をもつ政府が国家機構全体を支配する決定的地位を占めている点にあり……革新勢力が国会をその手にぎった場合は（国会で多数を獲得したら——引用者）、憲法の規定が政治的変革のための有力な武器としてはたつき……(1)天皇制の廃止、(2)二院制の廃止、(3)司法機構の独立性の変革、の解決を将来にのこさずまでも、革新政府は国家権力を掌握することができる」と、不破氏は見取り図をたてる。不破氏は「現在の条件のもとでは、議会制の民主共和国こそ、樹立さるべき社会主義国家の一般的形態になっている」（『現代マルクス主義Ⅲ』一九八頁。傍点引用者）ことを前提にしているわけだが、この前提そのものに重大な問題がふくまれているといわねばならない。

あらゆる深刻な革命のさいには、多年被搾取者にたいして大きな事実上の優越をたもつ搾取者は、長期の、頑強な、死にもぐるいの抵抗を示すのが原則である。おめでたいばかりかカウツキーの甘い空想のなかでもなければ、搾取者は最後の必死の闘争で、あがいている一連の闘争で、自分の優越性をためしつゝ、多数を占める被搾取者の決定に服することは、けつしてないのである」（レーニン「背教者カウツキー」前掲二六九頁。傍点原文）。「議会制の民主共和国こそ、樹立さるべき社会主義国家の一般的形態」となっているのは、不破氏の頭の中でだけそうなっているにすぎないことを

最初に確認しておかねばならない。ブルジョア民主共和国の議会で多数を占めた革新勢力が、一連の合法的手続きを経て、社会主義的議会へと直線的に入りこむことにしか、不破氏は注目していない。法的変革——名目の相違、これだけで氏は社会主義になったと錯覚する。議会の構成と役割はどうなるか合法制と民主制に目を奪われるあまり、社会主義国家の議会までが、無階級的純粹民主主義を維持し、かつそれに維持されることになっている。「独裁は、他の諸階級にたいしてこの独裁を実現している階級にとっては、かならずしも民主主義の廃棄を意味するものではない。しかし、それは、自分にたいしてか、あるいは自分の利益に反して、独裁が実現されている階級にとっては、かならず民主主義の廃棄（あるいは廃棄の一形態である、きわめて重大な制限）を意味する」（『背教者カウツキー』前掲二四八頁）。革新政府は「上と下からの力を通じて、一步一步各級政府機関を勤労者の政治権力のとりでにかえてゆき、さらにすすんで国家機構の構造そのものを民主主義的につくりかえ、人民の権力にふさわしい形態をうみだしてゆくことが必要である」と、氏は考

える。まさにこのことは「必要」であろう。必要であるということと、現実にならぬということとはまったくちがったことである。「必要」なことを、「実現」するための保障は何か、をこそ考えねばならぬのである。「一步一步」と政治権力をプロレタリアートのものにしていく過程で、ブルジョアジーの死に物狂いの抵抗を打倒する保障を考慮せずに、「必要である」とか「こうなるであろう」とかを、論理整然と書いたところで、机上プランにすぎない。

レーニンが「プロレタリア革命への移行ないし接近の形態を探しだすことにすべての注意力を集中するように訴えたのは、革命を成体が政治権力を確保する政治制度の問題を、またはや合法性と民主性にとらわれず、既存のもので間にあわせようとした。氏の民主主義的な道は、実践面におけるはなはだしい客観主義へとおちこんでいく。「民主主義や独裁の一般的（その民族に特殊なものではない）階級的基礎についての論議が言及しなければならぬのは、選挙権のような特殊問題ではなく、搾取者を打ちたおして、その国家を被搾取者の国家に代える歴史的時代に、民主主義を金持にたいしても、搾取者にたいしても、維持することができるか、という一般的な問題である。……独裁の欠くことのできない標識、独裁の必須の条件は、階級としての搾取者を暴力的に抑圧することであり、したがって、この階級にたいして、『純粹民主主義』を、すなわち平等と自由を破壊することである。……プロレタリアートは、ブルジョアジーの抵抗を打ちくだかすには、自分の敵を暴力的に抑圧せずには、勝つことができないということ、そして『暴力的抑圧』のあるところ、自由のないところ、そこには、もちろん民主主義はないということ、このことをカウツキーは理解しなかつた」（『背教者カウツキー』前掲二七〇—二頁傍点原文）。プロレタリア独裁を否定し、新しい型の民主主義を主張する現代マルクス主義者には、レーニンの革命理論——プロレタリアートの革命理論を無視し、放棄することができない。だが、プロレタリアートの革命理論とは訣別できても、現実の階級闘争の実状からは逃れることができない。

「民主主義が高度に発達していれば、いかに、ますます取引所や銀行家がブルジョア議会を自分に従属させていること」（『背教者カウツキー』前掲二六〇頁傍点原文）を現代マルクス主義者は見ようともしない。普通選挙権が、ときには民主的な議会を、ときには反

功させる保障を、労働者がどのような組織の基盤におくかが、決定的なものになると考えていたからこそである。ブルジョア社会構成の維持にもっとも都合よく整備されている民主共和国の議会体系で、単に革命政府による上からの民主的改革の道で、ブルジョアジーの抵抗を防げるか、不破氏は問題にとりあげようとしなない。なぜならば、氏はこの解答をきっぱりと与える自信がないからである。ただ「労働者階級を中心に、民主主義勢力全体を工場や地域での下からの統一戦線組織に結集し、この革命的力量に依拠しつ」というにとどまるだけである。だが、この統一戦線「組織」の形態と機能こそが、革命の全運命を決するほどの重要性を帯びてくるのである。ということこそ不破氏は理解しないのである。ロシア革命の場合には、ソヴェトがブルジョア議会にとり代って直接政治権力を掌握してしまつた。たとえ革命がソヴェト型でないにしても革新政府の議会権力は、政治権力の公的代表者にすぎず、その議会もはやブルジョア社会構成を代表するものではなく、労働者の工場や地域での革新組織そのものがプロレタリア民主主義の実体をなすものであり、この組織に基盤をもつ統合体としての役割を果すことができる時にのみ議会制が、ブルジョアの議会から移行しえるのである。不破氏は、論理的整合のみをスマートに展開しようとするので、現実における革命主体の具体的任務と活動、革命を保障する政治制度の創造については放棄する。政治制度は、ブルジョアジーの作つてくれたがあるからそれを利用すればよいというだけにとどまる。いや、利用すればよいというだけでなく、その道こそが現在の条件のもとでは一般的であるという。今みたように、ブルジョア政治制度の民主制と、革命の成功の保障とは無関係である。氏は、革命主

動的・反革命的な議会を、ときには小ブル的議会を、その時々々の社会情勢においてもたらずことになる。だからこそ、「選挙の形式および民主主義の形態とこの制度の階級的内容とが全くの別物であること」(レーニン、前掲二八六頁)を理解しなければならぬのである。不破氏は、選挙の形式や民主主義の形態が法的に確立されているからということで、制度の構成を階級的に分析する問題を提起さえしない。ブルジョア議会制度を利用し、発展させることはあらゆる場合に最大限の努力をしなければならぬことは、自明の真理である。しかし、ブルジョア議会制度の歴史的な限界と制約性を美化し、理想化することはおろかしいことである。革命の大衆運動の高揚を組織する形態が、歴史的限界と制約性をもったブルジョア民主共和的議会で行うかどうか、を考察せねばならぬだろう。

「ブルジョア革命と社会主義革命との基本的な区別の一つは、封建制から成長してくるブルジョア革命にとっては、封建社会のすべての側面を徐々に変化させる新しい経済組織が旧体制の胎内で徐々に作りだされてくるというところにある。ブルジョア革命が当面した、ただ一つの任務は、以前の社会のすべてのきずなを一掃し、すて去り、破壊することであった。あらゆるブルジョア革命は、この任務を遂行することによって、この革命に求められるいさゝいのことを遂行する。社会主義革命はこれとは全く異なった状態にある。ここでは、破壊という任務のうえに、新しい、前代未聞の困難な任務——組織的任務がつけ加わる。一九〇五年の偉大な経験をなめてきたロシア革命の人民的な創造力が、一九一七年二月に、まだソヴェトを作りださなかったならば、ソヴェトは、十月にはけつして権力をにぎることはできなかったであろう。なぜなら、成功はた

だ、数百万人をふくんだ運動の組織形態が、すでにできあいのものとして存在していたか否かにかかっていたからである。このできあいの形態こそソヴェトであった。だから、政治的分野でわれわれを待っていたのは、輝かしい成功であり、われわれの経験したひとつづきの凱行進であった。というのは、政治権力の新しい形態ができたがったからであり、そしてわれわれに残されていたことは、いくつかの布告によって、ソヴェト権力を、革命の始めの数ヶ月間のような萌芽状態から、ロシア国家において合法的に承認された形態に——ロシア、ソヴェト共和国に転化することだけであつたからである」(レーニン『ロシア共産党第七回大会』全集二十七巻八三四—頁。傍点引用者)。ロシア革命には、革命政府が権力を保持するための支えとなる組織形態が、ソヴェトとして存在していた。

また、第一次世界戦争の終了後のイタリアにおける革命的闘争の激化の渦中であつて、グラムシは、ロシア革命においてソヴェトのしめた役割を、イタリアでは一体なにが果すのかを追究した。「労働者階級の機関として、なにかソヴェトと比較されるようなもの、いくぶんでもその性質が類似しているようなものが、はたしてイタリアにあるだろうか労働者大衆が、自分を解放しようとするみずからの意志を実現する組織となるものであり、労働者大衆の自治形態である、こうした労働者機関はイタリアに存在するだろうか？ソヴェト政府の萌芽、そのうずもれた種子、そのおぼろげな気配でさえも、イタリアに果して存在しているだろうか？」こうグラムシは設問した。そして解答を「そうだ、イタリアに労働者政府の萌芽、ソヴェトの萌芽が存在している。それは工場内部委員会である」と与えた。工場内部委員会とは、労働者への懐柔政策として資本家が考

えだしたものであるが、その機能としては、労働者だけからなる委員会を選出して、資本家と労働諸条件について交渉する権限をもったものであった。この内部委員会は、民主主義的性格を、労働者の日常問題への絶えざる接触とのために急速に発展して、労働者大衆を代表する独立の機関になっていった。戦後の危機的状況の中で、プロレタリアートの権力獲得が目前に提起されているときに、内部委員会からイタリア型ソヴェトとして、工場評議会が創設され始めたのである。この工場評議会は、労働者階級を中心に人民大衆の広範な層を結集して、プロレタリア権力の組織形態としての実体と機能を有した。工場評議会運動は、このようにしてブルジョア社会とブルジョアジーの権力を、その根底において、生産の場所そのものにおいておびやかして発展していった。

プロレタリア権力へ移行する組織形態の問題を、不破氏は回避して、抽象的に「統一戦線組織」に結集せよ、としか発言しえない。マルクスやレーニンが、プロレタリアートのあらゆる革命闘争に全注意力を傾注して、そこから革命理論の発展と革命実践の深化のための諸教訓を導きだしたとは別個に、不破氏は、最初に頭の中で革命のヴィジョンを描き、そのヴィジョンを正当化するための論証を試みる。現実の階級闘争の内容と形態から出発することをしないから、もつとも決定的な問題になると常に、教科書的観念論におおりに、折衷主義におちいることになる。労働者階級を中心とする工場地域での組織の形態を追求することなくしては、議会制民主共和国もブルジョアの延長にしかならないであろう。名目をとりかえただけでなく、明らかに質的転換をなしとげた民主主義的諸制度を発展させていくことが、反革命クーデターを粉砕する保障になる

のである。ブルジョアの延長の民主主義的制度を保守的に擁護しようとするならば、反革命の防波堤とはなりえないだろう。その実験は、記憶に生々しい、昨年のフランス共産党の未踏として、われわれの前に提供されている。

「新しいマルクス主義」「創造的マルクス主義」という看板をかかげた「現代」派の諸氏は、残念ながら崩れゆくスターリン主義の最後の存在として、みずからを位置づけることになるだろう。

真の革命理論の創造をめざすものは、目先の新しさや、言葉の柔らかな魅力に、問題の本質を見誤るようなことがあってはならない。いうまでもなく、グラムシと初期のイタリア共産党の活動については十分に検討に値する貴重なものをもっている。

私自身も、次号から初期のイタリア共産党とグラムシの役割とその限界について、不十分ながら検討したいと思っている。

しかし、グラムシを正確に理解する努力も払わずに、イタリア共産党の全活動によりかからうとするのでは理論的にも不毛とならざるをえないだろう。

それは、使い古された改良主義の諸命題をこそ新しくいい直すだけのことに終るのである。

民主主義的言辭による資本主義への忠勤

——国家独占資本主義段階における改良主義批判——

姫岡玲治

一、革命運動を毒す、さまざまな色合の改良主義——その物質的、認識論的根拠

共産主義者は、プロレタリアートの意識と、力と、闘争能力を発展させるために、ブルジョアジーとのあいだの闘争が経過する種々の発展段階において、特有の物質的基盤と、理論的表現をもつ、さまざまな色合の日和見主義と闘わねばならなかった。

十九世紀中葉のイギリスは、綿工業によって、他の諸国を農業国としながら、「世界の工場」としての地位を確保し、それによって資本主義の第二の発展段階（産業資本主義）を世界的に代表する発展をとげたのであったが、その「工業の独占」は、イギリスのプロレタリアートを「ブルジョア化」し、そのタイプからいって「急進的ブルジョア」と、労働者の中間物のような首領たちを労働運動

の中にうみだし、運動から「チャーティストの熱情」を奪ってしまつた。彼らは、フランス資本主義の小ブルジョアの環境がうみだしたブルードン主義（バクニン主義）とともに、第二インター内部でのマルクスの党派的活動の、もっとも鋭い批判の対象となつたのである。これらの日和見主義者との闘争をつうじて、共産主義の革命的理論と、戦術の武器は、鍛えあげられていった。

しかし、この産業資本主義時代における、イギリスによる工業の独占は、イギリス工業の資本主義的發展に寄与した他の諸国自身に資本主義的發展を許さないというようなものではなかった。このイギリスに対抗してあらわれたドイツ、アメリカなどの資本主義は、イギリスにおいて典型的な發展をみた資本主義の発生、成長の過程をも、株式会社形式によって、軽工業ばかりでなく、重工業をも發展させ、同時に、銀行をしてその發展を直接的に援助せしめるといふ新たな様式をもつて、実現しつつあつた。かくして、十九世紀、七十年代後半の不況期を画期として、産業資本主義は、金融独占資

本を基礎とした新たな世界史的発展段階、帝国主義に突入するのであるが、それは過剰な資本の有利な投下をもとめて、世界的な植民地、ないし勢力圏の拡張を目標とするいわゆる膨脹政策を、展開することになるであろう。それは特権的な大民族のあいだでの世界の分割をもたらしたが、ブルジョアジーをして、この獲物から生ずるおこぼれでもつて、労働者階級の官僚と、貴族の小さな層を、労働運動の中に作りだし、彼らを買収する大きな機会を与えた。一九〇四年のアムステルダム大会が、公然と形成されたベルシユタインの修正主義的潮流を、「大会は今日まで、われわれがとってきた試験ずみの必勝的な階級闘争に基礎をおく戦術と、われわれの敵にたいする勝利によつてもたらされる政権の獲得とを、現存する秩序にたいする譲歩政策とすりかえんとする傾向にきりかえる修正主義的傾向を、断固批判する」という決議によつて公式に拒否し、また、スツトガルド（一九〇七年）、バーゼル（一九一二年）の大会は、後にレーニンによつて「帝国主義戦争を内乱へ」というスローガンに定式化された戦争にたいする、革命的プロレタリアートの戦術の礎石を築く宣言を採択しさえしたのであつたが、当時の帝国主義諸国のあいだの世界の分割が、比較的に平和的な装いをもつて進展しつつあつたという事実が、第二インターの首領たちをして、言葉の上では革命的にふるまうことを可能にしたのであろう。しかし、他の民族的、国家的金融団から、一切の競走の可能性を奪おうとする帝国主義者の死闘は、勢力圏の再分割に帰着せざるをえなく、帝国主義世界体系の胎内に秘められた矛盾は、鉄のごとき必然性をもつて帝国主義戦争へと導かれた。ここにいたつて、言葉の上では革命的に振舞つていた日和見主義者も、「自国」政府の困難を、革命のため

に利用するがわりに、困難な状態にある自国政府への援助の道に走つた。戦争は日和見主義を、社会排外主義に変え、労働運動内のブルジョアジーの派遣者としての、その役割をゆきつくところまでおしすすめた。過ぎ去つた戦前の時代には、日和見主義は、しばしば「偏向」とみなされはしても、労働運動の正当な構成部分と考えられていたが、戦争の過程では、彼らとの統一ということは労働者階級を、「自国」のブルジョアジーに從属させ、すべての国々の革命的プロレタリアートを分裂させることをあきらかにしたのである。一九一四年、世界戦争のはじめにあつた、ボルシユヴィキ党の中央委員会は、一つの宣言を発表した。この宣言には第二インターの裏切りと、破産が宣告された。革命的、プロレタリア分子が小ブルジョア的、日和見主義的分子から分離してゆく過程はこの大戦の過程で、全体にわたつて準備され、ロシア革命の成功と、スパルタクス・ブンドのドイツ社民党からの分離によつて、世界プロレタリア革命を準備する新しい革命党の組織は、実現されたのである。このように、第二インターの日和見主義の経済的基盤は「自国」のブルジョアジーの超過利潤のおこぼれにあずかる労働者と、小ブルジョアの特権層の利益であつたが、それはまた、さまざまな理論的装いをもつて登場してきた。しかしながら、修正主義、改良主義の認識論的根拠は、つぎのような点において同一であつた。すなわち、科学的社会主義の基礎が築かれた時期としての一十九世紀中葉の資本主義諸現象、なかんずく「資本論」がその対象としたところのイギリスのそれは、その發展が純粹の資本主義社会に近似してゐるといふ歴史的傾向にあることによつて、その攪乱的要因を、捨象すれば、資本主義の運動法則の原理的、本質論的な究明の根拠と

なりえたのであった。しかし、資本主義の発展の具体的過程は、一九世紀後半以来、新しい金融資本の段階に入って、もはや純粹の資本主義社会の実現に、徹底的に進むものとはいえない傾向をもつことになったのである。このことは、資本主義の現状分析が、すでに「資本論」の直接的延長の上には、なされないことをあきらかにした。この「資本主義の特殊な段階としての帝国主義」を、原理的規定(資本論)を基準とする分析によって、段階論的規定(帝国主義論)として明確にすること、すなわち特殊な段階の現象的諸特徴を、普遍的な本質からの上向的展開においてとらえるということが、打倒すべき対象の、真の科学的な認識によってのみ、自己を解放しうる革命的階級の課題になったのである。このような原理論(普遍段階論(特殊)、現状分析(個別))と、段階的に具体化してゆくという、マルクス主義に特有な方法を明確にしえなかつたところに、さまざまな改良主義、修正主義の認識論的根拠が存在したのである。ベルンシュタインは、資本主義の産業資本主義段階から帝国主義段階の段階的变化に幻惑されて、マルクス主義の本質論をまで犠牲にしようとした。後にみるとおり、金融独占資本が、一方では巨大固定施設を擁する重工業に必要な資金を、株式会社形式によって、本来の資本家の蓄積にのみならず、あらゆる社会層の遊休資金を動員し、利用する機構を、一般的に確立したことによって、また他方では、不断の過剰人口を農業その他の中小工業に形成し、保有することによって、蓄積に必要な労働力商品を、確保する機構を確立したことによって旧社会関係の分解が徹底して行われえず、むしろ広汎な中間層を残存せしめ、その階級的利害関係を、きわめて抽象的な価格現象である株式相場の変動の内に埋没せしめるという、こ

の帝国主義段階に特有な現象に幻惑されて、彼はマルクス主義を「修正」して、この「経済的民主主義」のなかに資本主義を社会主義に「漸次的に」「民主主義的に」改造する物質的基礎をみたのである。一方カウツキーがベルンシュタインのこの主張を十分に克服しえなかつたということも、この点にかかっている。そして、それは、彼が第一次大戦の勃発とともに、「日和見主義の最も完成された」ものとしての社会排外主義の立場に移行することによって、完全に暴露された。すなわち、彼は帝国主義を「資本主義の最高の段階として」理論化するのではなく、それを金融資本によって「好んで用いられる政策」と理解しなければならぬと主張した。だから資本主義がみずからの原理とする、自由な商品交換の関係をもって再生産過程を、律することのできた産業資本段階のイデオロギー、「民主主義」の実現が、帝国主義の経済的基礎に手をふれることなしに、すなわち社会主義革命なしに、可能だということを労働者にむかつて、説教したのである。彼は段階概念を、明確にしえなかつた。「その結果は、資本主義の最新の段階の、もつとも根本的な矛盾を暴露するかわり、その矛盾を塗りつぶし、鈍くみせることになり、マルクス主義のかわりに、ブルジョア改良主義をもつてくることとなる。」(レーニン。「帝国主義論」全集二十二卷、三二二頁)

帝国主義という資本主義の特殊な段階の諸特徴を、普遍的本質からの上向的展開においてとらえ、その現実的形態として理論化するために捧げられていた。しかし、レーニンにおいても、後に帝国主義論、民族問題で検討するように、このマルクス主義に特有な、科学的方法を、必ずしも明確にしえなかつたのではないかといえる面がある。段階概念の不明確さは、ロシアの後進性もいずれば純粹の資本主義社会に帰着しうるものとみただけである。それ以上に、彼の秀れた実践的感覚は、著しい後進性に採られたロシアの現実、共産主義の前提としての近代プロレタリアートの存在をも、また、豊富な物質的諸条件の存在をもみてとることは、できなかつたのであろう。彼はプロレタリアートと、農民の同盟によって、ロシアの後進性を掃討する「労働独裁論」の仮設を提起したのである。しかし、ロシアの現実、先進国からの移入による資本主義化にともなう、複雑なる旧諸要因を、のこしながら、新たな段階で、金融資本への発展を準備することになったのである。かくてロシアの後進性の何よりの証明となった農奴制の死にそこない、民族的抑圧は、その金融資本と闘う、他ならぬ革命的プロレタリアートの手によってうち倒されるであろうことは、階級闘争の焰のなかで、あきらかにされていくであろう。帝国主義戦争は、ロシアのプロレタリアートを、例外なくその渦中にまきこむことになった。レーニンは次のように語った。「ロシアで排外主義の革命家が勝利するならば、われわれは現在の戦争で彼らの「祖国」を防衛することに反対するであろう。——たゞ、革命家であろうが、共和主義者であろうがそれが排外主義者であるならばわれわれは反対する」帝国主義戦争はその戦争に反対の立場をとるか、賛成の立場をとるかによって、

国際階級闘争における階級的立場の闡明を、すべての革命家に、要求したのである。中間的「民主主義的立場」というものはありえなかつた。したがって、小ブルジョア諸政党が、すべて排外主義の立場に移行した今日、プロレタリアートの党のスローガンは、次のとおりでなければならなかつた。「彼らに反対し、社会主義革命のため国際プロレタリアートの同盟に賛成する」(レーニン「いくつかのテーゼ」全集二一巻四一八頁)。レーニンはロシアの個別的現実から導きだした労働独裁論から、世界プロレタリア革命によるロシアプロレタリアートの解放と、後進性の掃討という正しい見地に移行しつづつたのである。レーニンの労働独裁論は、きたるべき革命の本質(プロレタリア独裁)と、権力の実体(プロレタリアート貧農の同盟)とを混同したところに、成立していたからである。この「古くさくなくなった公式」を「捧暗記し、無意味にくり返すことによって」(レーニン「戦術に関する手紙」全集二四巻)まだ幕がきつておとされたにすぎない二月の革命を、その段階で固定化してしまい、「共和制の勝利を条件として、祖国を防衛する」という排外主義の立場に移行した「ボルシェヴィズムの文学には忠実であったが、その精神を裏切った」「心がまえのあるボルシェヴィキ」(「ユウズの小冊子」全集二十二巻、三六六頁)との闘争をつうじて、十月の勝利は、ちとられたのであつた。だが、硝煙のくすぶりが、まだやまぬヨーロッパの廢墟の上で闘われた、二大階級の死闘の結果は、ロシアの革命家達の期待にもかかわらず、ヨーロッパプロレタリアートの壮大な敗北におわり、ロシアのプロレタリア権力は孤立した。プロレタリアートは、ただ、全世界的規模にわたる勝利によってのみ、自己を解放しうる。したがって孤立化した過渡期

社会は、そのままで共産主義社会に徹底的に進むとはいえない傾向をもつこととなり、さまざまな歪曲化現象をこうむらざるをえないであろう。そしてそれは、プロレタリアートの上にたつ、特殊な官僚層の出現として、直接に現象せざるをえないであろう。この官僚は、自己の特権を維持するために、世界革命ではなく、現状維持の平和共存政策をとることによって、国際共産主義運動を毒す新たな日和見主義、改良主義の社会的支柱として役割を担うであろうことは、われわれはすでになんとか指摘してきたのであった。(「激動・革命・共産主義」「共産主義者同盟結成大報告」「革命的インターナショナルリズムとはなにか」参照)

このソヴェト官僚を社会的支柱とする改良主義は、コミンタール内部からの左翼反対派の放逐(一九二八年)によって、政治的には完成されたのであったが、その時期はまさに金融独占資本が熱狂的な投資によって最後の蓄積の努力をつづけていた時期であった。その熱狂は大恐慌による沈滞の時期をもつづがれた。資本主義はその巨大な規模に発達した生産諸力を処理するに、もはや従来の機構によって、まかしておけないものとなっていたのである。しかし資本主義のこの段階的变化をみぬけなかつたさまざまな色合の改良主義者は、「通貨に手をふれるな」のタブーにしたがって、従来の不干渉政策に固執したり、「ドイツ社会民主党」、民主主義という「時代おくれの政策」を対置したり(人民戦線)することによって、この資本主義の危機がもたらした世界史でなんど目の決戦の機会を無為に過してしまつたのである。資本主義はその永続的な危機の徴候をつづけた後に、ニューディール、ナチス等によって、資本家社会的な現実的解決策を見出しつつ、新たな世界史的段階としての国

家独占資本主義へと推転していった。

ソヴェト官僚としての特権的地位を獲得し、強化すること——ここに国際共産主義運動にたいする直接の背教の経済的基礎が、存在するのであるが、それらの一部の背教者たちは、その日和見の本質を合理化し、大衆の信頼をつなぎとめておくために、この世界史の新たな現実をマルクス主義のよそおいをこらして理論化する企てを始めた。

今日これらの企ての中で、トリアッティによってなされた構造的改良論は、日本においても、所感派官僚主義者の手によって支配されている日本共産党の危機的状況に不満を抱いている若干の左翼的分子のなかにも、かなりの支持者を見出しつつあるかのようである。日本においては、「現代マルクス主義者」として呼びならわされているこの改良主義の幻影から左翼的労働者を解放するということはそれゆえに革命的マルクス主義者にとって決定的な重きをなすにちがいない。

「われわれは憲法にさだめられた原則にしたがって、たしかに全

般的農地改革をのぞんでいる。なぜなら、農民と国がすぐにもそれを必要としているからであり、今日でさえこの改革を実現することができぬからである。(拍手)われわれは、工業および金融のことも重大な私的独占体の国有化をのぞんでいる。そして、このこともまた実現することができる。われわれは物価利潤の形成、関税率、建築投機にたいする民主主義的統制の諸形態をとおして、財政制度の根本的改革をとおして、独占体の経済的権力を制限し、粉砕することに成功することをのぞんでいる。われわれは、これらのことをのぞんでおり、実現できるとかんがえており、その実現のためにたたかっている。なぜなら、人口のおおきな部分の死活の必要がみただされるかどうかがこのことにかかっているからであり、農民に土地と仕事があたえられ、手工業者と小生産者がその巨大な敵対勢力によって息の根をとめられることもなく、国全体がその進歩をさまたげている鎖から解放されるかどうか、このことにかかっているからである。(トリアッティ「社会主義へのイタリアの道のために、勤労者階級の民主主義政府のために」二七一頁〜二七二頁)

農地改革、独占体の経済的権力の粉砕は、「政治闘争の現在の条件のなかで」(二七一頁)つまり「憲法的合法性のなかで」(イタリア共産党綱領の宣言の諸要素)遂行されるであろう。「構造的改良は社会主義ではない。だがそれは社会主義への前進をきりひらく経済的諸構造の変革である」「われわれは改良の綱領を、新たな政治的方向を、わが国にあたえるための闘争の契機として提出しているのである。構造的改良と政治的方向の転換とは一つの闘争の二つの面である」その政治的方向とはなにか。彼らは四五年の蜂起という民主主義の勝利の確認から出発し、——もしそれがブルジョ

ア民主主義の枠におしどめられず、武装した労働者・農民の端初的権力と極度に動揺していた資本の権力との公然たる内乱にまでみちびかれたならば、その結果はブルジョアジーの支配様式の変更のみではなく、階級闘争のさらに劇的展開を許したであろうにもかかわらず——その「勝利」が確保した新憲法の活用、その活用を効果的に推進せしめるための闘争、民主主義的諸原則の完全な実現とこれを可能ならしめる政治的機構的改革への闘争の呼びかけを行う。それは「プロレタリア独裁でもなければ、ソヴェト制度でもなく権力のことになった形態」である「あたらしい型の国家」を実現するであろう。そしてそれは、「社会主義へのイタリアの道」をきり開くであろう。

このトリアッティの構造的改良は、その政治的系譜からいえば一九三〇年代の人民戦線の発展である。デIMITROフは、人民戦線の結果として生れてくる統一戦線政府は、プロレタリア革命への移行の形態とはなりえないであろう、と、コミンテルンの公式の見解を一九三五年には述べていた。「この政府は究極的な解決をもたらすことはできない。そこで、こういう理由で、ファシスト反革命の危機を最終的にとりのぞくことはできない。それゆえ社会主義革命の準備をする必要がある!ソヴェト権力、ただソヴェト権力だけが救いをもたらさるのである!」(デIMITROフ「第七回大会における報告」国民文庫版八九九〇頁)一九三〇年夏フランスの人民戦線政府のもとで、革命的指導部のもとではおそらくはプロレタリア革命の道をおしひらいたであろうすわりこみストライキの波がひろがった時、トリーズは「人民戦線は革命ではない。まして月なみの選挙作戦ではない。共和主義的諸制度の枠の中で進歩的な政

治の可能性を提供するものである」(トレーズ「人民の子」国民文庫版一一頁)と書いて裏切りの古典的定式「同志諸君！われわれはいつストライキをやめるべきか知らねばならぬ」(一一〇頁)を主張した。トレーズはソヴェトの国境を守るために「民主主義ブルジョア」との同盟の道を選んだ。しかし「民主主義フランス」(資本主義フランス)を救済せんとするその試みは後にみるように、国家独占資本主義への推転を死の苦しみのうちに体験しつつあったフランス資本主義の法則性に答えられぬままに、みずからの命を絶つていったのである。トリアッティはこの人民戦線の中心に「新たな型の国家」を認めるのである。「ソヴェト同盟の道とは異なった発展の道の探求が放棄されたわけではけっしてなかった。労働者階級および人民諸勢力の権力への到達・権力の組織化、したがって社会主義への行進についての新しい道の探求が、新しい方法によっておこなわれ、独創性と大胆ささえしめしたのは、一九二九年のおそるべき危機のあとで、資本主義世界が新しいファシズム的形態の公然たる反動独裁をうみだし、ヨーロッパ全体に深刻な政治的危機があらわれたときである。「新しい道を探求するうえで」不変の恒久的獲得物をかちとるにはいたらなかったが、試みはなされた。もっとよく知られている試みは、人民戦線政策の時代になされた。つまり、われわれが旧来の多くの立場を海中に投げすて、特定の状況のもとでは共産主義党は政府に参加することができると、また参加しなければならぬ、という確認に到達したときである。とりわけ、われわれはスペインについて、労働者階級およびその政党が権力に参加してはいるが、一九一七年にロシアで労働者階級が権力をとったときに組織された国家とはいかなる共通点もない。新しい民主主義

国家として、その性格を明かにいたったのである。」(「社会主義・民主主義」一三九頁) トリアッティは注意ぶかく、なぜこの「新国家」がプロレタリア独裁にまで進みえなかったという問題を注意ぶかく回避しながら、この経験が「社会主義への異なる道」についての示唆を与えているという構想を提起する。この構想は、人民戦線がブルジョア民主主義的要求とプロレタリア革命の綱領とを切り離し、プロレタリア革命の実現を不確定の未来においやることによって二度、三度とプロレタリアートの闘争を流産させ、近くにも反ドゴールの闘争において、西欧最大の党の一つであるフランス共産党が無残な敗北を喫せしめられることによって、多くの革命的プロレタリアートの失望をかきたてているという事態の中で、そのながきわたってスターリニズムの呪縛にとらわれてきた人々になかば漠然とした魅惑を感じさせているにちがいない。しかし、その構造的改革の構想は今日の資本主義の世界的発展段階、国家独占資本主義の法則性を正しく認識し、その打倒の戦術を正しく提起しているであろうか。われわれはこの設問に答えるためにさらに一歩進んで国家独占資本主義論の究明にとりくまねばならない。

だが、それをおこなうまえに、公認の日和見主義的前衛から分離し、組織上の独立を世界的に、反スターリン主義の左翼反対派として実現している第四インターナショナルの方針について語らねばならない。偉大な革命家トロッキーの革命的伝統をうけつぎながらも、このインターナショナルは、今日ではもはや、来るべき世界革命を有効に遂行する革命的組織でなくなってしまうている。

極く最近の大衆闘争の過程で、われわれ革命的左翼は、自己の内部に顕在化した新たな改良主義的理論と徹底的に対決しなければ

ならなかった。このもつとも現代的な、最新の改良主義と断面として闘うこと、それは、今日、ごく一部の左翼によって支持されているトロッキーの「過渡的綱領」を現在の階級闘争に教条主義的に、

固定的に適用することの限界を同時にあきらかにせずにはおかぬであらう。トロッキーは、日々の闘いの中で当面の要求を革命の社会主義的綱領とのあいだに橋をみつけたさねばならぬと主張する。その橋は労働者階級の広汎な層の現在の状況と現在の意識とから、究極の結論、プロレタリアートの権力のかくごとくに必然的に導くような過渡的綱領を含まねばならぬであらう。このようにしてトロッキーとトリアッティは同じように権力への過渡をなすプログラムを提出するものであるが、トリアッティにあつては、構造的改良の現実的可能性の根拠が、ほかならぬフルシチョフの周知の命題、「世界の構造の根本的变化」にあるとすれば、トロッキーの「過渡的綱領」は、それがおとろえ行くブルジョア制度の根底そのものとたえず衝突するほどに、資本主義の死の苦悶が深まっているという点に、その有効性の根拠が説明される。たとえば、金融独占資本の蓄積機構そのものが要求する慢性的過剰人口、それといかに闘うべきかの間に、第四インターは国有化の要求をもって答える。

「失業に対するたたかいは、公共事業の広汎で大胆な組織を要求することなしにはとうていかんがえられない。しかし、かなりの年月にわたるよう計算された一般的計画の一部をなすときにはじめて、公共事業は社会のためにも失業者自身のためにも持続的進歩的な意義をもつ。この計画のわくにそって、労働者は恐慌の結果閉鎖された私的企業のごとの公益事業としての再開を、要求するだらう。このようなばあい、労働者管理は労働者による直接の支配

にかわるだらう」

「よりひろい面をもつ宣伝のなかだけでなく、日常の煽動のうちに収奪のスローガンを提出する必要は、産業のさまざまな部門が発展のさまざまな水準にあり、社会生活のなかでさまざまな地位をしめ階級闘争のさまざまな段階とおおるということによってうらがきされる。ただプロレタリアートの一般的な革命的たかまりによってだけブルジョアジーの完全な収奪を日程にのぼせることができる。過渡的要求の任務はプロレタリアートにこの問題の解決のために準備させることである」

たしかにトロッキーがその構想を定式化した一九三〇年の資本主義は一九二九年の大恐慌、それにつづくドイツ、フランス、スペインにおける階級対立の激化という資本主義の連続的な危機の徴候を示していた。それにもかかわらず、この危機によって作りだされたブルジョアジーの衰微の状態をプロレタリアートが決定的打撃のために利用しなかったため、資本主義が国家独占資本主義という新たな資本家社会的な組織化によって、したがってまた、結局は部分的なる社会化として、新たな矛盾対立を激化せざるをえないという解決のない展開によって、矛盾の現実的解決をはかったのであった。

国有化の実現は権力掌握の途上に進むプロレタリアートの手によってではなく、資本主義自身によつたなされたのである。その国家独占資本主義は資本主義に新たな活力を与えたことはいない。

「人類の諸生産力は活気を失っている。あたらしい発明や改良は物質的富の水準をあげることにすでに失敗した。全資本主義体制の社会的危機の条件のもどつづく恐慌は、たえず増大する搾取とくらしみを大衆におしつける。一方では、増加する失業が国家の財政

的危機をふかめ、不安定な貨幣制度をくずしていく。民主政治は、ファシストとおなじように、つづく破産のうえでよろめいている。

ブルジョア自身も出口がわからないのだ。すでにその最後のきりふだとしてファシズムに賭けざるをえなかった国々では、かれらはいまや経済的軍事的な破滅にむかって目をとじたまますべていく。歴史的な特権をもった国々、つまりブルジョアが国民の蓄財のうえにたつて、民主主義というぜいたくにふけつていられるような国々（イギリス、フランス、アメリカなど）では、資本家の伝統的な政党すべてが、意志のまひする寸前の混乱状態にある。ニュー・デイルは、初期のみせかけの決意にもかかわらず、政治的混乱の特殊なかたちをあらわすにすぎない。それはただブルジョアジーがかりに富を蓄積するのに成功した国にだけありうることなのだ。いつおわるともわからない現在の危機によって、ニュー・デイルの政策がフランスの人民戦線とおなじように、経済的なゆきづまりからあたらしいぬけみちをつくりはしないことは、あきらまになった」という予見は、それが当時の歴史的諸条件が社会主義のために完全に熟していることを呼びかけているかぎり、うたがいの余地もなく正しかったが、すべての階級的指導部の完全な破産のために資本主義が存続したときには、新たな歴史的条件に適應した新しい綱領が必要とされたであろう。ニューデイルは「政治的混乱」以上のものを資本主義のためにもたらしたのである。したがって三十年代という資本主義の段階的变化に必然的にもなつて現われた激動期における政治方針を固定化し、それについてあらわれた国家独占資本主義を特殊段階論として理論化することを彼らが怠った時、資本主義の連続的危機という主観主義的評価、そして

それが真に意識的なプロレタリア前衛の形成なしに語られるときには、その裏返しとしての客観主義的受動に起因するところの新たな改良主義へと転落することになったのである。たとえば賃銀スライド制という過渡的要求が、物価の飛躍の上昇の時期に提出された時には、たしかに革命的要求たらしめうるであろうが、消費物の価格の上昇に比例する賃銀の自動的な上昇の保証の固定化はおそらくに賃銀奴隷制をもっともよくいんべいする道具となるであろう。そしてそのようなものとしてアメリカの労働組合において今日賃銀スライド制は広汎に採用されているのである。ドグマチストである第四インターナショナルの首領たちはその階級の本質を見ぬくことができず「今日第四インターの綱領はCIOにおいてさえ採用されている」(パッロ)と誇らしげに語っている。

だが革命の現実的内容は、けつして前もって予想されたり、あるいは図式的に提示されるものでもない。「あらゆる革命をふくめて歴史のあらゆる急転換はきわめて豊富な内容を示し、闘争者の闘争形態と、力関係のきわめて思いがけない独特の組合せを展開する」(遠方からの手紙)全集三三三三二七頁)「具体的政治的任務を具體的狀況に應じて闘わねばならぬ」(レーニン「二つの戦術」)最大限綱領の実現はけつして固定的に予想された見通しの上にはなく生きた現実の豊富な内容の中にこそ探求せねばならぬ。だから過渡的綱領は、その歴史的社会的諸条件の異なる状況に対しても過渡的綱領として固着されるべき恐るべき石化の危険をともなうのである。段階的な変化を経過しつつあるブルジョア社会の混乱を、資本主義の「死の苦悶」として無媒介的直接性において認識するところから出発した第四インター改良主義への転落は、あらゆるこれまで

の改良主義と同じ認識論的根拠を有している。今日革命党の綱領は現代のブルジョア社会をその普遍本質論を媒介して、その現実形態として、正しく理論化するところから出発せねばならぬであろう。

二、国家独占資本主義と「構造的改良」論のゆくえ

帝国主義時代における支配的資本としての金融資本の概念は、ふつうヒルファディングとレーニンによって、「産業資本と金融資本の癒着」として、定式化されたと考えられている。しかし、ヒルファディングの「金融資本論」は、株式会社制度の分析等によって帝国主義研究の端緒を切りひらいたとはいえ、段階論として規定されるべき金融資本の分析を、資本制生産の貨幣、信用等の原理論的考察の直接的延長の上に求めようとしたのである。その結果、貨幣の研究にも不明確なものを持ちこむとともに、独占金融資本を、特殊、歴史的な世界的段階として、把握することに失敗したのであった。これらの欠陥を指摘して、その方向に一步を進めたのはレーニンであった。彼は「資本主義の若干の基本的特質物が、その対立物に転化しはじめ……資本主義からより高度の社会経済制度への過渡期の諸特徴が、あらゆる方面にわたって形づくられ、あらわになった」資本主義の「一定の、きわめて高度の発展段階」(「帝国主義論」全三二卷一〇六頁)として帝国主義を規定し、その上にたつて、新しい現実に適応しきれずに改良主義に転落したカウツキーを批判して、帝国主義戦争の渦中にあるプロレタリアートの世界的任務をあきらかにしたのであった。「この過程で経済的に基本的な

は、資本主義的自由競走に資本主義的独占がとつてかわつたことである」(三〇六頁)「生産の集積、そこから成長してくる独占体、銀行と産業の融合あるいは癒着——これが金融資本の発生史であり、金融資本の概念の内容である」(二六〇頁)とレーニンは規定する。しかし、その独占の成立、銀行と産業の癒着を「資本主義一般の基本的諸特徴の発展及びその直接の継続」(三〇六頁)、つまり自由競走の結果とのみ考えることはできない。産業資本主義的段階の金融資本段階への変化を決定的ならしめたのは、独占形成を必然にする資本蓄積様式そのもの変化に他ならないのである。レーニンにおいては、帝国主義の歴史的地位を鮮明にし、独占や、金融寡頭制の存在することを課題としていたために、帝国主義段階の基礎をなす独占金融資本の運動法則については、ヒルファディングのごとき統一的把握を行っていなかった。われわれは、国家独占資本主義が歴史的にいかなる必然性をもつて出現し、いかなる意図を有するかを理解するためには、まずもって金融独占資本とはいかなる運動法則を展開するかを問わねばならない。

金融独占資本主義への過渡をなす一九世紀後半の鉄鋼業を中心とする重化学工業の発展は、固定資本の巨大化によって経営に要する資本を異常に増加させつた。この産産技術の発展がうみだした巨大資本の一挙的投入の要求は、産業資本段階におけるように、個別資本が自ら取得した利潤に、個別資本の循環から生ずる遊休資本を金融機関に集中せしめて貸付資本となったものを合体させつた。行い資本調達方式をもちや桎梏とするようになった。それは経営に必要な任意の資本を社会的に蓄積せられた資金から自由に調達する機構を確立することによって、資本家社会的に解決される。それに

こたえるものが、株式会社の資本に他ならない。それは払込みと同時に、価値増殖の過程をつづける現実資本と、それによってえられる利潤を定期的に配当としてうけとる所有名義としての株式証券との二重の存在を考えられる。後者は配当を一般利子率によって還元した価値額(株価)によってあらわされる、それ自身に利子を生むものとしてのいわゆる擬制資本をなす。この擬制資本と現実資本の差額(株価と額面価値の差額)は創業利得となってあらわれるのであるが、それは、株式資本家が所有する資金をそのまま資本として、しかも多くの場合よりも多くの資金(創業者利得の取得)として、いつでも回収できる形で投資しうることを可能にすることによって株式会社形式を普及させる根本的基礎をなすのである。本来の資本家の蓄積のみならず、あらゆる層からの遊休的資金を直接的に動員し、このことによって比較的小額の自己資本と同様に利用することを可能ならしめるのである。かかる様式は、所有と経営を分離しつつ、支配権を組織的に少数大資本の手に確保し、資本家的生産過程にたいする支配集中の機構を確立するであろう。株式会社と銀行のあいだにも重要な変化をもたらさずにはおかない。銀行は、本来の銀行業務としての、遊休貨幣資本の資金としての融通を媒介するいわゆる商業銀行の役割から進んで、人的結合、発行活動、創業利得などの諸要因によって「産業の融合ないし癒着」を深めるであろう。

この金融独占資本は、最初から資本の集中による巨大なる集積をもって蓄積を行う。資本が社会的に形成されることによって生産方法の不断的改良が個人的制約から解放されて行われ、生産力は飛躍的に増大する可能性を与えられる。しかしこの傾向には、他の一面

として、独占体が独占力を利用して、旧来の固定設備をできるだけ利用するため、生産方法の改善をおくらせるといふ面をもちあわせてもつであらう。資本の投資は金融資本に特有なる金融的規制の下に、社会的資本としての運用による利益によって決定される。すなわち資本は、個々の産業の利潤を基準としながら、一般的利子率によって、資本還元された一定額の貨幣資本としての存在を与えられて、各産業に配分されるのである。この資本市場による規制は景気循環の典型的過程を攪乱するものとして作用するであろう。それは、蓄積の様式の反面をなす労働力商品化そのものをも産業資本段階のそれとは異った関係において実現しうるものになったことをしめすものに他ならない。蓄積は資本の機械の高度化にもなって、労働力の不断的過剰化を実現して、それによって条件づけられるのである。金融独占資本は、その過剰人口を農業その他の中小企業に形成し、保有し、それを一方では労働力の給水源として利用しながら、他方では、独占価格による独占利潤の取得のための収奪の対象としても利用するのである。したがって、金融独占資本のもつては、農業その他の中小企業の残存と再形成とは、機械的に必然とされるのであって、金融独占資本の基礎に手をふれずには、これらの旧社会の残存物を一掃することはできないのである。このように金融独占資本が旧社会を徹底的に分解することによって純粋な資本主義社会の実現にすすむという傾向を、逆転することになったのは、まさに資本主義が特殊歴史的な社会たることを示すといってもよいであろう。

かかる蓄積様式を展開する金融独占資本主義は、資本主義の発生成長の過程をも株式会社制度をもって実現したドイツにおいて、最

も典型的な発展をとげたのであった。一方イギリスにおいては、産業資本段階において個人企業が典型的な発展をみるることによって株式会社形式は容易なる進歩をみなかったが、社会的資金は海外投資に有利な投下口を見出すことによって特殊なる形態で金融資本を形成しつつあった。金融資本によって必然的形成される独占体は、その独占的領域の拡大を求めつつ、いわゆる膨脹政策を展開する。それは、帝国主義国家間の、世界の領土的分割を求める激烈なる闘争を招かざるをえないのであって、イギリス、ドイツにおける金融資本の両極的發展の結果として、一九一四年―一九一八年の第一次帝国主義戦争は招来された。この第一次帝国主義戦争において軍事的な敗北を喫したドイツ帝国主義は、敗戦がもたらした混乱から、社会民主主義者のたすけをかりて抜け出すことに成功し、一九二一年―一九二二年に、石炭、鉄鋼業等のコンツェルン形態による最初の資本集中の波を汎汎に展開する。ついでインフレーションの進展にともなう、多岐部門にわたるところのいわゆる「金融コンツェルン」が簇生したが、それはインフレーション収束後の一九二五年の安定恐慌のさなかに分解し、コンツェルンの再編過程を準備するであろう。この過程は、株式形式を通じて、遠くアメリカ等からの海外資金をも広範に吸収し、それらの社会的資金をますます多く自己の資本としての支配する少数大独占を形成する。一九二五―二六年にかけての有価証券信用の額は六〇億マルクも増加したが、このようにして動員された資金の大部分は鉄鋼、石炭、運輸、電機工業、化学工業に流れ、その設備資金として使われ、投機的な好況期を実現する。しかし、その拡張が実際に行われ、運動を開始すると、その生産額は一躍増進し、原料の調達にさえ困難を生じることになり、

それがさらに投機的な投資を呼びおこすのであるが、やがて過剰なる資本は、大恐慌として暴力的に破壊されざるをえなくなる。資本の破壊の影響は産業資本主義段階におけるそれとは異って巨大なる新設固定資本による生産能力の過剰として現象し、また支払手段調達のための株式の大量売却を強制することによって、株価の崩壊による信用恐慌を生みだし、資本市場はもはや景気を回復させる自動調整的作用を失ってしまったのである。これはもはや資本市場に規制される従来の金融資本による蓄積様式のみもつてしては、その巨大に発達した生産諸力を処理しきれなくなったことを示すものといってもよい。すなわち、技術のより以上の高度化にともなう固定設備投資の極度の増大と、その反面市場の相対的狭隘化にともなう景気的不安定から生ずる投資リスクの増加は株式制度をもつてする資本動員方式を利潤の増加ないし安定には不十分とするようになったのである。資本主義は、金融資本が処理しえない問題を資本家社会的に解決するために国家の介入を要請しつつあったのである。しかし、資本主義がそれを国家独占資本という新たな蓄積機構の確立をもって実現する過渡期はまさに資本主義の「死の苦悶」として直接的に認識しうる、永続的な危機の徴候を示していた。階級対立の激化は帝国主義と十月革命にひきつづく国際的な階級決戦が迫りつつあることを示していた。焦点はふたたびドイツであった。ドイツの金融ブルジョアジーは、国家の強力な介入によって、みずからの権取する条件を大巾に拡大するために、マルクス、エンゲルスの旗の下に最高の組織と伝統を誇っていたドイツプロレタリアートの抵抗にうちかかって、強力な支配体制を必要とした。彼らは、社会民主主義を見限ってヒットラーの国家社会主義を支持し始めたとき、ファシ

ズムの危険は急速に現実化した。それは支配階級の動揺によって破滅の淵に追いやられ、しかもプロレタリアートに期待を裏切られ、急進化した小ブルジョアジーを急速にひきつけていた。ドイツの労働者政党は、いずれもこのブルジョアジーに対する決定的打撃のために失敗したのであった。ドイツ社会民主党はこの資本主義の危機の本質を見ぬけなかった。彼らは、戦後インフレーションのおそるべき体験から「通貨に手を出すな」のスローガンに固執し、予算の均衡、通貨の金バリエーの固守、不況の「必然的コース」への不干渉を経済政策の原則とした。ドイツ社会民主党指導者ナフタリは一九三〇年末に次のように書いた。「私は、経済政策の観点から、危機がそのコースを走り終る迄は、われわれは危機を克服する上で多くの事をなすとも思わないし、また非常に決定的な何らかの手を打ちうるとも思わない」と。

しかし、後にみるとおりこの恐慌からの私的所有の枠内での脱出は国家の強制的介入によつてのみ可能であり、そして恐慌時における独占価格の下落を阻止するための財政支出の増大は、一九三〇年にすべての資本主義国において金本位制からの離脱を要求したのである。したがって社会民主主義者が資本主義的所有の止揚を真剣に考えず、その枠内にとどまろうとしていたとしても、その経済的政策が資本主義の法則性を反映していないかぎり、彼らの政治的没落は必然であった。一方共産党はこの改良的指導下にある社会民主党労働者との「別個に進み、一緒に打て」の反ファシズムの統一戦線の実現によつて、その改良的幻影から彼らを解き放つて、革命的危機における情勢を一変するために闘うのではなくて、「国際社会民主主義は今やファシズムの一翼となった」としてかたくなにその統

一戦線を拒否し、ドイツプロレタリアートを混乱させ、全世界プロレタリアートの注視の中に史上最大の敗北を喫したのである。ドイツ金融資本はヒットラーのもとで、国家独占資本主義へと推移していった。ドイツプロレタリアートの敗北は、全ヨーロッパの情勢に重大な影響をもたらした。ファシストの攻撃はいたるどころでいぢるしく勢力を増大した。一九三四年二月ファシストのクーデターの前に、フランスのプロレタリアートは巨大な階級的力量を登場してたちあがり、ファシストの力を徹底的にくじいた。十月に共産党は人民戦線のスローガンを提案し、三六年の一月には「資本主義の枠内で実現できる最低綱領」とトレーズによつてよばれた「平和と民主主義と生活を守るための」共同綱領を發展した。「この共同綱領は、いかなる意味においても共産党独自の綱領が放棄されたのではない」と共産主義者は宣言したが、そのことによつて「社会主義という『より完全な民主主義』を達成するための」当面の中間的任務を実現する政府を前提し、それにみずから忠誠を声明したのである。一九三六年二日の総選挙で人民戦線は議席の過半数を獲得し、ブルム内閣の成立は、その綱領を実現するであろうと期待された。通貨インフレーションの悲惨な経験から、通貨の金バリエーの固執は、人民戦線内閣出現までのフランス政府の原則であったが、この予算の均衡の実現は、すでに非常に低かった官吏の給料をさらに切下げたラヴァル首相の「貧困政令」において、そのクライマックスに達し、労働者階級を行動の刺激にかりたてていた。選挙における人民戦線の勝利は、統一戦線の主力をなしていたプロレタリアートを一層はげまし、その団結を強化した。一九三六年の夏のあいだ労働組合の承認、週四十時間労働制、賃上げを要求するすわりこみ

ストライキの波が全国をおおった。ブルムは大衆の圧力におされて週四十時間労働制、団体協約、有給休暇にかなする三つの法案を議会に提出した。一方彼はビエールラヴァルのデフレ政策を非難し賃銀の上昇は生産の拡大をもたらし、それはおのずから予算を均衡させ、流出した資本は復歸するであろうと説教した。そしてニューディールと比較するのを好んだ一八〇億フランの公益事業費を計上したが、彼は国家資本主義が財政の赤字支出と関連ある点を理解できなかった。賃上げは労働者階級の実質的な収入の増大をもたらさずその事業計画は資金不足によつてごくわずかしか実現されなかつた。ブルジョアジーは反撃を始め、金は流出を続けた。フランスプロレタリアートの運命をかけたレオンブルムの内閣は全国的、平和主義的民主主義的段階をとりこえて二つの階級のどちらにたつたかという答えを要求された。問題は資本主義の枠を踏みこえてプロレタリアートとともに大胆に前進するか、もしそうでないとするならば伝統的な通貨政策を捨てて、国家資本主義へと世界的に推移しつつある資本主義の法則性に答えられる政策を採用してブルジョアジーとともに進むかであった。彼は一九三七年二月には人民戦線綱領の中止を受動的に宣告しただけでどちらの道も積極的に進もうとはせず、こうして人民戦線はみずからの命を断つたのである。ドイツとフランスにおけるプロレタリアートは、ブルジョア社会が経験しつつある死の苦悶を、指導部のプチブル的な臆病と裏切りのゆえに、空しく見逃してしまつたことを示している。

一方ブルジョアジーが比較的安定した力をもつていたアメリカにおいては、そのようなプロレタリアートの側からの重大な抵抗もなく、国家資本主義の推移を除去に完成しつつあった。金融独占資本

段階をいわゆる自己金融方式をもつて蓄積を展開し、銀行との関係もかならずしも強固でなかつたアメリカの金融資本は、ニューディールの補完によつて、いわゆる国家独占資本主義段階をもつとも典型的に代表する發展をとげる。日本は戦時経済を軍需発注制を中心とする財政資金の撤布、臨時資金調整法による信用の動員、統制等を通じて、資本の有機的構成を高めつつ旧財閥の封鎖性を解消せしめる方向に向うのであるが、これは戦後の財閥の解体によつて加速化され徹底化される。

かくして世界資本主義は、一九二九年の大恐慌を起点として第二次帝国主義戦争にいたる期間にわたつて国家独占資本主義へと段階的な変化をとげるにいたつたのである。それは軍事技術の一層の發展、オートメーション、原子力産業等の導入による固定設備投資の一層の巨大化と景気の不安定から生ずる投資リスクの増加を、資本家社会的なる方法で現実的に解決しながら、またこれによつてますます矛盾を激化せざるをえないという、そのような蓄積の様式を展開するにいたるであらう。

国家独占資本主義段階の蓄積様式を特徴づける新しい現象は、利潤の社内留保による蓄積、自己金融の現象である。第一次大戦後の産業合理化のさなかにあつたドイツの企業設備資金の源泉と、第二次大戦後の朝鮮戦争のさなかにあつた好況期の西ドイツのそれとを対比するならば、われわれ次の諸点を指摘することができるであらう。(1) 政府資金、とりわけ国家予算の割合(七%→十六%)および自己金融の割合(三八%→五八%)は著しく増大し、(2) それとは対照的に、新規証券発行の割合(二七%→二%)と銀行融資の割合(二〇%→六%)の減少である。この現象は他のほとんどの帝国主義

諸国にみられるところであって、資本調達に重要な楯が、株式会
社形式を主とする資本市場から国家資金ならびに自己金融に移って
きていることを示すものといつてよい。この自己金融の現象は、株
式会社の成立の発展のきわめて高度の段階にあらわれた現象であ
る。

固定資産総投資額の資金源泉

資金源泉	1925—28 平均		1950—52 平均	
	10億RM	%	10億DM	%
企業				
自己金融	4.3	38	12.9	58
その他				
政府				
国家資本	0.8	7	3.6	16
算入 (政府)	1.0	9	1.0	5
その他	0.4	3	1.5	7
小計	2.2	19	6.1	28
市場を通じる				
銀行融資	1.1	10	1.4	6
証券発行による	1.0	9	0.2	1
新規証券投資による	2.1	18	0.2	1
機関投資 (民間)	0.4	4	—	—
資本輸入	0.4	3	1.3	6
その他				
小計	5.0	44	3.1	14
総計	11.4	100	22.1	100

支配権を握る株主は、中小株主をレントナー化することにより、
会社の利益を必ずしもすべて配当に充てることなく、ついには利潤
のいかんにかかわらず、配当率を利率率なみにまで引き下げるこ
と

を維持し、もしくは蓄積を促進するなどの措置が講ぜられたり、ま
た私的資本によつてはもはや担当しえないが、資本主義再生産の存
続には不可欠の部門は、会社所有より高度の国家所有に移される等
の手段によつて、国家の直接の介入がおこなわれれば、これらの私
的所有はますます強化されるであろう。これは私的所有の基礎のう
えにおける私的所有と国家的所有の結合という資本主義の性格の変
化をもたらすのであり、これが国家独占資本と呼ばれるものにほか
ならない。

国家独占資本主義のもとでは、内部金融の発展の結果、企業の拡
張は資本市場の制約から解放されて、不断に行われる基礎を与えら
れる。そして、好況時には、自己金融による資金をこえた資金需要
が銀行に要求される。不況時には、過剰の生産能力による生産物の
過剰を消費者信用によつて実現し、それによつても十分でない時は
操短によつて独占価格を維持し、ひいては国家財政の支出によつて
利潤の維持をはかるのである。その結果、好況時、不況時を問わず
構造的なインフレーションの圧力が存在するのであるが、かかる様
式をもつて展開される蓄積は多かれ、少かれ景気の正常な循環を攪
乱するであろう。そして、それは労働力商品の不断の過剰を実現し
つつ行われるのであるが、例えばアメリカのAFL・CIOのよう
に失業者には自動的に労働組合から失業保険が与えられるユニオン
ショップ制のもとでは、それらの改良的組合自体が潜在的過剰人口
を保有する機構としての役割を果しているものといつてよい。

このように、国家独占資本主義は、特有の蓄積様式を展開する一
つの世界史的発展段階として、理解されねばならないであろう。
国家独占資本主義論の解明は、今日、革命的プロレタリアートが

によつて、それを会社自身の財産に留保し、固定資本の巨大化に伴
う莫大な資金を調達する機構として確立するのである。この自己金
融の結果、資金は資本市場の制約から解放されて、企業の拡張をき
わめて容易なものとする。そして自己金融によつて蓄積をつづける
ことができる企業は限られているので、資本はこのもとで異常に高
度な集中をとげるであろう。

国家が、金利水準の引き下げによつて配当性向を低下させ、差別
税制、配当制限、独占価格の維持等の諸措置をもつてこれに公然と
介入するとき、蓄積はさらに異常に促進されることになるであら
う。この自己金融の第一の結果は、資本市場の性格の変化である。
株式市場は狭隘化し、それは大衆所得の一部の資本転化を媒介し、
かれらをますますレントナー化しながら企業危険転嫁を媒介する市
場へと性格の転換を強いられる。またこの株式市場の変貌と関連し
て、貨幣資本市場は消費者信用という新しい信用形態を生みだすが、
これは巨額の銀行遊休資金を、他人の負担で自己の過剰商品を独占
価格のままて実現するために動員し、それによつて自己金融力を強
める機構にほかならないのである。

この自己金融方式による蓄積は資本機能の資本所有からの疎外を
完成させ、いわゆる「会社それ自体」の成立をみることになる。も
とも株式制度に必然的な群小株式のレントナー化が進められ、小
数の支配的株主の利害が、会社それ自体の利害としてあらわれると
いう外観の下で、少数の株主の私的所有が一層強化される。

ここにおいて権力による強制措置によつて、租税等によつて集中
された莫大な社会的資金を、低利長期の国家資金として重要産業部
門に供給したり、あるいは先にのべた税制や金利政策によつて利潤

打倒すべき対象を真に科学的に認識するために、マルクス主義理論
戦線に課せられた焦眉の急務だといつてよい。この要求に答えよう
としながら、「現代マルクス主義者の一人、杉田正夫は、「現代帝国
主義と国家資本主義論」(「現代の理論」六月号)なる論文をものす
ることによつて、マルクス主義に対して本物の征戦を企てしまつ
た。彼は、メンデルソンとツィーシヤンクを批判の対象としながら
国家資本主義を独占資本と国家との相互関係の把握という面からみ
て、それを国家の独占資本への「従属」とみるか、「癒着」とみる
かという問題と、国家独占資本主義が資本主義的生産関係の新段階
をなすかどうか、という大別して二つの問題を取り扱っている。も
ちろん、この小論で、これらの問題を深刻に追求して行く能力も、
余裕もないが、この杉田正夫氏の論文は、現代マルクス主義者たち
の経済学に対する完全な方法的混乱の典型を示しているもので、こ
のかぎりにおいて批判の対象として取り扱うことにしよう。

彼は国家独占資本主義の現象として、財政、経済立法による「生産
手段と交換手段をいぜんとして私的資本家の所有にしておいた上で
の統制活動」と、「それを国家的所有の基礎の上に移して行つて行く経済
活動」とに二大別した上で、第一の關係は下部構造と上部構造との
關係であり、「下部構造が上部構造に対して规定的な役割を果し、
上部構造は下部構造の運動に反作用を与えるにとどまる」という唯物
論の基本原則が作用している」ので、上部構造としての国家は、金融
寡頭制」に基本的に従属しており、第二の關係はたしかに両者とも
に下部構造であるが「国家資本は私的独占の利益に從属する地位に
あるので、『癒着』の概念の導入によつて国家独占資本主義の本質
の規定たらしめようとしたメンデルソンの試みは失敗におつた」

と結論する。しかし、われわれは「国家独占資本主義とはなにか」から一步進んで「それはいかなる蓄積様式をもって運動するか」という点に、国家独占資本主義の本質の規定を求めねばならない。その欠陥は、レーニンが「帝国主義論」において「帝国主義の経済的内容は独占である」と規定したが、その運動法則の究明なかならず金融独占資本の基底をなす株式会社制度については統一した把握をえなかつた点を方法的になら反省しえなかつた点に基いている。その結果、レーニンの「産業資本と銀行資本の癒着」なる概念にならって、従属か癒着かという形式的な側面に力点を置いて国家独占資本主義の本質の規定となそうとするのであるが、かかる見解は国家独占資本の運動の機構、その法則性を全機構的に把握しえなという点において決定的に不十分である。

資本・賃労働関係の再生産様式を対象とする蓄積論は、それぞれの段階に応じてその貫徹形態を異にしつつ、全社会現象の変容を規定して現われるがゆえに、各段階論を蓄積様式の問題として把握す決定的に重要である。

そして段階論は、各々の段階での支配的な資本が、原理論で把握された資本の運動法則をいかに遍奇せしめつつ自己を貫徹するかを追求するのであるが、それは同時に「原理論」の徹底的な純化を要求するのである。冒頭の商品が貨幣、資本と自己展開をとげ諸階級にいたる首尾一貫した論理体系として原理論が体系化されることによつて、若きマルクスの仮説——唯物史観——は科学的に確証されるものとなる。資本主義が労働力の商品化によつて、原理的には社会の経済過程を純経済的形態をもって処理しうることをあきらかにすることによつて、下部構造を上部構造から明確に分離し、下部構

造が上部構造を規定することを科学的にあらわしうるからである。しかし、帝国主義時代においては、原理論が偏奇をうけ、帝国主義政策はまさに、資本自身が経済政策をなすともいふべき関係を展開するのであって、かかる段階の分析は杉田氏のように、経済的諸関係の総和を、上部構造と下部構造に裁断してしまうことによつて片づけるのは、マルクス主義に特有な科学的方法を明確にしえない点からきているといつてよい。

杉田正夫は、経済学の原理論によつて科学的に論証された、かれのいわゆる「史的唯物論の原則」なるものによつて、段階論として規定されるべき国家独占資本主義をなで切りにし、「下部構造をかたづけつついるのは生産手段の所有関係」であるということから、「国家独占資本主義を純経済的概念としてつかまえるならば、それに相応するものは生産手段と交換手段が国家的に所有されている国家企業だけが残ることになる」と説明する。

したがって、国家独占資本主義を世界史的段階として考えるならば、単一の国家独占という局面をいわねばならず、事実としてそのようなことはありえないから「国家資本主義の特別な段階は形成されえない」と結論する。しかし、先にわれわれが試みたように、国家資本主義は、株式会社制度の極度の発展の結果、それを自己否定してあらわれた内部金融を資本形成の主要な積杆として蓄積をおこなう特殊なる世界史的発展段階なのである。そのような意味で国家資本主義は、より高度に発展した生産力に即応して生まれたものでありしたがって、たんにそれを政策の結果としてではなく、経済的諸関係そのものの変化としてとらえるべきだといふツイーシヤンクの指摘は正しいといわねばならない。

この国家独占資本主義段階においては、少数の支配的株主の利害が、「会社それ自身」の利害としてあらわれるばかりでなく、「幻想的な共同性」としての国家が介入することによつて、階級関係の隠蔽は、さらに新しい色彩が加えられることになる。しかし、個別の金融資本のそれぞれの有形無形の抵抗があるにしても、権力による私的所有を集中的に擁護するものに他ならないことは、例えば自己金融現象にもっとも明瞭にあらわれているといつてよい。

しかし、この国家独占資本の「公的」性格に幻惑されて、あたかも「国有化」が、独占資本の権力に対する全面的な制限をもたらすかの如き、倒錯した観念が一連の「構造的改良論者」の中に生みだされつつあることは、周知の事実である。「大独占体において打撃を集中し、これを非難のまっただなにつきおとし、孤立させること、その権力を制限し、その破壊を目的とする対策を提案し、採用することが必要になっている。」（「民主主義・社会主義」二七一ページ）と、トリアッティは、第八回大会の壇上から呼びかけた。「われわれは、工業および金融のもっとも大きな私的独占体の国有化をのぞんでいる」。それは、「社会主義ではない」が、私的独占体を制限することによつて「経済的民主主義」を具現するであろうからである。

たしかに彼等がよく援用するように、レーニンも、戦争の渦中にある帝国主義ロシアの「さしせまる大破局」を前にして、銀行、シンジケートの国有化、営業の秘密の廃止、その他の統制の方策を、革命的プロレタリアートの前に提起したのであった。しかし、レーニンは、国有化の綱領を、それ自体ならぬかの超階級的な、民主主義的内容を有するものとして無条件的な支持をそれに与えたりは

しなかつた。きたるべき経済的大破局に対するそのような諸措置はまさに革命的プロレタリアートをして、自己を支配階級にたかめることによつてのみ実現されるであろうことを自覚せしめずにはおかなかつたであろう。そのような具体的状況においてのみ、それはプロレタリアートの具体的任務たりえたのである。「帝国主義戦争は社会主義革命の前夜である。そしてこれは、戦争がその惨禍によつてプロレタリアの蜂起を生みだすからではなく——もし社会主義が経済的に成熟していなければ、どのような蜂起も社会主義を生みださしめないであろう——国家独占資本主義が、社会主義のためのもっとも完全な物質的準備であり、社会主義の入口であり、それと社会主義と名づけられる一段のあいだにはどんな中間段階もないようないような歴史の階段の一段である。」（「さしせまった破局、それとどうたたかうか」全集第二十五卷三六六ページ）だが、このような物質的諸条件の成熟の故に、まさに革命的プロレタリアートの主体的な活動は、一層の緊急の課題として要求されたであろう。「一般に歴史では、とくに戦時には一カ所で足ぶみをしていくことはできない。前進するか、それとも後退するか、どちらかにしなければならぬ。共和制と民主主義を革命的な方法でたたかいた二十世紀のロシアでは社会主義にむかつて何歩かすすめないでは、前進することはできない」ロシアが帝国主義戦争にまきこまれ、階級的利害の接触する渦巻の中に突入することによつて、二月の革命が生みだした「中間的民主的政府」に断乎たる階級性の宣明を要求し、たとえ「革命の祖国防衛」といふかくれ文句のかけにみかかれてはあつても、戦争の継続を擁護したものは、必然的に「帝国主義的共和主義者」への転落を余議なくされた時期なのである。同じよ

うに、レーニンのかかげた要求を社会主義にむかって大胆にすすむことよって実現せんとする試みを投げすたものは「不可避免的にケレンスキー、ミリニコフ、コルニロフのところまで」つまり資本の代弁人にまで転落することになるであろう。

今日においても、国有化の要求は、大衆の革命的な沸騰状態の中で、権力獲得の過渡的な要求として具体的に提起されるのでなければ、資本主義の法則性にたがって、国家資本主義による私的所有の補完を結果する改良主義へと転落するより他ないであろう。そのような危険にたいする保障をイタリ共産党は、どこに求めているのであろうか。彼らは、レーニンとは異って「憲法による民主的政治闘争」にそれを見出したのであった。しかし、社会主義への漸進的な道を切り開くという、この民主的政治闘争の結果は、国際主義の階級観点の放棄と人民戦線戦術の絶対化に導いた統一戦線戦術の日和見主義、超階級の民主主義の固定化によって、おそらくは徹底した客観主義としか批評しえないような次のような図式をもって、彼ら自身によって予め見通されることになったのである。「経済的要求と政治的要求のための労働者階級の闘争は周知のように傾向的、法則である資本主義のあの法則の実現に、障害をなす傾向があり、またじっさい障害になる。この衝突からたえず新たな問題と新たな矛盾が生れ、資本主義の一般の諸法則の範囲内で、新たな発展、生産のあらたな組織形態、新たな労働規律、したがって又、ふたたび運動全体のあらたな目標が決定されてゆく。……資本主義はいっばうで譲歩をよぎなくされるが、他の方法でとりかえそうとつとめ、このようにして闘争は新たな土台のうえに、再燃したし、またたえず再燃する。」(「フランス共産党の批判にこたえる」「現代革命の展

前衛組織の策動を、最後に粉碎するための大会であり、かつまた、今後の学生運動の方向を明瞭にさし示す大会でなければならぬのである。

☆代々木共産党の謀略は、日を追って気狂いじみた様相を呈してきている。自己の理論をもたない代々木所感派官僚は、「構造的改良派」を動員して、共産主義者同盟にたいする没理論的な中傷と誹謗を加えてきている。学生戦線のみならず、全戦線にわたって官僚主義的弾圧をおこなっており、その裏切りの本性をあらわにしつつある。

☆左翼反対派の内部にあらわれた、トロツキー・ドグマチズムは、すでに理論的実践的に破綻した。今後、同盟は、理論的実践的には、完全に破産したにもかかわらず、前衛党の名称のゆえに、生きながらえ、いまなお、相対的に強固な基盤をもっている代々木共産党の影響力を全戦線から一掃するために、その全活動を集中するのである。

☆理論分野では、その没階級の理論にマルクス主義的な粉飾をほどこしてある程度の浸透力を示している「構造的改良派」の、似非マルクス主義的、改良主義の本質を暴露し、これを粉碎するために努力するのである。

☆本身は、このことのためにとおく紙面を割いた。読者はそこに、「現代マルクス主義」の深刻な理論的破産を讀みとることができるであろう。真に革命的なマルクス主義の復活。これが革命的左翼の仕事なのである。

望一八〇頁

彼らは、レーニンの綱領から、その階級的内容をうばいさり、民主主義的言辞によって、資本主義への忠勤を証明しているのである。

編集後記

☆本号が読者諸氏の眼にふれるごろには、おそらくは、日教組大会、全学連大会などが開催されているであろう。この二つの大会は、いろいろな意味で革命的左翼の注目の的となるはずである。

☆日教組大会が、二月大会以来の右傾化の一応の完成として、勤評闘争に妥協的終止符を打ち、いわゆる「労働運動の危機的状況」に拍車をかけることになるか、反対に、日和見主義的方針にたいして鋭い批判を浴びせて、その右翼化への進路をたちきり、「危機的状況」を打開する方向を打ち出すことになるか。革命的左翼の努力の方向が、後者の過程を促進するために向けられるであろうことは当然である。

☆全学連大会が果さなければならぬもの。それも明瞭である。安保改定阻止のための四、五月闘争は、さまざまなかあいの日和見主義に毒された方針と真に革命的な方針との対立を非常にはっきりと示したのである。したがって今回の大会は、四、五月闘争を総括しながら、主として既存の

☆われわれの機関誌は理論的正当性以外にいかなる権威もみとめない。読者諸氏の積極的な紙面への参加をおねがいしたい。いかなる批判であれ内容のあるものは、喜んで検討する。

共産主義 第三号

発行日 一九五九年六月一日 (年六回 偶数月の一日発行)

編集 共産主義者同盟書記局

発行所 リベラシオン社

練馬区豊玉北五の八の一 振替東京三七〇九九

印刷所 東銀座印刷出版株式会社

定価 一部 100円

年(六回) 五五〇円

☆定価、定期購読料ともすべて送料は当社負担。

申込は前金にておねがいます。

ラン行
ベオ発
シ社定
価80円
季刊

理論戦線

社会主義
学生同盟
理論
機関誌

第1号.....うりきれ

第2号.....残都わずか

偉大な闘争と奇妙な勝利 森 茂

―警職法闘争はいかに闘われたか―

学生運動の転機とはなにか?

―学生運動と社会主義― 熊谷信雄

激動・革命・共産主義 I

姫岡 玲治

第3号.....臨時増頁特価一〇〇円

安保改定反対闘争と学生運動

大瀬 振

学生運動―それはなにか?

―新たに学生運動に参加する同志へ―

岸本 健一

理論学習のために

『ドイツ・イデオロギー』と

マルクシズムの生誕

戸坂 出

激動・革命・共産主義 II

姫岡 玲治

戦後学生運動史ノート I

―五五年〜五六年―

熊谷 信雄

社会主義青年労働者同盟機関誌

労働戦線

B6判・40頁
隔月発行
定価 60円
1年 300円

第一号

合理化反対を春闘の柱に

賃金闘争の革命的立場と改良的立場山本五之助(全国金属)

〔座談会〕春期闘争と今年の労働運動の展望

国鉄中執・細井宗一 炭労政治部長・土屋正則
全金書記長・松尾喬 全電通・大西諒

労働者の目・世界と日本

労働者は世界情勢をいかにとらえるか

ジョン・リード「世界をゆるがせた十日間」を讀んで

学習欄「なぜ経済を学ぶのか」

第二号

労働運動の危機とはなにか

春闘総括と改良主義批判

〔座談会〕日本労働運動の進むべき道 ―春期闘争批判―
国鉄、全電通、電機労連、全金属、自治労、労組員
他社青労同常任書記局員

全電通の春闘はどう裏切られたか

労働者階級は安保改定反対闘争をどう闘うべきか
労働者の目・世界と日本 フルシチフとナセル

学習欄 合理化の背景と問題点

共産主義とはなにか

ほんの紹介 斎藤一郎「戦後日本労働運動史」
細谷松太「日本の労働組合運動」

職場の発言 電機労連丁君・国鉄某青年部の意識調査

本郷博(全電通)

小川忠巳

柴田規雄

荒川 元

森田 実

柴田規雄

森 茂